

皆圓寺

息長村大字能登瀬にあり、明向山と號す、往古は天台宗にして、小字寺ヶ谷にあり、明向院と號せしが、元龜の亂に兵燹に罹り、堂宇灰燼に歸せり、住僧信乘小庵を結び、本願寺澄如上人の時、改宗して眞宗となり、明向山皆圓寺と稱す、

淨宗寺

同村大字西圓寺にあり、大雄山と號す、古へ天台宗にして、西圓寺東の坊と稱す、明應年中僧道榮眞宗となり、淨宗寺と改む、

岩長寺

同村大字新庄にあり、古へ淨光庵と稱する禪刹ありしが、安永二年同庵を伊香郡落川村に移し、同村の岩長寺を其故地に移して建立せり、

寶福寺

同村大字箕浦にあり、往古は天台宗にして、誓願寺と稱す、僧行祐覺如上人の時眞宗と爲る、蓮如上人御巡錫の時、隨從布教に盡す、故を以て自畫自讚の御影、并に正信偈文八句二軸の染筆を賜ふ、元和元年大坂落城の時、豊臣方の浪士を隱匿せし罪により、誓願寺斷滅せしめ、河内國大井村に移住されたり、其時一族法音なる者當地に止まり、後里

人と協力して草堂を結びしが、元祿十年寂如法主より願により、箕浦村惣道場正源寺と許され、後正徳二年六月二十日、寶福寺と改號允許あり、同年より毎年本山にて執行さるゝ祖師報恩講、并に蓮如上人正忌日の兩度、非時の御頭を申附けらるゝ例となれり、

明德寺

同村大字岩脇にあり、古へ天台宗なりしが、天保二年十一月、眞宗に改宗す、

本授寺

息鄉村大字番場に在り、楓樹山と號し、楓樹を以て世に知られ、楓寺の稱あり、建曆の頃、山城國深草の僧にて慈眼坊と稱するもの此地に來り、赤兀谷に草庵を結び、天台道場とせり、八世覺祐は美濃岩村の人なりしが、僧となりて可乗坊と稱す、後蓮如上人に歸依し、眞宗となり、本授寺と號す、本寺の寶物に蓮如上人二字、金森道西四字交せ書の名號あり、現存す、

正蓮寺

鳥居本村大字宮田にあり、大日山と號す、元天台宗なりしが、永正年間僧願正轉派して、眞宗に歸す、

明願寺



同村大字莊嚴寺にあり、瀧本山と號す、元天台宗なりしが、僧寶永に至り、同郡箕浦村(長息箕浦大字)誓願寺の末寺となり、天文十一年轉派して眞宗となる、夫より明願寺と稱す、

淨琳寺

同村大字原にあり、老谷山と號す、古へ天台宗にして、犬上郡正法寺村長光山正法寺末北谷淨林院と稱せり、天文の頃眞宗に歸依し、證如法主より法名を教西と賜はり、天台宗を改めて眞宗となす、是れを當寺の開基とす、

安立寺

同村大字小野にあり、慶長六年の開基にして、寶珠庵と號せしが、元祿二年今の寺號と爲る、

專宗寺

同村大字鳥居本にあり、洞泉山と號す、往昔聖德太子三十七歳の自像を彫り、近臣橘晴方に給ふ、晴方出家して慧明と稱し、此地に來りて、久治ヶ鼻に一字を建て、泉山泉寺と號せしが、僧了明の時眞宗に轉じ、寛永十七年正月、洞泉山專宗寺と改む、

上品寺

同村大字鳥居本にあり、元天台宗なりしが、明曆二年轉宗して眞宗に歸す、有名なる法

界坊の釣鐘は此寺にあり、此れ法界坊了海が明和六年江戸市中を勸進して鑄造せし奇鐘なり(挿圖参照)法界坊傳は人物志に記す、

教覺坊

同村大字善谷にあり、建仁年中の創立にして、梁心山石岸寺と云ひ、天台宗なりしが、永正の頃眞宗に轉じて、光輪坊と改稱せしも、慶長年中更に教覺坊と改められたり、

源隆寺

入江村大字梅原にあり、古へ天台宗にして、善後寺と稱せしが、元和年間眞宗に轉じ、今の地に移れり、

願乘寺

同村大字中多良にあり、古へ蘭華寺と稱し、南都興福寺の末寺にして、方二町の大刹なりしが、永享年間眞宗に歸せり、應安元年八月一日の銘ある古鐘存す、

稱念寺

同村大字朝妻筑摩にあり、古へ眞言宗にして、柳立山法善寺と稱せしが、中古兵火に罹りて廢亡せり、文明六年再建して眞宗に轉す、

正行寺



同村大字磯にあり、始めは彦根平田明正寺の懸所なり、蓮如上人長澤福田寺駐錫の時、此處に立寄りられしに、尼講中上人の馳走にて、雑魚鮓を献せしに、大に嘉賞せられしより、年々献上するの例となり、今に至るも止まず、正行寺の號は當時上人より命せられし所なりと云ふ。

### 德善寺

法性寺村大字飯村にあり、天正元年九月、淺井氏の臣伊部清兵衛爲利陣亡せし後、其子某此地に來りて僧となり、祐仲と號し、一寺を建立して、父の菩提を吊ふに始る、教如上人巡錫の途、正信偈八句を書きて授け給ひしにより、爾來寺寶とす。

### 蓮成寺

同村大字宇賀野にあり、此地古へ南都興福寺の別院歡喜光寺の在りし所なり、全盛十六字の僧房あり、(廢寺駐歡喜)當寺は即ち其一にして、法興坊と稱せり、蓮如上人の時眞宗に歸し、蓮成寺の號を賜ふ、境内に後鳥羽上皇の皇子雅成親王の墓と傳ふる古塔を存す。

### 福田寺

同村大字長澤にあり、布施山と號す、古へは忍海部莊布施村(今西黒田村)にありて、布勢

山息長寺成功徳院と稱し、白鳳十二年七月の開基なりと傳ふ、後天台宗となりしが、正安年間本着坊善顯本願寺の覺如上人に謁し、眞宗の正義を受け、法號を覺乘と賜はり、寺を眞宗に改め、福田寺と稱す、延元四年寺を長澤に移す、六世頓乘文安年間蓮如上人に從ひ、東國を巡錫せしが、其子宗俊亦上人に北越に從ふ、自筆の口傳抄及び御傳記を賜はれり、延徳年間上人當寺に駐錫ありしこと三年、親く道俗を教化せられしが、自ら壽像を畫き遺し給ふ、爾來毎年四月壽像を安置し、法要を修す、孔雀の間は上人の遺趾なりしも、癡頽して舊跡を存するなし、上人手植の松あり、蓮如松と稱す、老幹翠蓋境内の美觀なり、十一世覺藝の時、有名なる湖北の十箇寺騷動あり、十箇寺騷動とは元龜二年五月、江北十箇寺が顯如上人の命を奉じ、淺井氏を援け、織田氏を敗らんとせし戦をいふ、(中卷第九編)當時覺藝は四千人(織田軍記には四千五百人あり)の門徒を率ひて、堀氏の鎌羽城を攻めしが、木下秀吉の爲めに敗られたり、十二世正藝と幼名萬菊丸と稱し、淺井長政の遺子なり。

小谷落城の時、小川傳四郎、中島左近、能一人附添ひ、小舟に乗じて湖岸を周り、長澤の浦蘆原に隠れ、暗に乗じて當寺に入れり、覺藝發ふて子となす。

十九世法覺は本願寺法如上人の五男にして、寶曆年間此寺に入りて嗣と爲る、是より



連枝地として長澤御坊と稱す、第廿世文觀は井伊直孝の男なり、文如上人の猶子にして、此寺に入りて嗣を繼ぐ、廿一世本成は文觀の弟にして、本如上人の猶子となりて嗣となる、此時文政二年臺所を新築す、井伊侯の寄附にして、構造宏大なり(棟行十八間 梁行九間)廿二世本寬は本如上人の猶子なり、稟性明達聽敏にして學を好み、智徳倫に絶し、深く佛經に通曉す、又和漢古今の外典を涉獵して、博學洽聞、最も書に巧にして、詩歌をも善くす、嘉永五年三月彦領院家中の需に應じて、彦根明性寺に於て二卷鈔の判教門を講讀す、又本願寺の命に依りて、眞宗法要典據の序文を誌す、厚く宗義を確守して、絶世の高徳たり、文久元年正月寂す、攝政關白左大臣從一位二條齊敬公の妹鋪子入與す、廿三世澤祐廣如上人の猶子にして、井伊直弼の女侍子入與す、此時慶應年間下馬札を許さる、大津縣より當寺を以て觸頭となし、又滋賀縣より寺院取締を命せらる、明治十一年明治天皇北陸御巡幸の時、當寺に於て御小休あり(第二編 參照)同年十一月當寺住職は京都禁内に於て拜謁を許さる、同十二年四月、宮内省より兩陛下の御眞影を拜戴し、十八年本山より別格寺と定めらる、同廿年御尊牌安置の許可を受くる等、著名の事蹟少からず、

得法寺

神田村大字加田にあり、湖東山と號す、古へ天台宗にして、本龍寺と稱し、延慶元年三月、

大鳥居氏九十九入道徳法院本龍の建立なり、文明十一年十月二十二日、住僧了善眞宗に歸し、寺號を得法寺と改む、

安明寺

神田村大字加田今に在り、龜岡山安明寺と號す、文明十年十一月堂宇を建立す、順如上人彌陀如來の像を賜ふ、明曆三年五月三日、良如法主の時木佛許可せられ、享保二年本堂を再建す、寺藏の佛像裏書に文明十年十一月三日、釋順如近江國坂田南郡十一條郷今村云々と記さる、

金徳寺

西黒田村大字常喜にあり、古へ天台宗にして、芳草山常喜院と號す、延徳二年蓮如上人長澤福田寺駐杖の時、歸依して眞宗に轉す、元龜二年兵火に焼かれ、再建の後金徳寺と改む、

常德寺

同村大字鳥羽上にあり、古へ天台宗にして、常光山法徳寺と號す、元龜二年織田氏の兵火に罹り、堂宇灰燼となる、天正元年再建して、常德寺と改稱す、慶長七年眞宗に轉す、正保二年住僧淨海の時、板木村淨願寺に歸依し、檀那寺とす、



教圓寺

同村同大字にあり、古へ鳥羽山教圓坊と稱し、天台宗なりしが、大永年間戊亥村(六莊村)福勝寺の住僧に歸依し、改宗して真宗となる、永祿二年雷火の爲めに焼失し、住職教圓も焼死す、依て本尊を七左衛門の家に移せしが、後堂宇を再建せり、爾來福勝寺下道場と稱せしが、明治維新の際教圓寺と號す、

長源寺

西黒田村大字本庄にあり、寛弘年間の創立にして、天台宗なり、初め權少僧都普賢此土に來り、本庄寺奥堂に留錫す、長元七年六月、普賢別に一寺を開き、普賢山長元寺と稱す、永正年間住僧惠信真宗に轉じ、同十一年今の地に移りて長源寺と改む、慶安年間一旦大谷派に屬せしも、同四年三月再び本派に歸す、

了廣寺

同村大字名越にあり、古へ名超寺四十九院の一にして、梅本坊と稱せしが、延徳年間蓮如上人長澤福田寺御駐錫の砌、其教義に歸し、終に真宗となる、上人爲めに阿彌陀佛一軀、六字名號を賜ふ、元龜二年兵火に罹りて焼失す、爾來荒廢に委せしが、僧宗善高德の

人なりしかば、大坂講中等より大に淨財を喜捨して再建せしに、享保八年六月二十二日、再び回祿の災に遇ひ、元文四年現今の堂を建つ、

圓立寺

同村大字齒原にあり、正治年間後鳥羽上皇の近臣池三左衛門清宗、此地に止まりて土民となる、元龜の亂布施寺兵火に罹りし後、其子孫出家して正賢と稱し、當寺を建て、真宗に歸す、

福勝寺

六莊村大字大戊亥にあり、神龜元年五月、僧行基の建つる所にして、法相宗なりと傳ふ、弘長年間輪宗和尚親鸞上人に歸依し、真宗となる、上人爲めに八十九歳の壽像を授けらる、後蓮如上人御巡錫の途次淹留せられたる緣故を以て、文明六年八月、親鸞上人左上の御影を下し賜へり、十一世超宗の時、顯如法主の命により、三千餘人の門徒を率ひて、淺井氏を援け、織田氏の將堀氏の城を攻めしも、秀吉の爲めに敗られたり(中卷第九篇第三章)、天正九年六月、顯如法主伊吹御登山の時、光壽法印准如上人を隨へ、當寺に寄駕あり、笠置山の號を給ふ、天正十一年羽柴秀吉、境内禁制札を建て、寺内に亂妨狼藉なからしめ、又境内の周圍に山林三町歩を附與せられたり、文祿四年三月二十九日、淺野彈正長



吉が當寺に寄せし文書に、北郡下坂福勝寺船壹艘之事と題し、淺野氏が大津城にありし時、當寺の持船に對する許可をなせり、當時の勢力思ふべし、寛永十六年長濱大通寺創立以前は多數の末寺ありしが、大通寺建立の爲め末寺を大通寺に分配され、爾來僅に二十二箇寺の末寺となれり、明治七年境内の幾部を返上し、同十二三年の交更に盡く末寺の關係を絶つに至れり。

### 願徳寺

同村大字勝にあり、永正二年の創立なり、古へ經田寺の住僧義性、蓮如上人に歸依し、改宗して堂宇を建つ、當寺に藥師如來の古像あり、行基の作と傳ふ、毎年正月八日開扉し、村中より鏡餅を供ふるの古例あり、古への經田寺の佛像か、

### 眞福寺

同村大字高橋にあり、古へ天台宗なりしが、明應年間蓮如上人に歸依して眞宗となる、後安永年間火災あり、舊記悉く灰燼となる、

### 淨願寺

南郷里村大字板木にあり、古へ天台宗にして、慈徳院普願寺と稱せしが、正和三年住僧了存、宗昭法印に遇ひて、専修念佛門に入り、眞宗に轉ず、五代善照坊の時、淨願寺と改む、

江北の巨利たり、元龜二年住職勝理の時、顯如法主(光佐)の命に依り、江北十箇寺の門徒を率ひて、淺井長政の爲めに、織田信長の部下堀秀村、新庄直頼等を攻めたり、當時の勝理は一千五百人の門徒を率ひて戦ひしも、羽柴秀吉の爲めに敗られたり(中卷第九篇第三章參照)

### 因乗寺

神照村大字國友にあり、法雲山と號す、古へ天台宗なりしが、永享十年三月、住僧道了、蓮如上人に歸依し、眞宗に轉ず、延寶七年七月の檢地帳に、屋敷壹反四畝貳拾七步、本願寺宗因乗寺境内、但寺建有り、右屋敷は慶長七寅年板木田清右衛門、戸嶋作右衛門檢地の時分より除き來り、古水帳にも無之、前々より除地に紛無之に付、此度も除之と記され、たれば、境内除地の古きを知るべし、

### 憶念寺

同村大字小澤にあり、古へ大安寺と稱し、眞言宗なりしが、永正六年三月、住僧圓珍の時、實如上人に歸依して眞宗となれり、

### 金法寺

同村大字南方にあり、承和二年の創立にして、天台宗なりしが、仁治三年眞宗に轉ず、元金光寺と稱せしが、天正八年金法寺と改稱す、



第七章 眞宗大谷派寺院縁起

五一四

勝專寺

柏原村大字柏原にあり、古へ覺勝寺と稱し、天台宗なりしが、元和八年勝專寺と改め、舊寺號を山號と爲し、眞宗大谷派に改む、爾來法主の中仙道巡錫の際は、當寺の住職先驅を爲すの例あり、堂後に古碑石あり、

見瑞寺

同村大字大野木にあり、明應七年九月、三好筑前守の臣福井明則入道して淨惠と號し、開基する所なり、龍雲山と號す、

徳願寺

同村同大字にあり、大樹山と稱す、古へ眞言宗の古刹なりしも、天文年中兵火に焼かれ、爾後一草庵に過ぎざりしも、元和年間眞宗大谷派に歸依し、舊名に因み、大樹山徳願寺と稱す、現在の堂宇は文政年間の再建なり、

善證寺

同村同大字にあり、紫金山と號す、天正十年六月、誓道法師の開基にして、蓮福寺と稱せ

しが、貞享二年四月、善證寺と改む、慶長五年教如上人、膽吹山を越え、美濃國春日谷に避難せられし際、上坂村授法寺と共に道案内を爲せしより、以來代々大谷派法主遷化の時は、御輿附を命せらるゝの例となれり、

立勝寺

春照村大字大清水にあり、大泉山と號す、古へ眞言宗なりしが、屢々兵火に罹りて衰頽す、永正十三年住職法順眞宗に歸し、後大谷派となる、

光了寺

同村大字藤川の内寺林にあり、至徳元年一字を建立し、應永三十年更に寺觀の美を添へしが、天正年間兵火に罹りて焼失し、爾來廢寺となりぬ、其後福永甚内、光了寺を再建し、眞宗大谷派に歸す、

長圓寺

伊吹村大字上野にあり、露城山と號す、開祖淨玄は平太夫と稱し、淺井亮政の臣なり、元龜元年姉川の戦利あらず、僅かに身を以て逃れ、佛門に歸し、薙髮して淨玄と稱し、一堂を建立す、慶長五年六月二十二日、教如上人石田三成の爲に難に美濃に遇ひし時、淨玄謀を献じて事なきを得たり、上人其功を賞し、長圓の寺號を下附せられたり、



念願寺

同村同大字にあり、寛文五年七月、本山より本尊を請じ、延寶五年寺號の公稱を許されたり、相傳ふ古より著名の寺院なりしが、中古屢々兵火に罹りて燒失せりと、

翠巖寺

同村大字伊吹にあり、文明年間類焼に罹り、古記録を燒失せしを以て、開基創立詳ならざれども古へ密宗の古刹なりしと傳ふ、

講善寺

同村大字小泉にあり、應保年間の創立にして、長尾護國寺の末寺なりしが、天正年間教如上人巡錫の當時、大谷派に轉じ、貞享二年講善寺と改稱す、

松音寺

同村大字大久保にあり、往古は長尾寺四十九坊の一にして、池の坊と稱せり、中古兵火に罹り、住僧は歸俗して、次郎太夫と稱し、農業に従事し、長澤福田寺の門徒となりしが、後更に僧となり、善徳と稱し、天正十八年三月、一堂を建てたり、寛文八年四月大谷派に歸す、

大久寺

同村同大字にあり、大窪山と稱す、源賴朝の臣堀親家此地に流寓し、薙髮して一寺を建て、天台宗に歸せしが、慶長年間、住職誓玄、教如上人に歸依し、大谷派に轉す、

福願寺

東黒田村大字志賀谷にあり、古へ天台宗なりしが、天正年間、眞宗に轉じ、寶曆三年十一月、更に大谷派に轉す、享和二年五月、領主水野丹後守の菩提所となれり、當寺傳來の寺寶に古轡あり、これ天武天皇壬申の亂の時の遺品なりと傳ふ、

了敬寺

同村大字大鹿にあり、古へ天台宗にして、願勝寺と稱す、天文十年八月、眞宗に轉じ、宣如上人の時、大谷派と爲る、天保十二年、領主加藤越中守の歸依厚く、故に同家歴代の位牌を安置す、

淨休寺

同村大字本郷にあり、古へ十善寺と稱し、天台宗なりしが、元龜の兵火に罹り、堂宇烏有に歸せり、後眞宗に轉じて、寺號を淨休寺と改む、

眞入寺

同村同大字にあり、古へ天台宗なりしが、中古衰頽して無住となり、三田村出雲之を管



理せり、後真宗大谷派に轉じ、萬治二年十二月、眞入の寺號公稱を許されたり、

### 長樂寺

同村大字長岡にあり、古へ東福寺と稱せしが、天正年間兵火に罹り焼失す、後一字を再建し、長岡山長樂寺と稱し、眞宗大谷派となれり、

### 等倫寺

醒井村大字一色にあり、天正年間の創立なれども、寛文年間火災に罹り、舊記悉く焼失す、堂後に接續して古墳存す、

### 源海寺

同村大字醒井にあり、教如上人の時、本郡能登瀨村の山出光圓寺の祐順なるもの、同上人に歸依して、此地に寺を建てたりしより創れりと傳ふ、

### 正福寺

同村大字技折にあり、古へ天台宗なりしが、延寶四年眞宗大谷派に轉ず、

### 皆圓寺

息長村大字能登瀨にあり、古へ天台宗にして、伊香郡渡岸寺村にありしが、慶長年間住僧淨念教如上人に歸依し、寺を本郡藤川村(春照村大)に移せしが、宣如上人の時更に現

今の地に移り、皆圓寺と改稱す、

### 永福寺

同村大字箕浦にあり、古へ天台宗なり、長和二年三條天皇より三寶山惠福寺の號を賜ふ、慶長七年眞宗に轉ず、應永三十三年十二月八日の寺地寄附狀を存す、

### 一念寺

同村大字多和田にあり、歡喜山と號す、和田義盛の遠孫大田小源吾、豊臣秀次に仕へたりしが、秀次滅後浪士となり、此地に居住し、大田左源太と稱す、當寺の開基玄加は其孫なり、明暦元年六月、寺號公稱を許さる、

### 即往寺

同村同大字にあり、古へ天台宗なりしが、中興了海の時、眞宗大谷派に轉ず、

### 正覺寺

息鄉村大字樋口にあり、樋口山と號す、弘安八年樋口猶時、當地の庄司となり、來り住す、猶時四代の孫雪之助、猶友、薙髮して東の坊釋名信と稱し、眞宗道場を創立し、近郷の道俗を勸化し、正應五年堂宇を改築し、胎藏法身の佛像を安置す、

### 稱揚寺



同村大字番場にあり、古へ天台宗にして、廣揚寺又今福寺と唱へしが、蓮如上人巡錫の時、眞宗に歸依して轉宗す、慶長七年大谷派に歸し、稱揚寺と改稱す、

眞廣寺

入江村大字上多良にあり、古へ天台宗なりしが、正元元年太田廣政の男松若丸眞宗に歸依し、薙髮して親鸞上人の弟子となり、眞運と稱す、降て元龜の兵亂に逢ひ、寺觀悉く烏有に歸す、十一世淨念は美濃國岩手の城主竹中重治の弟にして、兄と共に處々に軍功あり、後薙髮して僧となり、上多良に閑居し、淨念と稱せしが、終に當寺に入りて法燈を繼ぎ、深く教如上人に歸依し、大に寺觀を復興す、永祿年中井伊直政未だ萬千代と稱せし時、今川氏眞を避け、處々に隠れし時、當寺に在ること二箇月に及べり、慶安年中長濱大通寺建立の際、盡力せし功を以て昇格し、爾來同寺の御馳走役となれり、

今江寺

同村大字朝妻筑摩にあり、古は玉川の北岸にあり、僧行基の開基なりと傳ふ、永正年間兵火に燒失し、爾來空しく寺趾に其名を存せしも、里人等後年一の道場を建立し、舊名を冒せしが、明治八年寺院に編入す、

淨念寺

法性寺村大字世繼にあり、古へ一人の旅僧、一軀の佛像と一卷の經とを携へ來りて、當地に宿し、里人に與へて去れり、時人呼で一宿上人と稱す、後比叡山無動寺の僧來りて、堂宇を建設し、前記の佛像を安置し、護法山護念寺と稱せしが、長享二年僧了教眞宗に歸し、慶長年間更に大谷派に轉じたり、

教願寺

日撫村大字舟崎にあり、古へ名超童子の創立にして、後天台宗に轉ず、中古兵火に罹りて、一旦廢絶せしが、安賀某一小堂を建つ、元應年間眞宗に歸し、後更に大谷派に轉せり、

雲西寺

神田村大字加田にあり、永正年間開祖淨眞、實如上人に歸依して、此地に一堂を建てしが、寛永十八年玄秀更に寺觀を加へ、雲西寺と稱す、

薰徳寺

同村大字加田にあり、寛永三年開祖行春眞宗の一道場を建てしが、萬治三年薰徳寺と稱す、

心縁寺

同村同大字にあり、初めは道場なりしが、天和二年四月、木佛寺號を許され、心縁寺と稱す、



す、

### 吟松寺

西黒田村大字藪原にあり、古へ廣專寺と稱し、天台宗、布施村にありて、布施寺四十九院の一なりき、北條氏の旅行賢出家して賢海と稱し、當寺に入り、天正十四年眞宗に歸す、慶長元年廣專寺を吟松寺と改稱し、後大谷派に轉す、

### 宗樂寺

同村大字鳥羽上にあり、創立不詳、往古の委細を知る能はず、古へは天台宗なりと傳ふ、

### 田勝寺

同村大字常喜にあり、足利氏の中世小川左衛門尉の一子右京入道して乘嚴と稱し、此地に禪刹を建立して、中の堂と稱す、二代超關の時、蓮如上人に歸依して眞宗に轉す、上人爲めに淨順の名を賜ふ、顯如上人の時更に田勝の寺號を賜ふ、當寺本尊阿彌陀如來の木像は、古へ靈仙寺阿彌陀岳に安置せられし古像なりしが、後年尾鼻村(能登郡)の能登郡大林寺に移し、更に枝折村に轉せしが、終に當寺に安置さるゝに至れり、明治二十六年五月、臨時全國寶物取調委員九鬼隆一氏より鑑査狀を下附されたり、

### 圓法寺

同村同大字にあり、古へ天台宗にして、北の堂稱名寺と號す、文明年間富田八郎左衛門出家して道宗と稱し、當寺を繼ぐ、同十六年天災に罹り、堂宇荒頽せしを以て、北の堂を今の地に移し、本堂を改建す、天正十年眞宗に歸し、寺を圓法寺と改む、

### 長源寺

同村大字本庄にあり、古へ天台宗なりしが、元龜年間兵火に燒失す、慶安四年四月、僧慶運現在の地に移り、再建して眞宗大谷派に歸せり、

### 持專寺

同村大字八條にあり、古へ天台宗にして、上の坊唯心院と號す、後元龜の兵火に罹りしが、慶長年間教如上人の時、眞宗に轉じ、寺號を持專寺と改稱す、

### 大雲寺

六莊村大字田村にあり、古へ西方寺と稱し、天台宗なりしが、天正の兵火に罹りて燒亡せり、後淺井氏の族入道して西方寺を再興し、名を長福寺と改め、眞宗に轉せり、享保二年三月、幕府長福の二字を改む可きを命せしにより、更に大雲寺と改稱す、

### 福泉寺

南郷里村大字七條にあり、當寺は元三箇寺を合併して、明治四十四年七月十七日、始め



て福泉寺と稱す、元來當大字に眞教寺、西教寺と他に一道場とありしが、明治四十一年一月六日、眞教寺と道場との合併を爲し、七條寺と稱せんことを出願せしに、同四十二年三月二十四日附許可ありしが、同四十四年五月十日、更に七條寺と西教寺を合併し、改めて福泉寺とせんことを出願し、終に七月十七日許可せられたり、合併以前の眞教寺、西教寺共に其創立は延元二年正月なりと傳ふ、

光覺寺

南郷里村大字板木にあり、觀應二年正月、天台の僧法輪、當地に遊化して一字を建て、大正寺と稱せしが、文明三年住僧光覺、蓮如上人に歸依して眞宗となれり、常如上人の時光覺寺と改稱す、

極性寺

同村大字南小足にあり、古へ天台宗なりしが、文祿元年眞宗に轉じ、慶長七年三月、更に大谷派に屬す、

順慶寺

北郷里村大字西上坂にあり、文曆元年善融法師の創立する所なり、善融は左大臣三條實房卿の嫡男なり、初め天台に登りて修學し、大僧都理圓と號す、後年柏原成善提院

に住し、去りて長久寺(柏原村大字長久寺)に轉住せしが、更に此地に移りて一寺を創立し、長久山順慶寺と稱す、親鸞上人の教化に歸し、名を善融と改む、父實房卿も亦佛道に入り、薙髮して靜空と號し、建保五年五月自から彌陀の像を畫きて諸人に授く、銘に曰く、

依有夢想告、刻彌陀佛像、自寫授諸人、願俱生安樂、

建保五年五月十五日 念佛宗末學沙彌靜空

と此銘當寺に存す、晚年實房卿當寺に薨す、墳墓境内に存す、爾來眞宗の名利として、遠近の末寺其數多し、元龜二年顯如上人の時、江北の十箇寺に撤し、淺井氏を援けて織田氏の兵と戦はしむ、當時の住職珍乘、五百餘人の門徒を率ひて、堀秀村の居城を攻む、羽柴秀吉の爲に敗られ、珍乘は箕浦に戦死す(長村大字箕浦)、十四代の住職善珍は、學徳高く能書にして、宣如、琢如の兩上人の師範を爲し、令名の聞えあり、終に惣坊主の首座を許されたり、文久元年三條實美公、菅原爲恭をして、當寺に存する實房卿の畫像を摸さしめ、自から銘して當寺に寄せられたり、銘文左の如し、

右三條左大臣實房公自寫尊容者、近江國順慶寺所傳也、爰奉爲先考三回追善生前御願奉摸刻、授諸人、乃至功德無邊、利益不限、

文久元年十月三日

右近衛權少將藤原實美



明治十三年七月、京都御駐輦の日、實美公當寺の肖像を召され、上覽に供されたれば、宮内省より侍從西四辻公業卿をして、當寺に就きて墳墓を驗せられ、併せて寺傳を奏せしめられたり。

授法寺

同村同大字にあり、古へ天台宗にして、一乗山法華寺と稱し、長元年間の創立なりしが、延元二年眞宗に轉じ、一乗山授法寺と改稱す、當寺は大野木村の善證寺と同じく、教如上人以來代々大谷派法主遷化の時は御輿附を爲す例あり(善證寺の項參照)

念力寺

同村大字保多にあり、康永年間楠氏の從臣某、本郡柏原成菩提院にて薙髮し、僧となり、龍道と稱せしが、後此地に天台の一字を建て、開扇庵と號せり、元和年中住僧正道、眞宗大谷派に轉じて念力寺と改稱す、

願海寺

神照村大字國友にあり、古へ天台宗にして、東の坊と稱せしが、天文二年眞宗に歸依して轉宗す、後延寶五年光雲山願海寺と改め大谷派に屬す、

遍増寺

同村同大字にあり、古へ天台宗なりしが、文明年間蓮如上人に歸依して、眞宗に轉せり、元龜の兵火に一山燒失せしが、後武田家の臣富岡七兵衛此地に住し、之を再建せり、慶長五年教如上人の難を救ひし功に依り、賞を賜へり、文政十年四月、時の領主松平甲斐守(郡山侯)の菩提所となり、年々米四十俵を寄附せらるゝの例となりしも、廢藩の後止む、

恭敬寺

同村同大字にあり、古へ天台宗にして、淨光坊と稱す、元龜二年兵火に燒失し、翌年再建す、天正元年眞宗に轉す、慶長年間住職正惠の時、教如上人當地に御駐錫のことあり、合掌山恭敬寺の號を賜ふ、承應二年由緒を以て、教如上人の畫像を下附せられたり、

了願寺

同村大字橋本にあり、蓮如上人の時開基了願の創立する所なり、開基の名を以て寺號とし、永久山了願寺と號す、

誓傳寺

同村大字新庄馬場にあり、古へ天台宗にして、頓宮山靈岳寺と稱せり、中古眞宗に轉じ、誓傳寺と改む、頓宮山の號は、後鳥羽上皇の頓宮となりしによりて名づけしと傳ふ、



淨覺寺

同村同大字にあり、明應八年の創立なり、貞享三年三月十七日、木佛寺號を免され、淨覺寺と稱す。

源光寺

同村大字下之郷にあり、古へ眞源寺の寺内にして、眞言宗なりしが、運如上人の時眞宗に轉じ、下之郷總道場と稱す、享保六年七月、源光寺の寺號を許さる。

淨願寺

同村大字相模にあり、古へ京蓮坊宗玄天台宗の一寺を建て、知足寺と稱せしが、後禪宗に轉じ、明應五年再轉して眞宗となる、元龜の兵火に燒失し、改建の後知足山淨願寺と改稱し、大谷派に屬す。

歸命寺

同村大字列見にあり、古へ天台宗の庵室なりしが、寛永四年住僧玄智、眞宗大谷派に改め、貞享四年一月木佛寺號を許さる。

金光寺

同村大字十里にあり、承和二年の創立にして、天台宗に屬す、仁治三年住僧良信親鸞上人の教化に歸し、眞宗に轉す、元龜二年五月、顯如上人檄を飛して、淺井長政を援け、織田

氏と戦はしむ、所謂江北十箇寺騒動是なり、此時當寺の住職教道は門徒二千人を率ひて、信長の將堀氏を攻めしが、羽柴秀吉の爲に大敗して、大坂に走り、江北の地平穩に歸したる年歸郷して、一字を今の地に建立せり、田中吉政の臣石崎若狭守等土地を寄附し、資を助けて工就るを得たり、天正十一年正月、羽柴秀吉境内禁制の札を建てたり、今猶存す、慶長年間教如上人、大谷派を分立されし時より、更に大谷派に屬す、秀吉の制札左の如し、

禁制

江州北郡福永

金光寺内

一當手軍勢亂妨狼藉之事、

一放火之事、

一諸事非分之族申進事、

右條々堅令停止畢、若違犯之輩在之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十一年正月日

筑前守花押

此下知狀は長澤福田寺戊亥の福勝寺上坂の順慶寺、榎木の淨願寺、箕浦の誓願寺等の



諸寺に等しく興へられたり、然れども右各寺に傳はらざるを以て、特に當寺の條に之を記す、

### 五村別院支院

神照村大字南方にあり、同大字金法寺は元大谷派に屬せしが、元祿三年九月故ありて本派は轉せり、當時四十餘戸の門徒は依然大谷派に歸依せしに依り、一如上人之を賞し、直參門徒として阿彌陀如來の像を下附せらる、是に於て元祿八年一堂を建立し、長濱大通寺の指示により、願養寺之を管せしが、明治十三年五月、五村別院の支院に變せり、

### 德滿寺

同村大字中山にあり、寛治三年四月、德滿法師の開基にして、天台宗なりしが、文明三年住僧良阿蓮如上人に歸して、眞宗に轉ず、寛永十三年十月、北野山德滿寺の號を許さる、

### 大通寺

長濱町御堂前にあり、靈壽院と號し、眞宗東本願寺の別院なり、寛永十六年三月の創立なり、初東本願寺第十三世宣如上人長濱に來り、當地の佳景に富み、北陸の要路に當り、人家稠密にして、布教上大に便利なるを以て、一大支寺を起さんとし、關東下向の際、將

軍家光の乳母春日局に此事を語りしに、局大に喜び、直に領主井伊直孝に告ぐ、直孝其封内の地なるを以て、直に八十四間の土地を寄附し、除税の地とす、是に於て法主は本山の舊御影堂をこゝに移し、又豊公の長濱城々門をも引き、一寺を建立す、今の大通寺是なり、山門高く聳え、大堂と共に同町の偉觀なり、

### 一心寺

同町大字東本町にあり、初め長福寺と稱せしが、後今の寺號に改めたり、

### 淨琳寺

同町大字南吳服にあり、もと東淺井郡尊勝寺にありしが、明應年間眞宗に歸依し、慶長年間今の地に移れり、

### 安淨寺

同町大字大手にあり、開基貞順は大和國郡山淨念寺の宗徒たりしが、宣如上人の常隨となり、上人の三男從高の大通寺に來りしとき、隨行し、後寺號を免され、一字を建立せしものなり、

### 願養寺

同町大字北吳服にあり、もと淺井郡小谷にありしが、淺井氏滅亡の後、今の地に移れり、



文明年中蓮如上人より六字の佛號を授與せられ、其後天文年中澄如上人より彌陀の畫像を請く、慶安三年十二月十七日、木佛の本尊を安置す、

### 善隆寺

同町大字祝にあり、寛政年間本郡上平寺(春照村大字上平寺)にありしが、京極氏亡びて後、淺井郡小谷山下に移り、元龜元年六月、淺井氏滅亡の後、當地に移れり、

### 眞行寺

同町大字船山にあり、往古天台宗にして、閑寂庵と稱せしが、明應三年中興了願、眞宗に改宗し、後更に大谷派に屬す、

### 眞願寺

同町大字神戸にあり、慶長年中尾張國中嶋郡萩原正瑞寺の前任職永敬、此地に留錫して、教如上人に上請し、寺號を免されて建立せしものなり、

### 勝福寺

同町大字祝にあり、文龜三年十二月十七日、坂田郡戊亥村(六莊村大字戊亥村)福勝寺の二男明西住職たりしが、後實如上人の時、寺號を免されたり、

## 第八章 眞宗佛光寺派寺院緣起

### 明源寺

柏原村大字柏原にあり、古へ天台宗にして、小字小山ヶ鼻にありしが、洪水の爲めに堂宇流失せしを以て、文龜元年今の地に移り、再建し、眞宗に轉じ、後更に佛光寺派に屬す、往古の寺地は黒印除地として傳はりしが、延寶五年檢地の節、一時有租地となりたり、然れども元祿十三年代官雨森庄九郎の盡力により、再び舊來の如く除地となれり、文化十二年領主松平甲斐守(郡山侯)の位牌を安置す、汲流山と號す、

### 正光寺

春照村大字村木にあり、古へ天台宗なりしが、天文三年三月、法覺坊の時、眞宗に歸依して轉宗す、後更に佛光寺派に屬す、西雲山と號す、

### 大樂寺

同村大字大清水にあり、古へ眞言宗にして、開基を頼眞と云ふ、明尊の時、親鸞上人當地に巡錫せられ、數日間當寺に駐宿あり、終に眞宗に轉ず、永正、元龜の際、兵火に焼かれ、爾後三十年間小堂を建て、道場を開きたりしが、寛永十七年佛光寺派に屬す、寛文十二年



十月、隨庸上人より大樂寺の號を賜はり、堂宇を改築して大に寺觀を加ふ、

教圓寺

東黒田村大字志賀谷の内加勢野にあり、永正九年の創立にして、天台宗なりしが、安永八年五月、眞宗佛光寺派に轉ず、

高禪寺

同村大字堂谷にあり、古へ天台宗なりしが、天正十年住僧道祐、眞宗に轉じ、後更に佛光寺派に屬す、明暦元年雲林山高禪寺と稱す、

法證寺

同村大字本郷にあり、古へ天台宗にして、黒田氏の菩提所たりし法泉寺の後なりと、寛文中住僧道念、眞宗佛光寺派に轉じ、寺號を法證寺と改む、

常性寺

同村大字菅江にあり、明治二十九年五月、同村大字山室より移して建立せし所なり、當寺の開基は細川頼滿入道圓信なりしが、寛永元年十一月、圓智の時眞宗佛光寺派に歸す、本尊胎藏十二光の彌陀佛は足利矢田判官より傳來せし古像にして、慈覺大師の作なりと傳ふ、末寺に定樂寺、圓通寺の二寺ありしが、弘化二年十月離れたり、

善覺寺

醒井村大字枝折にあり、古へ天台宗にして、大福寺と稱せしが、寛文年間善覺寺と改め、眞宗佛光寺派に轉ず、

善性寺

息長村大字能登瀬にあり、延喜年間の創立、天台宗にして、山津照神社(中古青木大梵の別當なり、本願房と稱す、山津照神社は延喜式内坂田郡五座の一にして、それより以前則ち貞觀八年に正四位下の神位を授け賜ひし事は三代實錄に記され、猶其以前天平神護元年に封六戸を充て賜ひし事も新抄格勅符に記載されたれば、本郡内著名の古社なること明なり、兩部神道の行れし世より、別當寺を置きて社坊と稱し、其寺僧をして神に奉仕せしむ、當寺が山津照神社の社坊となりし年代は今判明せずと雖も、曆應二年光嚴上皇の院宣に、明かに本願上人御房と記さるゝより推すも、其年代の古きを證すべし、(神社誌山津照)又青木神明丸と稱する奇藥は、建久年中住僧天海の創めし藥方にして、奇功あり、(鳥居本村神社丸は)此の如く朝廷を始め貴族及び武將が山津照神社を崇敬せられしを以て、別當たる當寺は益、隆運に向ひ、寺格高く、終に近衛家、綾小路家等の猶子となり、御祈禱札の如きは明治四年まで、綾小路家の執達により、年々典侍



御局へ献納するの例たりしなり、中古眞宗佛光寺派に轉じ、平尾山と號す、

五三六

### 明照寺

息郷村大字樋口にあり、多賀山と號す、開基年代詳ならざれども、明應四年二月十九日附にて、犬上郡甲良莊小河原村圓覺寺へ當寺の末寺として下せし寺號の折紙に據るも、足利氏の中世に著名の寺格なりしを知る、中古多賀左近入道して當寺に住し、大に衰運を恢復す、依て多賀山と號す、後眞宗佛光寺派に轉ず、

### 佛道寺

入江村大字米原にあり、正和年中僧覺佛の開基にして、天台宗なりしが、嘉曆三年了源上人當地を巡錫せらるゝ時、住僧本願佛光寺派に屬す、應永五年三月、本山より光明本尊を下附せらる、

### 明光寺

同村大字朝妻筑摩にあり、古へ天台宗なりしが、永徳年中住僧明佛佛光寺派に轉じ、正宗山明光寺と稱す、

### 喜光寺

同村大字磯にあり、元慶年間菅原道眞公の開基にして、堂谷山菅原院と稱せりと傳ふ、

中古眞宗佛光寺派に轉ず、

### 深光寺

法性寺村大字世繼にあり、古へ僧仁秀の開基に係る、興福寺の舊跡なり、了源上人の時、眞宗佛光寺派に歸し、深光寺の額を賜ふ、寛永二年隨庸上人當寺に駐錫せられし際、勝部源三郎景光入道して、春慶の名を賜はり、上人の弟子となり、堂宇を再建す、

### 佛嚴寺

六莊村大字室にあり、康永年間北條政氏の男丹波守盛房罪あり、薙髮して圓實と稱し、本郡八條村(西黒田村大字八條村)北の谷に一字を建てしが、應永十八年僧覺圓の時、堂舎を此地に移し、眞宗佛光寺派に轉ず、

### 佛願寺

同村大字平方にあり、保元年間の創立にして、地福寺と稱し、天台宗の巨刹なりしが、中古屢、兵燹に罹り、大に衰頽せり、天正十三年眞宗佛光寺派に轉じ、佛願寺と改稱す、

### 圓光寺

南郷里村大字加納にあり、古へ天台宗にして、顔戸村(日撫村大字顔戸村)にあり、嘉曆元年了源上人に歸依して、佛光寺派となり、四ツ塚村に移り(六莊村大字四ツ塚村)再轉して現今の地に移れ



り、

### 光臺寺

同村大字今川にあり、北條盛房入道圓實の開基する所にして、八條村宮谷にあり(西村  
八條)、康永年中今の地に移る、

### 佛心寺

神照村大字中澤にあり、古へ天台宗なりしが、仁治三年住僧明空、真宗に歸依して轉宗し、後更に佛光寺派に屬す、永祿、元龜の際淺井氏の信仰淺からざりしと傳ふ、

### 正光寺

長濱町大字永保にあり、古へ平方村(六莊村大  
字平方村)に在りしが、天正元年照光寺の號を許され、今の地に移りしが、後正光寺と改む、

## 第九章 時宗寺院縁起

### 長福寺

柏原村大字柏原にあり、東光山と號す、天平九年行基菩薩の開基にして、僧坊十二字あり、藥師佛を本尊とす、古へ奈良東大寺の末寺にして、東大寺三綱記に坂田郡柏原の側

にありと記す、輿地誌畧には今貳町餘の田圃の字名に藥師堂と稱する處にありしが、退轉して筑摩谷に小堂を建て、藥師佛を安置せしを、後今の地に移せしと見ゆ、此文三綱記と符合す、筑後國竹野郡司草野永平の弟永泰二男松王丸、出家して諸國行脚の時、當地の柏屋と稱する旅亭に宿せしに、亭に二女あり、松王丸に歸依して尼となり、其家を以て寺となし、時宗に歸せり、今番場蓮華寺の末寺なり、土俗柿の澤藥師と稱す、

小字藥師堂は明治八年地券改正の時、合併して東中海道と稱する中にあり(全郡小  
原村大字柏  
原の部参照)

按ずるに輿地誌略に聖武天皇天平九年の創立、行基の開基にして、方二町餘の大刹なり云々、又代々尼寺となりて繁昌せし舊跡なり、又本尊は國分寺の本尊なりなど記す、國分寺の本尊は總て丈六の大像なれば、今の長福寺の本尊とは異なれり、

### 龍澤寺

同村大字梓河内にあり、學性山と號す、草創の年代詳ならず、弘安年中僧一遍中興す、河内覺性の菩提寺なりと云ふ、

### 蓮華寺

息郷村大字番場にあり、時宗十二派の一なる一向派の本源なり、八葉山と號す、古へ法



隆寺と稱し、推古天皇二十三年に厩戸皇子開基の勝地にして、後法相宗の憲宗律師寺觀を加へ、七堂伽藍の巨刹なりしが、建治二年六月一日、雷火に焼失す、此に於て畜能、畜生の二法師一草堂を結びしが、弘安の初年一向上人俊聖、遊化の途留錫して道俗に說法す、時の領主にして鎌刃の城主土肥三郎元頼、上人に歸依し、剃髮して道日と稱す、住僧畜能、洪鐘なきを嘆じ、畜生法師をして諸檀を勸進せしめしに、土肥入道道日、又大に資を助け、遂に弘安七年十月、梵鐘を鑄造す、此鐘今存す、古雅愛す可し、鐘銘寫眞と共に上卷に記す、本郡三古鐘の一なり、嘉曆三年四月、勘料之内二貫六百七十文を念佛堂奉加の爲に免除されし文書あり、念佛堂はこれ太平記等に所謂番場の辻堂なるか、元弘元年四月、足利尊氏上洛の途次、京極道譽は尊氏を當寺に饗し、善盡し美盡せり(京極家譜)同年五月七日、京都六波羅の守將北條仲時、北條時益等兵敗れて東に走り、再舉を計らんと、光嚴帝、花園上皇、伏見上皇、及康仁親王を奉じて、同月九日當地に來りしに、近江、美濃の土兵等、膽吹山寺の覺靜法親王(守王親王)を奉じて、仲時等を要撃せり、仲時疲勞の敗兵を率ひて、又如何とも爲す能はず、一行四百三十餘人、米山の麓に於て屠腹して死す、鮮血流れて川を爲す、血川の名今猶傳ふ、悲酸の狀追懷するに餘あり、時の住僧同阿之を葬れり、死者の姓名を録す、有名なる蓮華寺過去帳是なり(中卷第六編第二章參照)其後碑を立てたり、

今存す(寫眞參照)當時は米山の麓即ち現今記念碑の所在地なりしが、井伊氏曾て仲時の碑を六波羅山に移す、蓋し六波羅の名は其れより起れるなり、明治二十二年十二月、記念碑建立の時、從士四百三十餘人の碑を今の境内に移す、五月九日仲時屠腹の當時、光嚴帝等御一行に從ひし公卿の中、大納言資實、大納言資名、中納言頼定は當寺にて警を斷ちて僧となれり(公卿補任)文明二年二月、細川山名の戰は京極對六角の争ひとなり、當寺其兵火に灰燼となれり、什寶傳はるもの少なし、同阿は明道上人と稱し、學徳並び高し、明應九年五月、瑞夢の祥あり、事を土御門天皇に上聞す、天皇即ち大學頭文章博士菅原和良をして、瑞夢の記を草せしめ、關白一條冬良卿をして淨書せしめ給ふ、今存在す、同年二月、世尊寺行高卿、當寺の勸進帳の序を書せらる、然れども戰亂の時運に際し、改築の堂宇は久しからずして又荒退せしにや、天文八年五月、淺井亮政が泉阿上人に送りし沙汰狀に、馬場蓮華寺錯亂に依りて退轉に及び、物體無く候、其隠れなき御寺の儀に候條云々と記して、勸進再建を進め、一には諸役を免除せり、永祿五年十月、正親町天皇繪旨を下して、國家安全資祚長久を祈らしめ給ふ、同十三年二月、治平禁制の掟を寄す(治平は誰なるか判明せず)天正二年十一月十二日、堀正光、堀田元充、連名を以て諸事出入の事を沙汰す(上卷古文參照)慶長五年九月二十五日、徳川家康當寺に宿し、境内禁制を下知す、當時家



康は牡丹の間にて住職より十念を授かりたり、後水尾天皇、青蓮院尊澄法親王をして、寺額を書せしめて下し給ふ、寶曆十年十一月十七日、世合光普山の時、參内して小御所に於て拜謁を賜はれり、爾來住職交代の時は、參内を聽さるゝ例となれり、總門の内人家十餘戸あり、明治以前は蓮華寺村と稱す、古へは關東奥羽に亘りて數十の末寺ありしも、漸次其數を減せり、當寺毎年七月十六日、踊り念佛を修するの例あり、左に二通の繪旨を記す、

宜奉祈國家安全寶祚長久者、依天氣執達如件、

永祿五年十月十五日

右中辨經光花押

來阿彌聖人

蓮華寺住持職事所、

勅請也、着香衣令參内、宜奉祈寶祚長久專佛法興隆者、依天氣執達如件、

寶曆十年十一月廿九日

左少辨伊光花押

蓮華寺住持含光上人御房

### 興善寺

神田村大字加田にあり、加田山延命院と號す、相模國藤澤清淨光寺の末寺なり、正應年

中他阿真教上人當國巡錫の時建立する所なり、爾後の來由詳ならず、

## 第十章 禪宗曹洞派寺院緣起

### 長命寺

柏原村大字柏原にあり、久遠山と號す、天長年間僧行基の草創する所なり、寺傳に曰く、蒲生郡長命寺の本尊觀世音と同材同作なるにより、寺名も亦同名なりと、中古衰頹せしが、郷士箕浦次郎左衛門、當村の内四百石を領するに至り、堂宇を再建して寺領を附し、竺山和尚を聘して開祖とし、菩提寺とす、後今須妙應寺の隱居所となれり、寶曆十一年三月、長州の士杉七郎左衛門、當地の羈亭に客死せし時、當寺の墓所に葬れり、七郎左衛門は今の子爵杉孫七郎氏の先なり、故を以て子爵は當地通行の節必ず展墓せらるゝを以て、牽て當寺の歸依淺からず、

### 久昌寺

同村同大字にあり、壽林山と號す、慶安二年壽林尼の開基にして、長命寺の末寺なり、壽林尼は淺井郡北池村の人出家して、當寺を建て、寺領を寄附す、

### 宗舜寺



同村大字須川にあり、憲孝山と號す、草創の年月詳ならず、承應三年の檢地帳に寺名を見れば、其以前なるは明なり、按ずるに古への菅生寺の寺中ならん、後寛保年間彦根清涼寺の昆山和尚當寺に退きし時、藩士長野十郎左衛門大に資を寄附して、寺觀を加へたり、

西福寺

東黒田村大字長岡にあり、石雲山と號す、創立年代詳ならず、今須妙應寺の末寺なり、天文元年京極氏梵鐘を寄附せしも、寛文四年之を改鑄せり、爾後衰運に向ひしが、正保年間龍溪宗之和尙、補巖宗綴和尚再興せり、此を中興開山とす、

萬松院

同村大字志賀谷にあり、享保年間阿原助太夫爲員の建立にして、虛庵普觀禪師を開祖とす、天明七年正月、水野美濃守正重(肥州)の菩提所となり、歴代の位牌を安置す、長壽寺、圓通寺、常樂院(堂)、正眼院(堂)等の末寺あり、

總寧寺

息長村大字寺倉にあり、安國山と號す、新庄俊名以來同家の菩提寺なり、其創立年代詳ならず、寛政重修諸家譜新庄氏の條に依れば、俊名より五代の主俊綱、文永元年

六十九歳にて死し、總寧寺に葬ると見ゆ、爾來代々葬地を當寺に定む、永徳三年六角氏頼當寺に歸依す、當時高德の僧通幻禪師在住し、禪宗に改む、享祿三年兵火に罹り、堂宇燒失せしが、新庄氏之を再建して、舊觀に復す、同家代々の墓碑境内に在り、

靈水寺

入江村大字梅ヶ原にあり、天平中僧行基の開く所にして、長隆山常樂寺と稱せしが、天台宗に屬せり、星霜を経るに隨ひ、堂宇殆んど荒廢す、承應年中彦根藩士庵原朝眞、三浦元親潮音堂一字を建て、資産若干を寄附す、藩主之を隨喜して、租税を免す、朝眞等尙本堂建立の意志ありしが、果さずして歿す、其世子朝辰意を繼ぎて本堂建築を計畫し、延寶七年成を告ぐ、茲に於て輪奐悉く具はる、釋迦如來を入佛し、僧江岸を引て開山に請す、就かず、師僧寶寒に譲り、自から第二世となる、此時天台宗を改めて曹洞宗となす、

青岸寺

同村大字米原にあり、往古不動山米泉寺と稱し、勢州丹生の内御厨子村正法寺の末派なり、創立年月詳ならず、延文年間京極道譽入道宿願ありて、法華經八軸を書寫し、其大尾一軸を當山に納め、武運長久の祈願所となす、住持朗牖不動と大尾(尾)と音訓相通するを以て、不動山を改めて大尾山となし、布止於山と稱せしむ、道譽當山に隱城を築き、名



を阿房舎四方隨樓と云ふ、今此處を北城と云ひ、古井尙存す、永和元年二月、六角氏頼當寺に來り、伽藍の荒廢を歎じ、大に修理を加ふ、氏頼常に御丈け八寸許の聖觀音を念持し、曾て身を離さず、戰時に及んで之を旗竿の裏に納めて出陣す、向ふ所利あらざるなし、康曆二年、絶海汝林禪師に語り、其念持佛を當寺本尊の胎中に安せしむ、是を腹籠の觀音と云ひ、又は旗竿の觀音とも云ふ、爾後門前の民家に寄託すること三十餘年、天文三年に至り、沙門龍溪檀族を勸化し、小堂を造營して、僅に本尊の供奉に充つ、爾後風霜一百餘歲、小堂また頽廢す、里人數輩本尊を奉守す、之をもろ徒と稱す、慶安三年、彦根大雲寺三代の住持要津、大雲寺を退きて當寺に遷る、偶、越前國伊藤五郎助、師を欽仰して大に復興を謀る、期年にして殿堂門廡皆整ふ、是より大雲寺に隸屬して、曹洞宗の末派となる、彦根藩主井伊直澄、山林及び佛供田を寄附す、師も亦衣資を擲ち、寺産の増殖に力む、庵原清閑丁夫を遣はし、墾開を助力す、碑を立て境界を定め、大に寺觀を加ふ、

### 阿彌陀寺

神田村大字加田にあり、無量山と號す、彦根長松院の末寺なり、草創の年代詳ならざるも、古へ天台の巨利なりしが、後曹洞宗に轉宗す、家哲仙公首座禪師開基にして、密仙宗補和尙を中興開祖とす、

### 德勝寺

六莊村大字平方にあり、土俗生駒の德勝寺と稱す、生駒氏の舊趾なればなり、當寺は元淺井郡山田村にあり、應永年間の創立にして、醫王寺と號せり、永正十五年、淺井亮政小谷城を築き、移り住するに及び、住僧龍山株源をして小谷山麓清水谷に移し、伊部、月ヶ瀬二村の内にて貳百石の地を寄附して寺領とし、菩提寺とす、天正二年、淺井氏亡び、羽柴秀吉、淺井氏の舊地を領するに及び、其城府を今濱(濱長)に移す、文祿四年、醫王寺を長濱城内に移し、長政の諡號德勝寺殿に因み、寺號を德勝寺と改め、井口村に於て寺領三十石を寄附す、當時の僧源秀は秀吉の歸依厚く、其子秀勝の師として尊崇せり、又祇園村(神照村大)の内法華堂屋敷を寄附せり、慶長十一年、内藤信成長濱に封せらるゝに至り、城内狹隘の故を以て、田町に方二町の地を劃して移轉せり、元和三年八月、德川氏寺領三十三石三斗の朱印を沙汰す、寛文十二年、淺井長政の百回忌を修するるとき、德川秀忠の室は淺井長政の女なる緣故を以て、德川氏は祭祀料を寄せたり、茲に於て領主井伊直惟、平方なる今の地に移さんと幕府に計りしに、德川氏は三千人の人夫を發し、大に工を起し、小谷山下清水谷にありし建築物をも悉く此地に移轉し、一山を整備し、盛なる法會を營みたり、爾來德川氏の緣故を以て、寺勢益々熾となれり、享保三年、長政の百五



十回忌を修するに際し、井伊氏又大に力を盡す、幕府は更に人工を命じ、一層寺觀を加ふ(楠の椽板幅三尺より五尺に至る)中御門天皇勅使を遣はし、長政に正二位大納言を贈り、且つ白銀五十枚白緞子御紋章附の幕を下し賜ふ、爾後淺井氏の年忌毎に特に皇室より御香料を賜はる例となれり、明治維新の後漸次衰頽して、亦昔日の壯觀を留めず、然れども亮政、久政、長政三代夫婦の木像を始め、淺井一族の位牌、過去帳等を存す、

### 第十一章 禪宗臨濟派寺院緣起

#### 西圓寺

息長村大字西圓寺にあり、大雄山と號す、古へは天台宗にして、寺中六坊あり、蓋し今の大字名は此寺號より出でしものなれば、往古の巨刹なりしを知り得べし、草創の年代詳ならざれども、寺後の山上を小字瓶原と稱し、往々管玉曲玉等を發見すれば、以て古昔より既に寺地たりしを知るべし、永徳二年十一月、足利義滿當寺に祈願所たるべきを沙汰し、應永十七年十一月、義滿更に祈願寺の故を以て、寺領安堵を沙汰す、長祿三年十二月、足利義政當寺々領に臨時の課役、段錢等を免する事を沙汰す、又今井氏の菩提寺となり、境内に墓碑を存す、元龜、天正の間、屢、武人の蹂躪する所となり、終に兵燹に罹

り、寺寶什器悉く灰燼となり、一旦廢墟となりしが、慶長年間光山玄明、舊趾に一寺を建てしが、元祿年間桂崖和尚の時、臨濟宗に轉宗す、

#### 少林寺

鳥居本村大字笹尾にあり、大慈山と號す、京都妙心寺の末寺なり、古へ天台宗にして、聖德太子の開基、笹尾寺と稱せし巨刹たりしが、天正年間兵火に罹り、堂宇燒失す、後正保三年彦根江國寺の拙山再興して、禪宗に轉じ、少林寺と稱す、

#### 多田幸寺

六莊村大字田村にあり、寛仁二年僧源賢の創立にして、天台宗の巨刹なりしが、壽永二年木曾義仲の兵火に罹り、諸堂灰燼となる、正應元年田邊光頼再興して、舊觀に復せしが、天正年間又兵火に罹りて燒失す、爾來一小庵を存するのみ、中古日蓮宗に轉じ、後臨濟宗となる、當寺は北國街道の要路に當るを以て、昔時戰亂の時代には、兵火の災を蒙りしこと少からざるべし、古文書の傳はるもの無きを以て、古來の由緒を詳にせず、然れども現地に臨めば、昔時の遺趾歴々として指摘するを得可く、竹根樹株の間、古代陶器又は石佛の散見するを認む、本尊藥師如來は明治三十八年四月國寶に列せらる、



### 良疇寺

五五〇

六莊村大字下坂濱にあり、弘長二年佐々木入道茂山道倫の開基にして、天山和尚を開祖とす。天山は博學高德の僧なりしが、偶、最明寺時頼微服して天下を巡察せし時、眺湖の風景に適するを以て、當寺に一宿を請へり。天山之を諾し、諸事を談せしに、時頼天山の凡才に非ざるを見、天山も又時頼の尋常人にあらざるを悟り、肝膽相照して留杖する數日、其袂を分つに及び、我は鎌倉の北條なりとて、連日の誼を謝し去れり。後鎌倉より彌陀三尊の靈像を寄せ、又佐々木氏に命じて、寺領として永久寺村六莊村大字永久寺に於て方三町の田を寄せしむ。爾來湖畔の名刹たりしが、元龜二年織田氏の兵火に罹り、堂宇悉く焼亡し、寺田も武家の爲に押領せられたり。後再建す。慶長七年檢地帳に寺地五反十九歩を除地とす。延寶の檢地亦古例に據れり。初め曹洞宗なりしが、十五世の時臨濟宗に轉せり。貞享、元祿の間大に衰頹せしが、寶永年間彦根龍潭寺の粹岩和尚入りて挽回の策を講じ、舊觀を維持せり。盛衰興亡幾回を経しも、時頼入道の寄せられし本尊は終に無事なるを得たり。座して太湖の眺望を縱にする絶景の處なるを以て、徳川時代北陸諸侯の輿を留めて當寺に憩ふもの少からず。俳人芭蕉句を刻す、曰く、四方より花吹よせて鴉の海。

## 第十二章 禪宗黃檗派寺院緣起

### 永明寺

柏原村大字柏原にあり、萬松山と號し、黃檗宗なり。寛文四年鐵牛和尚、小字峻尾谷に創立せしも、其地理良からざるを以て、天和年間獨心和尙、寺を小字菖蒲原に移す。然れども其地又濕地にして、俗塵に近きを以て、大樸和尚更に今の地を相して移轉せり。境内に櫻樹多く、又一根十三幹の奇松あり。

### 松尾寺

伊吹村大字上野の山中にあり、伊吹山と號す。古へ小高野と稱する處にあり、松尾童子の開基にして、法相宗なりしが、永正九年兵燹に罹り、堂宇悉く焼失す。爾後一小庵を結び、僅に本尊を安置せしが、貞享九年秀水禪師現在の地に移し、再建に着手し、永祿三年潮音禪師、古刹の荒廢を慨き、井伊氏の家老西郷氏等の助力を得、數宇を再興し、黃檗山萬福寺の末寺となれり。寛永七年火を失し、回祿せしも、文政年間更に再建せり。此地膽吹半腹に位し、俗塵到らず、水清く樹高くして、眺望に富む。神龍禪師曾て當寺の八景を撰す、曰く、



伊吹藥草 上杉瑞泉 東峰秋月 西嶺夕陽  
 鏡湖煙景 漁村夜燈 遠溪流水 隣寺晚鐘

成佛寺

息郷村大字三吉の堂山にあり、草創の年月詳ならざれども、古へより大寺なりしが、一旦廢絶せしを、享保五年十一月、自圓禪師再興せり。

第十三章 日蓮宗寺院縁起

妙立寺

神田村大字加田にあり、靈龜山と號し、本立寺の末寺なり、後鳥羽天皇の祈願所にして、正治元年の創立天台宗なりしが、後廢頽せり、延慶二年二月、日像上人弟子大覺等を率ひて、北國に下る時、當地平井友清の家に寓す、偶、伊藤筑前守勝重來り會し、上人の法話を聞き、法華宗に歸依し、上人を伴ひ、妙立寺の古跡を訪ひ、郷民と謀りて一寺を再興し、法華の寺院とす、正慶二年南北朝の亂に遇ひ、堂宇燒失せしが、大覺上人再び來りて舊觀に復す、東淺井郡井の口村神社の古鐘、并に野洲郡守山東門院の二王は在昔當院の所有なりしと傳ふ、境内の鳥羽櫻は後鳥羽上皇の植え給ふ所と稱す、寛永六年四月以

來、京都村雲御所(今は瑞龍寺)の祈願所として、該門跡累代の靈牌を祀れり、明治三十二年十月二十七日、村雲日榮尼公追福の爲め當寺に參拜せらる。

常昌寺

南郷里村大字新榮にあり、小足山と號す、正中元年日像上人の開基なりしが、後兵火に燒失して、荒廢の間にありしが、天文元年小足掃部常昌願主となり、日廣上人を聘して諸堂を建立せしに、同五年又兵火に罹りて、灰燼となる、常昌更に資を投じて再建せしが、後又燒失す、延寶六年日前建立し、文政十一年日生本堂を改築せり、明治二十九年七月、又火を失し、回祿數回什寶傳はるものなし。

妙法寺

長濱町大字南片町にあり、京都妙顯寺の末寺なり、天文元年の創立にして、元東淺井郡小谷村長尾山にあり、元龜二年兵燹に罹る、天正元年羽柴秀吉住僧日當をして當地に移らしむ、二世日示碩學の名高く、秀吉深く敬仰す、秀吉の姉瑞龍院日秀(京都村雲御所の祖)亦日示に歸依せり、天正四年秀吉の子次郎秀勝(實は信長の子とも云ふ)天死せしとき、秀吉日示をして當寺に葬らしむ、諡して本光院朝覺居士と云ふ、後小足村(南郷里村)の内にて寺領三十石を寄附して、亡兒の冥福を祈らしむ、明治五年長濱町大火の時、類燒の厄に遇ひ、堂宇悉



く烏有に歸す、故に今古文書の傳はれるものなし、當寺は瑞龍院日秀の縁故を以て、村雲御所の關係深く、徳川時代には住職の代替りの時、袈裟指貫等を賜ふ例となれり、境内に本光朝覺居士の靈牌堂あり、又畫像を存す、大正元年本堂を改築す、

### 第十四章 佛堂

#### 彌勒堂

柏原村大字柏原愛宕山にあり、元津嶋神社の境内にありしが、明治初年神佛分離して、現在の地に移す、彌勒佛を安置す、

#### 觀音堂

同村大字須川にあり、古へ菅生寺奥の院の本尊なりしと傳ふる十一面觀世音を安置す、菅生寺兵火にあひて退轉せしが、後現今の地に一堂を建て、彼の佛像を安置す、

#### 大日堂

同村大字大野木にあり、大日如來の大像なり、古へ膽吹山寺の佛像なりしを、山寺兵火に罹る時、山僧此像を負ひて、清瀧寺に移さんと此地に來り、力竭きて溪間に置く、土人等一小堂を山中に建て、安置す(今其地を古堂と稱す)寶曆年中八相宮の境内に移せしが、明治

初年今の所に移轉す、

#### 藥師堂

同村同大字にあり、古より藥師堂と稱し、藥師佛を安置す、慶長の檢地帳に境内を除地とす、

#### 阿彌陀堂

春照村大字高番にあり、往古大願寺と稱せし巨利なりしが、天正年間兵燹に罹れり、其時本尊のみは無事なるを得たり、寶永元年九月、一小堂を建て、之を安置す、慈覺大師の作なりと傳ふ、

#### 藥師堂

同村大字大清水にあり、古へより泉神社の本地佛なりと傳ふ、創立年代詳ならず、境内一丈五尺の老杉あり、

#### 毘沙門堂

伊吹村大字大久保の山中にあり、長尾寺の奥の院なり、本尊は唐の惠果の作なりといふ、毘沙門天の大像にして、非凡の作なり、

#### 毘沙門堂



大原村大字池下にあり、古へ長禪寺の佛像なりと云ふ、毘沙門天と不動尊を安置す(寺跡參照)

薬師堂

東黒田村大字萬願寺にあり、古へ村の南寺谷にあり、満願寺の佛像なりと傳ふ、文政五年三月今の地に移す、

阿彌陀堂

同村大字長岡にあり、古へ東福寺の本尊なりし阿彌陀佛の座像にして、約三尺の古像なり、東福寺は京極満信の草創せし古刹なり、

薬師堂

同村大字志賀谷にあり、薬師如來の大像なり、明治三十四年臨時全國寶物取調委員より鑑査狀を寄せらる、

観音堂

同村大字堂谷の山上にあり、古へ雲林山極樂寺の遺趾なり、安置の十一面觀世音は極樂寺の佛像なりと傳ふ、

坪江薬師堂

同村同大字にあり、弘法大師の作なりと傳ふ、

毘沙門堂

同村大字山室田圃の間にある小丘の頂にあり、本尊は古へ天台宗小倉寺の佛像なりと傳ふ、

地藏堂

醒井村大字醒井にあり、石造にして一丈二尺の巨大なる地藏尊を安置す、古へは清流の中にあらしを以て、尻冷し地藏と稱す、慶長年間石川日向守堂宇を建立し、巨像を其中に移し安置す、伊勢國關の地藏と共に有名なる地藏なり、俚謠あり、關の地藏と醒井地藏はさてもよく似た御兄弟か、

地藏堂

息郷村大字三吉成佛寺の境内にあり、古へ吉田五郎左衛門の崇拜せしものなりといふ、

毘沙門堂

同村大字樋口にあり、古へ天台宗の寺院ありしが、荒廢して本尊此堂内に存すといふ、

薬師堂

入江村大字上多良にあり、古へ本願寺と稱する巨刹ありし地なれば、同寺の佛像なり



と、又一説に往昔靈仙寺の佛像なりしと傳ふ、丈四尺の木像にして、傳教大師の彫刻なりと云ふ、慶長五年關ヶ原の戦前、此薬師佛に祈禱を爲せしを以て、戦争の翌日徳川家康は奥田藏人宛左の沙汰狀を寄せたり、

今度關原一戦に付、兵糧十石、怨敵爲調伏於薬師堂、一七日祈念被拔丹誠、祝意の至依て大刀一振遣はし候、以來薬師堂爲修覆、京、江戸、大坂、山城、近江、伊勢、美濃、越前、若狭、年々勸進免し候、猶井伊兵部可承候者也、

九月十六日花押

奥田藏人との

明治二十四年八月一日、本尊は國寶に指定せらる、

### 薬師堂

六莊村大字八幡東にあり、康保年間の開基にして、書寫山の性空が作りし薬師佛なりと傳ふ、永正十五年九月、兵火に灰燼となり、後享和二年八月、一堂を再建せり、

### 観音堂

同村大字下坂濱良疇寺の境内にあり、愛知郡瓦屋寺に古へより聖徳太子の彫刻し給ひし千手観音二體ありしが、寛政年間兩寺の住僧夢告ありて、一體を良疇寺の境内に安置せり、爾來抱瘡の観音と稱し、參詣祈願するもの多し、土俗下坂の観音と稱する是なり、

## 第十五章 廢寺趾

長久寺趾 柏原村大字長久寺にあり、古へ七堂伽藍の大寺なりしが、何れの世にか廢絶せり、今土地の小字に長久寺谷、大門、庵洞等の名を存す、長久寺の大字名も此寺名の傳はりしなり、

蘇生寺趾 柏原村大字柏原野瀬にあり、後廢絶して唯石地藏を存す、之を笠地藏と云ふ、これ往時の本尊にして、照手姫の笠を冠せし地藏なりと云ふ、

西覺寺趾 同村同大字(今停車場の構内)にあり、慶長八年八月、淨願法師の開基なり、文化十四年正月廢寺となれり、

寶生寺趾 同村同大字にあり(今永明寺の地)、天正十四年の檢地帳に、其所有地の少からざるを見る、興亡の年代詳ならず、

猶同檢地帳によれば、元道寺、勝明坊等ありしも、何れの世にか廢絶せり、能仁寺趾 同村大字清瀧にあり、京極高詮の菩提寺なり、今廢絶して地名に能仁寺谷を存す、清瀧寺の南谷なり、



勝願寺趾 同村同大字にあり、京極高光の菩提寺なりし處なり、今ジョガンジと稱し、柏杉の老樹ある地なり、

十二坊趾 同大字にあり、往時清瀧寺の塔中にして、萬徳坊、妙法坊、醍醐坊、成就坊、神藏坊、理教坊、勸學坊、西藏坊、中の坊、梅本坊、本住坊、金藏坊と云ふ、中世荒頽せしが、寛文中京極高豊大に修繕を加へたり、然れども後又漸時、廢坊となり、明治初年迄は六坊を存せしが、八九年の頃盡く廢絶す、

一乗坊趾 同大字にあり、眞言宗なりしも、何れの年にか廢絶せり、

妙樂寺趾 同村大字大野木石丸にありて、受勝山と號す、天台宗にして、應永二十五年八月、慶舜法印の中興にして、往古の緣起は知るに由なし、中興以來は成菩提院末寺なり、本尊千手觀音は行基の作なりと云ふ、又大野木氏代々の菩提寺なりと云ふ、古記詳ならずれども、古書によれば、元文四年には住僧ありしも、安永五年の古記には已に堂宇存するなし、此間四十六年間に廢亡せし者ならん、今僅に寺跡と墳墓を存す、

最勝寺趾 同大字小字末信にありて、曹洞宗妙應寺の末寺なり、當寺の創立不詳なれ共、正徳四年七月、泰溫和尙中興す、文政十年六月、回祿に罹りて再建せしも、漸次頽廢して又維持する能はず、明治二十三年寺格を岐阜縣今尾に譲り、今只寺跡を存す、

菅生寺趾 同村大字須川にあり、建久四年の建立にして、寺領七拾五貫あり、中世衰頽して、今寺屋敷、大門等の地名を存す、間、五輪塔、石佛等を發掘す、

上平寺趾 春照村大字上平寺にあり、其創立年代詳ならずれども、伊吹山寺百坊の中ならん、天和元年三月日、下部五郎八田進寄進狀に、字覺所谷寺中と記さる、一説に元龜の亂、彌高百坊の兵燹に罹りし後、山麓に移りて改建せしものなりと云へども、此説採るに足らず、天文七年九月、京極氏の臣黒田宗清、多賀昌運連名の文書に上平寺密藏院領云々、奉吊環山寺殿様御菩提之由被仰出候也とありて、環山寺殿は即ち京極高清算り、高算は永正十四年二月卒す、故に其菩提を吊ひ奉れりとの執達狀なり、此に據れば元龜以前に寺坊あるを確定すべし、猶木下藤吉、樋口三郎兵衛等數通の文書に見るも、當年有數の寺なるを知るべく、又元和二年正月八日にも、御廟所拜禮、御供養讀經可致勤仕事云々と見ゆ、按ずるに上平寺は初めは伊吹山寺の中なりしが、永正年間京極高算上平へ移館の後は、京極氏の菩提寺と爲りし者歟、然れども徳川時代中世後漸次荒廢して、今僅かに一小庵(杉木)の存するに過ぎず、廢絶の坊名は左の如し、

- 密藏院(學侶) 玉藏坊 菊圓坊 寶藏坊 成泉坊 念藏坊(文政三) 陽傳坊(文化)
- (廢年) 深貴坊



長幅寺趾 同村大字藤川にあり、創立年代詳ならず、享祿二年十月二日、細川清氏の同寺へ與へし文書によれば、如元上平江可令歸寺之由云々と神照寺無量壽院に傳へしめたり、是れ長幅寺は古へ上平寺中にありしを、一旦其寺中を分離せしに、更に上平の寺中に歸るべきを達せしものなり、衰廢の年代詳ならず、按ずるに暖水十六坊の中の一寺ならん。

十蓮寺趾 同村大字大清水にあり、創立荒廢の年代詳ならず、今十蓮寺の地名を存し、曾て石佛々器等を發掘せり、又頓行寺の小字名存す。

正明寺趾 同村大字杉澤にあり、創立年代詳ならず、相傳ふ北條高時の時、後醍醐天皇の皇子第五の宮暫く當寺に御幽棲し給ひし事ありしと、按ずるに伊吹の大平寺に幽居し給ひし守良親王(五の宮)が、或時御入寺ありしを傳ふるにはあらざる歟、其趾今法林院ある處なり、又小字眞經堂あり。

大願寺趾 同村大字高番の東南方に一帶の平地あり、此處を堂の森と稱す、古へ大願寺と稱する巨刹ありしが、元龜の兵火に燒失せられたりとて、今僅かに阿彌陀堂一字を存す、五輪塔石佛の出づるもの多し。

伊吹山寺趾(彌高百坊) 伊吹村大字彌高の山上二十町にあり、俗に寺ヶ嶽と稱す、相傳ふ古

へ觀音護國寺のありし趾なりとも云、觀音彌高何れも古への伊吹山寺にして、太平護國寺、長尾護國寺と併せて、伊吹四大寺と稱し、僧三修が仁明天皇の御代に登山して創立し、元慶二年二月十三日、定額僧と列せられし名刹なり、本郡古へより名僧大刹少からずと雖、官の定額に列せしは唯此の一の伊吹山寺あるのみ、豪僧三修が三冬雪深き此の伊吹山上に巨刹を創建し、遂に定額寺に列せらるゝ迄の設備は、如何に辛酸を積みしかを想像するに餘あり、僧最澄が比叡の開山と比べて、敢て遜色ある可らず、定額寺は勅願寺とは異なり、一定の數に列せらるゝ官寺にして、率ねもとは私寺なり、而して建立の本願主あるものなり、此伊吹山寺は當年三修の申牒に據れば、昔日深草聖皇(仁明天皇)一精舎を建しめ、藥師念佛を修せしむ云々とあり、此文より見れば、勅願の意なれども、陽成天皇の元慶二年に定額に列せられたれば、正しき勅願によりて開山せしに非ざる可し、此名刹も中古兵火に燒かれて、今只礎石を存し、空しく牧童牛蹄に踏荒され、開山三修の名さへ三朱と誤り傳へらるゝに至る、編者は日夕此山を仰ぎ、定額寺當時の盛觀を妄想し、殊に桑滄の感に堪えざるあり、三代實錄元慶二年の二月の條に曰く、十三日己卯、詔以近江國坂田郡伊吹山護國寺、列於定額、沙門三修申牒、少年之時、落髮入道、脚歷名山、莫不周盡、仁壽年中、登到此山、即是七高山之其一也、觀其形勢、四面計



絶、人跡希至、昔日深草聖皇(仁)令建一精舍、修藥師念佛、三修居止以降、歲月漸積、堂舍有數、誠非雲構庶幾靈山、望請天慈賜預定額、故從其所請、

中彌高寺趾 同村同大字今悉知院の谷東にあり、彌高護國寺が中古の兵燹に焼かれし後移りて、僧坊六宇及び觀音堂、鎮守社等を建立せし跡にして、土俗觀音山と稱す(觀音山は、觀音護國寺の舊趾なりともいふ)

峯の藥師 同村大字上野と大字伊吹との通路に當り一丘あり、石佛、五輪塔を集む、相傳ふ、古へ寺院の在りて繁昌の所なりと、

太平寺趾 我郡中特筆大書すべき一大名蹟なり、趾は是伊吹村大字太平寺一圓の地なり、太平護國寺は伊吹山寺の項に於て詳記したる如く、平安朝の初代に於て、豪僧三修の創立せし伊吹四大寺の一にして、本尊釋迦如來なり、近衛天皇康治元年行觀中興す、中古京極氏が愛知川以北六郡の地を分領するに及び、江北六郡の政所を此所に定め、太平の館と稱せり、故に名刹の地は又領主の政所を兼ね、後醍醐天皇の御代に龜山天皇の皇子守良親王落飾して、覺靜法親王と號して當寺に屏居せられ、元弘三年五月十日より十六日間、光嚴帝、後伏見上皇、花園上皇、及び皇太子康仁親王の行宮となれる名刹なり、

長禪寺趾 大原村大字池下にあり、松宮山と號す、僧房十三宇、本尊五大尊、明王は常勝大師の彫刻なり、淳和天皇天長六年常勝大師の開基にして、大和國寶生山の別院なりと云ふ、貞應三年大原重綱城を此地に築き、大に中興の美を添ふ、然れども元龜、天正の頃より大に衰退せしにより、慶長十一年十二月、領主日下家次、小堂を修して本尊を安置す、其棟札に曰、

不動明王者、自和州寶生山當長禪寺、令迎請云々、寶生舍利入水精之五輪、納尊體之胸、畢、雖然歲霜推移、而形像爲作亡滅、今令諸佛師造神本尊、建立一字御堂、而奉安置之、所爲崇重如件、

慶長十一年丙午十二月十三日

江州平方佛工法眼敬白

願主 日下家次敬白

双林寺趾 東黒田村大字菅江にあり、理合山と號せり、治承元年淨順坊の開基にして、天台宗なりしが、中古法華宗に轉せり、戰國時代に至り、大に衰頽して、當年の本尊は今僅に一小堂に安置せらるのみ、石佛五輪塔の多く路傍に堆きを見る、



道照寺趾 同村大字北方の南瓢葦山上にあり、金光山と號す、古へ僧行基當地巡錫の時建立せし處にして、虚空藏菩薩を本尊とす、中古廢頽して、今地名を院の平と云ひ、東南を堂の前と稱す、當年行基の歌なりとて傳はる、

から衣あふみの里をめぐり來て瓢やまべにすみぞめの袖

小倉寺趾 同村大字山室にあり、天台宗にして、小倉寺淨泉坊と稱す、今田圃の間にある小丘上に毘沙門堂あり、小倉寺の本尊なりと云ふ、九坊の趾存す、

此他同大字に傳常寺、正嚴寺、庵淨寺、常性寺等の寺跡を存す、

極樂寺趾 同村大字堂谷にあり、雲林山東光院と號す、相傳ふ天平寶字六年四月の創建にして、仁和三年圓珍僧都中興せし名利なり、全盛二十六院あり、堂谷村の村名依て起れりと、建久中後鳥羽上皇名超寺に行幸の時、當寺に臨幸あり、法華塔を建立し、寺觀を加へ、公田を寄附せらる、佐々木氏歷世崇敬あり、寺領を附す、中古兵火に罹り、堂舎灰燼に歸す、里人之を再建せしも、元龜元年又火災に罹り、以來舊觀に復せず、僅に一小堂を存し、十一面觀世音を安置す、今土地の小字を大堂と云ふ、

法泉寺趾 同村大字本郷の東方天正山麓にあり、黒田伊豫守世々の菩提寺なりしも、其後衰退して今僅に其遺跡を存す、土人往々古瓦を發掘す、

滿願寺趾 同村大字萬願寺大平山の北方にある谷にして、京極高敷の菩提寺なり、中古頽廢して藥師堂一字を存せしが、文政五年三月十二日、今の地に小堂を建て移轉せり、

土俗傳へ云、滿願寺殿高敷の墓石は元此谷にありしが、中古土人之を山上に運び、山の東にある清瀧寺の谷へ墜落せしと、村内に石佛、五輪塔等所々に懸々たり、

東福寺趾 同村大字長岡にあり、古へ西福寺と相對して雙觀なりしが、中古頽廢して、本尊阿彌陀如來、今一堂に安置せらる、

安能寺趾 同村大字長岡大場山の西方に向ひたる山谷にあり、始め石應寺と稱せしが、正安年中佐々木頼氏當寺に隱遁して、安能寺源孝齋と云、爾後石應寺を改めて安能寺と云ふ、中古今の安能寺の所在に移りたり、舊趾を安能谷と云ふ、

靈仙寺趾 醒井村大字上丹生靈仙山上にあり、白鳳九年役小角始めて此山に登り、法を修したる所にして、養老元年越智泰澄の開基なり、本尊毘盧遮那佛なり、又良辨僧正の刻する藥師佛を安置す、神護景雲三年僧宣教山下に於て七箇寺を建て、當寺の末寺とす、當寺は栗太郡金勝山大菩提寺の別院にして、本郡中有名なる古刹なり、弘仁二年僧願安改修の工を起す、僧房十八宇あり、丹生二所の神を鎮守とす、二所の神は南北山



下にあり、政所一人、公文一人、下司一人、目代二人、下僧十六人、神主八人を定む、靈仙寺の寺領は坂田郡内にして、田七町五段百五十歩を有せり、僧宣教が建立せし七箇院は左の如し。

佛性寺

鳥居本村大字佛生寺

男鬼寺

鳥居本村大字男鬼

莊嚴寺

同

村大字莊嚴寺

松尾寺

醒井村大字丹生西山上

大杉寺

大杉

觀音寺

犬上郡落合里

安養寺

犬上郡河内村

此の如く奈良朝時代よりの名刹も積みし歳月に荒廢して、今は趾を存するに過ぎず、當年を追想すべき遺物としては、嶺上に經が坪と稱し、無數の石を堆くせる所あり、按ずるに經塚なるべし、其他地名に阿彌陀が岳、釋迦が岳、佛がやし等の名を存するあり、又寺中の阿彌陀堂は阿彌陀が岳今の跳場(枝折より早天の日)と云へる所にあり、こゝに阿彌陀如來の木像を安置せしかども、いつしか荒廢して、其佛像は所々に轉々して、後枝折村に移り、村民の尊信する所となりぬ、然るに本郡西黒田村大字常喜田勝寺住職教順之を迎へて、田勝寺の本尊となす(教順は元和八年に死す)、文政五年枝折村能勢吉郎外十一名の名を以て、彼の佛像を田勝寺に讓る、即ち田勝寺より分身木佛一體を枝折村に送

れり、像は聖徳太子の作とも行基の作とも云ひ傳ふ、明治二十六年五月二十八日、臨時全國寶物取調委員長九鬼隆一より美術上参考となるべきを認定し、鑑査狀を下附せられたり、一説に入江村大字上多良の國寶藥師如來は、古へ靈仙寺の佛像なりと云ふ、七箇の別院も今存するものは唯一の松尾寺ありて、其他は鳥居本村に屬する三寺は、何れも其寺廢れて其名を村名に存するに過ぎず、犬上郡に屬するもの今存するなし、寺谷 醒井村大字醒井にあり、何寺と稱せし傳へも分明ならざれども、古代有名の寺ありしより此名を存す、寺谷を南に延びる山の尾を寺尾と云ふ、其南麓の平地に醒井學校を新築せし時、其地より布目の古瓦を發掘せしより考ふるも、古へ大寺の在りし跡なるを知る、按ずるに靈仙寺の寺中か、然らざれば此地は古へ丹生の郷に屬し、息長丹生眞人家の在住地なれば、其等一族の寺院たりしもの歟、法性坊趾 同村大字上丹生山の中腹稍平地を爲し、田地となれる所なり、これ天台座主として有名なる尊意が、幼時修法せし地なりと云ふ、尊意は息長族にして、此地に生れ、長じて京貫に移りし人なり(人物志)、竹藪中小泉あり、土人傳へて法性房のうぶ洗ひ水と稱す、

誓願寺趾 息長村大字箕浦にあり、誓願寺は正和年中の創立にして、本願寺覺如上人



が信徒の請により、河内國大井御坊を此地に移し、寺號を誓願寺と稱し、慶安二年迄箕浦御坊として有名の大刹なりき、淺井長政が織田信長の兵と戦ひし時、江北十箇寺の門徒を率ひし中の一寺なり、慶長年中住僧智空、大野主馬の女を娶りしが、元和元年大坂落城の時、主馬の嫡子百助(一説は家宗悦)難を選んで箕浦に來り住す(大野百助は大野治長の族)妹の縁によりてなり、慶安年中誓願寺の下寺に寶滿寺あり、住僧某は攝津高槻の者なりしが、性奸惡邪智に長じ、寺務を怠り、地方に害を與ふるを以て、誓願寺の住僧終に某を放逐す、某之を銜み、國に歸りて永井信濃守に讒して曰く、近江井伊氏の領内箕浦村に誓願寺あり、豊臣氏の舊臣大野の一族此地に潛み、機を見て將に事を擧げんとすと、信濃守大に驚き、直ちに之を京師の所司代板倉周防守に報ず、慶安二年二月五日、周防守は誓願寺を二條の廳に召し、齋藤攝津守、永井信濃守等と共に大野一族密謀の事を審査せしも、素より虚構の讒説要領を得ず、因て周防守は之を幕府に上達す、井伊氏の江戸邸亦大に驚き、謹慎を表し、飛使を彦根に送り、速に大野一族の輩を捕へしむ、彦根藩にては其族井伊勅負を將とし、許多の士卒を率ひて之を捕へんとし、勅負は岩脇山に陣し、諸士卒をして箕浦、新莊二村を包圍せしめ、二村の男子は悉く之を繋ぎて、天の川に出し、而して誓願寺の一族を囚へたり、時に大野宗悦は彦根切通しに住居せしを以て、大

久保新右衛門、山中藤太夫の手に之を囚へ、藩廳に於て嚴重に拷問したるに、事實無根にして、奸僧の偽計に出でたる事分明したり、彦根藩は本願寺の寺士横田帶刀を召し、大野の謀計は無根なるを諭し、坊主檀家を本願寺に預けられ、大野宗悦は大坂遺臣なるを以て、刎首せられ、誓願寺は事體の如何に關はらず、一度は幕府の詮議を仰ぎしを以て、遠慮すべき旨富田喜太夫をして達せられたれば、終に誓願寺を河内國大井村に移し、因て箕浦御坊は退轉せり、今其所を寺屋敷といふ、土人の誓願寺騒動といふものはかの時の騒動を云ふ、

護寧寺趾 息長村大字岩脇にあり、龍尾山岩脇寺と稱せり、歡喜光寺三箇の別院の一にして、僧報恩の開基なり、僧房五宇、本尊は藥師如來なりしが、何れの時か荒廢して、其名さへ湮滅せんとす、按ずるに龍尾山は、岩脇善光寺のある小山の名稱なれば、三尊の石佛は往時護寧寺の佛像ならんか、山の北に「てらやぶ」と稱する處あり、今は開墾されたれど、往時在寺の所なりといふ、

藥師谷 息郷村大字牛打にあり、古へ藥師堂ありしより、其名あり、又大膳坊と稱する地名存す、

堂谷 同村大字西坂にあり、往時寺院ありしより、此名あり、又堂山、上寺鼻、下寺鼻等の



小字名を存す、

五七二

今福寺趾 同村大字番場にあり、今地名に存す、又正福寺山、堂谷、小正坊、大正坊、善光寺、薬師谷等の地名あり、昔時佛刹ありし跡なるべし、

圓臺坊趾 鳥居本村大字武奈にあり、昔時圓臺坊ありし跡なり、又慈光寺、中慈光寺、堂立、高僧谷寺の上、西蓮坊、進上堂等の小字名を存す、靈仙寺の別院、男鬼寺の寺中の遺趾か、

佛性寺趾 同村大字佛性寺なり、佛性寺は神護景雲三年僧宣教の創立にして、靈仙寺の支院とせしものなり、後年荒廢して當年の寺號今村名となる、

莊嚴寺趾 同村大字莊嚴寺なり、佛性寺と同じく靈仙寺の支院にして、神護景雲三年僧宣教の創建したる所なり、今土地小字名に不動谷、玄明谷、堂の奥、半清寺、高莊嚴寺、奥の坊、西奥の坊等あり、皆當年を考ふべき地名なり、

觀音寺趾 同村大字小野にあり、稻干場とも稱す、創立年代詳ならざれども、小野は鎌倉時代の古驛なれば、其時代に全盛なりし寺ならん、又堂谷、寶珠庵、鐘突堂、念佛堂、南堂佛等の地名存す、

泉寺趾 同村大字鳥居本にあり、今小字名となる、又庵の屋敷、法華原、本正寺等の地名を存す、

善後寺趾 入江村大字梅ヶ原にあり、今地名となる、又寺屋敷、地藏堂、鐘撞、奥善後寺等の小字名存す、

蘭華寺趾 同村大字中多良にあり、歡喜光寺の支院三箇寺の一にして、伊吹山寺の開基三修の開基なりと、全盛の時僧房六字あり、本尊は彌勒菩薩なり(正應二年の古圖参照)今荒廢して小字に上圓ヶ寺、下圓ヶ寺の名存す、又道光寺、建仁寺等の地名あり、

本願寺趾 同村大字上多良にあり、天平元年僧行基の開基する所なり、本尊八尺の地藏菩薩にして、僧房三字あり、南都興福寺の末寺なり、此古刹亡びて當年の所在分明ならず、薬師堂あり、本尊薬師如來は國寶となれり、此附近或は當年の遺蹟ならん、

上雲寺趾 同村大字下多良にあり、古へ上雲寺ありし趾なりと、

世繼寺趾 法性寺村大字世繼にあり、興福寺と稱す、僧仁秀創建する所にして、釋迦如來を本尊とす、全盛の時僧房五字あり、仁秀は伊豫の人物部氏なり、南都興福寺に住し、法相の碩學なり、大同三年三月寂せし人なれば、大同以前の古刹なり、寺亡びて今小字に南興福寺、中興福寺、北興福寺の名を存す、



普明庵趾 法性寺村大字飯村にあり、弘治元年十二月淺井久政、同長政より嶋四郎左衛門に宛てたる文書(古文書二九四)に井村普明庵云々と見え、猶元龜元年七月磯野丹波守が嶋宗朝に宛てたる文書にも、澤山籠城の功を賞するに普明庵領を與へしことあり、以て此大字内にありしを知るべし、

觀喜光寺趾 同村大字宇賀野にあり、富本山と號す、一に柳光寺と稱す、文武天皇元年帝不豫なり、僧義淵に勅して、藥師如來の尊像七軀を造らしめ、大和、山城、近江三國に精舎を草創して安置せらる、當寺は即ち其一にして、開基は義淵、本尊は藥師如來なり、僧房十六宇、交乘十六口を定め、坂田宮を以て鎮守とす、支院三院あり、世繼寺(世護寧寺)、蘭華寺(中多)即ち是なり(正應の古)かゝる古へよりの古刹なれども、退轉して遺物の傳はるものは五輪塔、石佛のみ、今蓮成寺の所在其趾なりと、此大字の小字に本願寺、鐘撞堂の前後の名あり、

正嚴寺趾 同村大字長澤の小字名に稱す、古へ寺院の在りし趾か、將又正嚴寺の寺領なりしか、

法勝寺趾 日撫村大字高溝にあり、慈覺大師の創立せし古刹なり、本尊釋迦如來にして、僧房三字あり、始めは天台宗なれども、後法相になると傳ふ、其趾荒れて少許の草生

の外桑園となれり、然かも當年を追想するに足るべき布目瓦の破片は桑園の中より發見し得べしと、

- 勝正寺趾 大正寺趾
- 佛光寺趾光一作廣 眞開寺趾
- 茅堂趾 光正寺趾
- 實相寺趾 慈光院趾
- 安養寺趾 圓光寺趾
- 淨蓮寺趾 長門寺趾
- 惠林庵 不明庵

以上の寺趾は同村大字顔戸にあり、創立年代詳ならず、其多くは日撫神社の社坊にして、應仁、文明の亂には京都公卿の來りて寓せられし事蹟を存すれども、織田信長近江に入りし時、自から之を燒きて、信長の兵をして入れざらしめしと、右寺趾の外、高寺、大別當、後別當、大門、堂の下、堂の上等の名を存す、

金剛寺趾 神田村大字加田にあり、金岩山と號す、天平寶字六年大安寺(和)の僧安澄の開基にして、大治四年光明山演海律師の中興する所なり、本尊藥師如來にして、全盛の



時僧房三十字ありしと、此寺は奈良東大寺の末寺にして、古へは名利なりしも、中古荒廢して、今其趾名を存するに過ぎず、

法華寺趾 妙立寺の北三町餘にあり、相傳ふ古昔天台宗の寺院なりと、今は唯土地の小字となりて、其名を存するのみ、

福林寺趾 亦土地の小字名となり、堂の内と呼ぶのみ、

青蓮房趾 今土地の小字名となり、斷礎の認むべきなし、

綾織堂趾 昔は方四町有餘の境内を有せりと云ふ、今は土地の小字名となり、綾堂と呼ぶのみ、

龜甲山日屋寺趾 西法寺山にあり、文安年中より日安寺と稱せり、妙立寺の末寺なりしが、廢亡に歸せり、本尊は壹尺餘の立像にして、傳教大師の作なりと、今加田村村田氏の家に傳はる、

右の外此大字には土地の小字に阿彌陀寺前寺町、大入道堂の前、西禪坊、東禪坊、堂の内、西法寺、古堂、皆別當寺、田佛堂等佛寺に因める名を多く存す、前記金剛寺の僧房三十字とあれば、其遺趾なる歟、

布施寺趾 西黒田村大字蘭原にあり(蘭原は明治八年元の布施村小一條村を併せて稱する村名なり)、布勢山息長寺

成功徳院と稱す、伊吹山寺の僧三修の高足名超の開基する所なり、藥師如來を本尊とす、此地古へ息長家の一族たる布勢王の所領なるより、布施の名存すといふ、故に當寺は其王家の菩提寺として建立されしと傳ふ、大安寺(大和)の末寺なり、大安寺三綱記に養和元年九月二十四日、近江國布施寺、名超寺、炎上、使兩寺沙門法師等爲大歡進職、則補任交名注進狀下知事云々と見え、有名の寺院なり、爾來一衰一興して、歲月を經、天文年間其坊中の存在せしは法勝院、平等院、眞中院、撫嚴院、安樂院、大學院、成就院、觀成院、富蓮坊、岩本坊、伊賀坊、了觀坊、就波坊、日藏坊、明藏坊、圓實坊、安養坊、報知坊、百萬坊、覺心坊等ありしが、元龜の兵火に灰燼に歸し、又舊觀に復せず、僅かに一二寺を再建せしも、後年荒れて、今一坊を存せず、然れども其寺趾は歷々として指顧するを得、慶長年間井伊氏が彦根城を築きし時、寺趾の礎石并に石垣等を運ばしめしにより、今存するもの少し、本堂谷に本堂跡あり、其谷の南の山岸の自然岩に梵字を多く刻みたるもの存し、猶其傍に天正十四年の銘ある古碑、苔に埋れて存す、山上に經塚あり、又小字名に本堂谷、本藏、寺が谷、庵の口、安樂寺、北大門、南大門、庄嚴畑、堂谷、善が谷、鳩が峰等あり、按ずるに布施、小一條は古へ忍海部氏一族に關する由緒も無きにあらざる可し、法性寺村大字長澤の福田寺は古へ此布施寺なりしを、曆應年間に長澤に移轉されしものなりと傳ふ、



釋迦堂趾 同村大字名越にあり、名越は有名なる名超寺の所在地なれば、此地に存する堂跡寺跡、多くは是名超寺の寺中たりし遺跡なるべし、左に其地名となりて存するものを記す、

地藏堂 圓光院 大藏坊 大般若 仁王堂 積善坊 和尚谷 本堂 七番堂

大門 創立の由緒は名超寺史にあり、

三百坊趾 同村大字本庄にあり、本庄は名の如く古へ某家の領地本庄の村名となりしなり、寺坊も多く薨を井べられたるにや、今土地の小字名となりて存するもの少からず、三百坊は坊數三百ありと傳ふ、上庄言寺、寺田、例見寺、普賢坊、奥堂、上源寺、佛性海道、堂前等の名存す、荒廢の年代詳ならず、

寺の谷 同村大字八條にあり、此谷に上の坊、中の坊、下の坊の名存す、古へ寺坊ありし跡なり、又正嚴寺、佛金寺、寺出、寺の上の小字名存す、

法徳寺趾 同村大字鳥羽上にあり、常光山と號す、今尙は其堂跡を堂山と稱し、其南を小字堂前と呼ぶ、寺の出道のありし所を出口と名く、後鳥羽上皇此寺に御幸あり、國政恢復を祈り給ひしと云ふ、

尾崎寺趾 同村同大字小字尾崎にありて、宏壯なる堂宇丘上にあり、今の尾崎火葬場

より山の西端に至るまで寺の敷地なりしといふ、其南を寺前と稱す、

觀音堂趾 同村同大字小字觀音堂にあり、後鳥羽上皇手植の杉と稱するもの現存す、周圍十尺餘、高十五間許り、地方誌に鳥羽上に一株の老杉あるは上皇刀劍を打せられたる所云々とあるは誤りなり、

金光寺趾 六莊村大字田村にあり、創始荒廢共に其年代詳ならず、按ずるに奈良東大寺末寺たる神田の金剛寺の趾にあらざる歟(金剛寺趾參照)

西方寺趾 同村大字寺田に在り、多田幸寺七寺の一にして、無量山と號し、天台宗なり、天元四年山城より一簣山北の尾崎に移され、承久の亂後廢頽に歸す、明治初年此寺跡より陶器及金屬の佛器、轡、鏃等の壺中に納めたるものを發掘せり、

安導寺趾 同村同大字に在り、多田幸寺七寺の一なりしが、承久の亂後廢頽せり、

總福院趾 同大字にあり、元龜、天正の頃燒失したりと傳ふ、

淨寶庵趾 同大字にあり、推古天皇の御代名譽の佛師鞍作首鳥の由緒ありし古趾なりと云ふ、

福滿寺趾 同村大字四ツ塚にあり、古來神聖の地にして、觸犯するものは大禍を蒙ると傳へ來りしが、永曆年間此地に福滿寺と云へる大寺を創立し、鎮護として其傍に八



幡宮を祭りしが元龜の兵燹に罹りて堂宇寶物悉く烏有に歸せり、鎮守社のみ災を免れたるを以て、其後堂宇の趾に神殿を再建したり、今の八幡宮の境内是なり、又燈明寺の小字名あり、

經田寺趾 同村大字勝にあり、相傳ふ僧行基の創立にして、藥師如來を安置せりと、其後嵯峨天皇の御宇、此境内に鎮守社(神今社の)を祭りしが、文安の頃兵火に罹りたれば、所領たる縁に由り、祭神佛像を併せて總持寺に委托して奉祀せり、是より經田寺は廢滅し、唯地名のみ傳れり、現今小字藥師居立は其跡にして、往々礎石を發掘す、

宗福院趾 同村大字下坂中に在り、天文十三年二月二日の淺井久政の文書に、下坂宗福院、幸正庵の名見ゆ、

常樂寺趾 同村大字永久寺にあり、今地名のみ存す、

圓明寺趾 同村大字室にあり、創立荒廢の年代共に分明ならず、又正嚴寺、藥師堂、雲門堂の小字名存す、

天正寺趾 同村大字八幡東にあり、又上正號寺、下正號寺、地藏等の小字名存す、

楞嚴院趾 南郷里村大字大東の村社前の地なり、此趾布目の瓦の破片を散見す、以て古寺のありしを知るべし、創立荒廢共に詳ならず、

極樂寺趾 同村大字今川にあり、今地名を存す、其他本堂立、道寺等の小字あり、

無量光寺趾 同村大字宮司にあり、又上常福寺、下常福寺、東谷寺、西谷寺、不斷光寺等の小字名を存す、

正言寺趾 同村大字南田附にあり、又寺元、堂の前等の小字名存す、

東光寺趾 同村大字加納にあり、又阿彌陀堂、南の堂、寺掛堂、文寺、正言寺、堂田等の小字名存す、

東禪寺趾 同村大字板木にあり、古へ七堂伽藍の寺なりしも、荒廢して今唯其趾を存す、當年の塔の臺石なりとて、今猶存す、又新光坊坊ジロ、中寺、寺屋敷、南道寺、北道寺、東道寺、眞昌寺、寺の内、普現堂等の小字名存す、東禪寺の寺中歟、

正覺寺趾 同村大字新榮にあり、又常呂寺、一乘寺、東法華堂、西法華堂、聖町等の小字名を存す、

佛嚴寺趾 同村大字七條にあり、又寺屋敷、堂の前、小寺、光源寺等の小字名を存す、

正福寺立 北郷里村大字堀部にあり、古へ正福寺の在りし所なり、又淨樂寺、正善庵、醫王寺、圓明寺等の地名存す、醫王寺は有名の古刹にして、授戒帳上卷古文書部に登載す、  
金善坊趾 同村大字保多にあり、古へ金善坊在りし所か、



法性寺趾 同村大字垣籠にあり、古へ法性寺の在りし地なり、其地に續きて小字法性寺前あり、又上寺地、下寺地、地藏立等あり、

正蓮寺趾 同村大字東上坂にあり、又地藏福寺、堂前等の小字名あり、

川原寺趾 同村大字西上坂にあり、又中寺立、寺地等の小字名あり、

藥蓮寺趾 神照村大字川崎にあり、今藥蓮寺町と云ふ、古寺ありし趾なり、又八王子町あり、

明覺寺趾 同村大字口分田にあり、明覺寺ありし趾なり、又法壽庵、藥師堂、寺の居立寺町、下十善寺、上十善寺等の小字名を存す、

將軍寺趾 同村大字今にあり、此古へ陰陽家が、大將軍説を鼓吹せし頃、將軍塚を祀りし地に寺を建立せし趾ならん(神社誌 參照)

同村大字保田に堂町あり、橋本に堂前、地藏等の地名を存す、何れも佛堂ありし趾ならん、

觀音寺趾 同村大字國友にあり、又淨國寺、見久寺、來庵坊、東地堂、西地堂等の小字名存す、五輪塔、石佛、寶篋印塔の土中より出でしもの多し、

眞福寺趾 同村大字中澤にあり、又東女寺、堂町等の小字名あり、

眞源寺趾 同村大字下の郷にあり、寛和元年僧空晴の開基する所にして、本尊觀世音なり、南都興福寺の末寺にして、全盛の時僧房八宇あり、山王の神を鎮守とす、何の時か此名利廢れて、今僅に其名を地名に存し、一基の古碑を存するに過ぎず、安福寺、長等寺、桶寺、彌寺、法正寺、觀音立、地藏立等の地名あり、當年寺中の跡なり、

新花寺趾 同村大字小澤にあり、興廢の年代共に不詳、

阿彌陀坊 同村大字新庄寺にあり、新庄寺は有名なる神照寺の所在地にして、往昔は坊宇三百と稱すれば、此大字内に小字名となりて存する地名は、悉く同寺中なるべし、阿彌陀坊の外、上圓海前、乘泉坊、東伽藍地、辨天堂、東阿難坊、西阿難坊、蓮乘坊、西伽藍地等あり、

同村大字新庄馬場に觀音堂前、寺の内の地名を存し、大字新庄中に上不文寺、下不文寺、十善寺、金堂前、花藏庵、堂前等の小字名あるも、亦神照寺々中の趾ならん、

花徳寺趾 同村大字南方にあり、花徳寺ありし趾なり、

本覺寺趾 同村大字八幡中山にあり、本覺寺の外西蓮庵、東正蓮寺、西正蓮寺、八王寺、小寺、藥師堂、堂の北、庵の南、蓮仙庵、毘沙門等、佛寺に因める地名多く存し、大字内に五輪塔、石佛の所々に磊落たるを見る、古へ大寺ありし趾ならん、下坂氏文書天文十一年九月



十五日、清頼秀信連名にて下坂左馬助へ宛てたる文書に中山左馬亮跡職并寺庵被官事仰付訖云々と見ゆ、此等の寺庵を意味したるものなり、  
本願寺趾 同村大字列見にあり、此外東堂の東、西堂の東、堂田、前田、寺前等の小字名存す、

如來堂趾 同村大字祇園にあり、古へ佛堂ありし趾なり、又觀音堂、寺屋敷等の地名を存す、

安養院趾 同村大字相模にあり、又ハンショ村、堂前、寺前、堂の西等の小字名存す、

八角堂趾 同村大字森に八角堂趾を存す、全盛の當年を懐ふべし、又永安寺の小字名存す、愛知郡山上永安寺領の遺名なり(中巻第七編参照)

如來堂趾 長濱町大字三ツ矢にあり、三矢町は古へ三ツ屋村なり、何如來の古堂ありしが、又地藏屋敷、鐘撞堂等の小字名存す、

正光寺趾 同町大字船山に正光寺の地名を存す、古へ在寺の跡ならん、

新放生寺趾 長濱町大字神前にあり、古へ八幡神社の別當寺なり、明治維新以前神境に七堂伽藍坊宇羅列せしが、中世屢、兵火に罹り、元龜、天正の頃全く廢滅に歸したるが、羽柴秀吉再興してより、漸く舊に復し、神領百七十石を附せられ、妙覺院は大別當職に

居り、舍那院は學頭となり、他に十餘宇あり、知積院の末院にして、眞言新義派なり、神前の奉仕は別當社僧にて擔當し、神事は總て兩部習合にて、浮屠氏の手に歸したるは、猶石清水八幡宮と同様なり、故に境内に堂を建て、愛染明王を安置す、頗る隆盛にして、恰も本社と相匹敵するの狀勢ありき、

文政元年三月、當社勸請以來七百五十年祭會を修す、時に境内の往還道を南側寺屋敷の内に變更し、各坊敷地を分配す、是の時に舍那院は本社東側(今の)に定め、社前神渠を隔て、南側に本覺院、寶藏院、福壽院、圓壽院、龍存院、寶樹院、蓮華院、密藏院、延命院、乘藏院、實相院、普賢院、安養院、兩寶院あり、各東西十四間半、南北十一間半とす、兩寶院舊地を妙覺院に分配し、妙覺院は其西面にあり、又本社の西北に勝藏院、俊藏院、寶生院、淨教院、定智院、吉祥院あり、各東西十一間半、南北十五間とす、乃ち寺坊二十二宇あり、神事法會を執行せり、

妙覺院は寛正元年及實法師の開基なり、天正年間僧實俊秀吉の命を蒙り、本社に祈禱せり、其時秀吉より庭園の古井を麻衣の井と銘し、汲月亭の號を附し、田二反及屋敷地を賜り、黒印除地とす、當寺は諸坊の上に班し、一山内長蘆の順次に移住する例なりと云ふ、徳川氏とた代々寺領を安堵せしむ、明治維新の際僅に六坊を存せしが、後復飾し



て神勤す、妙覺院、實相院、蓮華院、龍存院、福壽院、俊藏院これなり、後漸次合併して、佛像其  
他兩部に關するものは舍那院に移し、本社と全く區分するに至れり、

第十六章 國寶表

(什物名)	(寸尺又は幅)	(作者名又は傳來)	(指定年月)	(町村名)	(社寺名)
淨土曼荼羅圖(絹本着色)	長五尺六寸五分 幅三尺八寸	傳 當麻筆	明治三十二年 四月	柏原村大字柏原	成菩提院
不動像(同上)	長三尺六寸 幅一尺三寸五分	傳弘法大師筆	同上	同上	同上
聖德太子像(同上)	長三尺五寸 幅一尺三寸五分	傳土佐光信筆	同上	同上	同上
傳教大師像	二尺一寸五分	不詳	明治三十四年 三月	大原村大字朝日	觀音寺
藥師如來座像	四尺	傳傳教大師作	明治二十四年 三月	入江村大字上多良	藥師堂
木造藥師如來座像	同上	同上	明治三十八年 四月四日	六莊村大字田村	多田幸寺
正觀世音像	三尺三寸五分	不詳	同上	南郷里村大字宮司	總持寺
千手觀音像(木、牛肉)	一尺九寸	傳聖德太子作	同上	神照村大字新庄寺	神照寺
毘沙門天木像(立像)	一尺一寸五分	傳弘法大師作	同上	同上	同上
十一面觀世音(座像)	一尺六寸一分	傳運慶作	明治三十八年 四月	長濱町大字相生町	知善院

愛深明王像	一尺八寸	傳弘法大師作	同上	同上	同上
阿彌陀如來座像	二尺九寸三分	傳惠心僧都作	同上	同上	同上
三月經曼荼羅	長七尺四寸 幅四尺一寸	笠置解脫上人作	明治四十三年 四月二十日	同上	同上



第十編 城砦及屋敷趾志



## 第十編 城砦及屋敷趾志

### 第一章 城と寺

我が邦築城の法は鐵炮傳來後に於て大變化を來し、爾後嚴然たる層樓の天守を備ふるに至れり、然れども織田信長以前の城なるものは、さのみ莊嚴なる建築にはあらず、是れ當時の戰鬪法が猶未だ弓箭を以て重なる武器となせしによれるなり、本郡は東山、北陸二道交通分岐の要地なれば、戰國時代には全郡の山野悉く武装され、城砦軍壘の設けられし個所も少からざりき、但し平時に於ては分國の守護京極氏在住の所を以て城或は屋形館と稱したりしが如し、故に名に於ては城なれども、實に至りては稍守警の設備ある居館たる程度に過ぎざりしやと思はる、京極氏の古き城地と傳へらるゝ太平の館伊吹村も、城とは言はで天險に據りたる居館にして、之を實地に踏査するも、城跡として傳ふるものなし、而かも其居館の多くは寺と密接の關係を有する例少からず、伊吹村の太平寺は貞觀年間に建てられし古刹にして、一山の堂宇は南北朝の亂までは儼然と存したり、然るに京極氏分國を領する初めに此地を以て居館となせしは、太平寺の設備を利用して、政令の根據地となしたるにてあるべし、然るに



建武三年七月十日の太平寺合戦により、一山の堂宇は兵火に罹り、灰燼となり果てたれば(第六篇第六卷)爾後の京極氏は祖先以来の墳塋地なる清瀧寺(柏原村)を居館としたりと見え、園太曆正平八年正月五日の條に佐々木佐渡判官入道道譽北野社參と稱して、近江國に下向し、柏原城○に閑居なすよし披露す云々とあり、同月八日の條に佐々木道譽柏原城に籠るよし聞えければ、義詮やがて相原下總守及び賢俊僧正を使として、これを咎めん爲に近江國にむかはしむ云々とあり、柏原城と見ゆれど、柏原にはかゝる城跡なし、高氏入道道譽の閑居せし柏原城は正しく清瀧寺たるや明なり、猶京極道譽は犬上郡の勝樂寺にも時々休養せり、降りて永正年間京極高清が上平館を修築するや、其地には上平寺と稱する古刹ありし地なり、又大永三年三月、淺見、淺井、三田村等の諸氏が上坂治部を安養寺に破り、高清を尾張に走らしめし後に、上平館を焼き、京極高延を奉じて神照寺に移りし事、江北記に見ゆ、又神照寺に京極氏が在住せしと思はるゝは、天文十二年の頃六角氏に通じたりとて、淺井亮政が京極氏の名を藉りて、箕浦庄の今井秀俊を神照寺に召して自殺せしめしは、當時京極氏が神照寺に在りしを以て、特に秀俊を其寺に招きしなるべし、要するに古への城なるものと大寺とは深き關係を有し、或る場合には城即ち寺、寺即ち城にして、一地二名なりしと思はるゝなり、故に太

平城、柏原城の事は次章に記せず、

## 第二章 城址

### 桐ヶ城

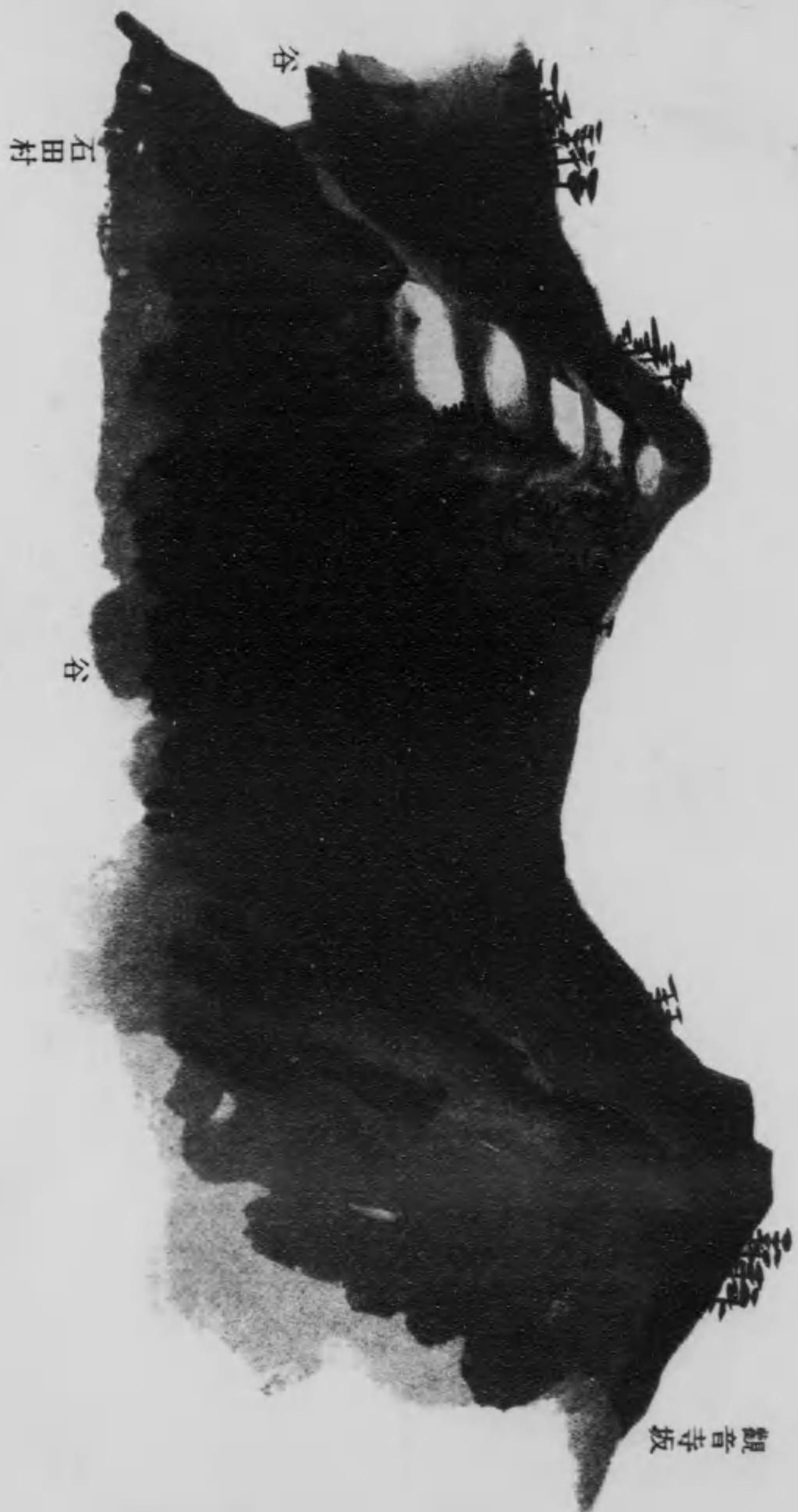
桐ヶ城は春照村大字上平寺にあり、桐一に霧の字を用ふ、其築城は淺井三代記に永正六年とあれども確ならず、按ずるに京極氏の居邸上平の館が完美せしは桐ヶ城建築と同時代なれども、それより以前明應四年に京極政高(經)が彌高山より兵を出して、六角氏が美濃に進入する軍を敗りし事、船田後記に見ゆれば、彌高上平寺の地は夙に京極氏の城砦地となせしを知る、又桐ヶ城の名は京極氏の祖氏信が鎌倉の桐ヶ谷に邸を置き、檢非違使として令名ありしにより、時人呼で桐ヶ谷尉と稱せり、されば京極氏を呼ぶに桐ヶ谷尉を以て通じ、終に伊吹の南嶺に築かれたる要砦までを桐ヶ城と稱したりといふ、後に京極高清が分國を統一せしは、永正二年なるより考ふれば、上平館の修築は同三四年の頃にてあるべし、完美せし上平館は大永三年閏三月に相續論の爲に一旦焼かれたりし事、江北記に見ゆ、されば桐ヶ城も同時に灰燼となりしならん、果して然らば桐ヶ城は氏信分國の始めより江濃境界の要衝として武装の地となり、



依て明應の亂に京極政經が彌高山より出て敵を破りし所以も解せらるゝなり、永正二年京極高濑が京極材宗と日光寺に平和を約し、江北の分國を統一せし後、其城館を上平に築きしは、曩の荒廢を修築したるにてあるべし、桐ヶ城は上平館の西嶺上にあり、本丸、二の丸、三の丸等の設備ありしは、挿入の古圖に見ゆ、編者曾て城趾に登り、當年の遺墟を見る、山角の城壘なるも、清冽たる湧水は城西の高き凹地より漲り出て、幾千の兵をも渴せしめざるの利あり、其他壘々たる城跡は今猶指摘し得べし、

上平館は桐ヶ城の東麓にあり、館は當年屋形と書し、京極氏邸宅を構へし總稱なり、大字上平寺一圓の地なり、當年本邸の所在は伊吹神社の下にあり、古圖に御屋形とある所にして、今は杉檜の林と化せしも、林間に磊落たる泉石存し、土人今に御泉水と稱し、轉た當時を追想せしむ、隱岐氏、大津氏の邸は二ノ門内にありて、本邸を守衛し、一の門の内には諸士の邸ありて警備の地にあり、其他若宮氏、加賀氏、多賀氏、淺見氏、黒田氏(黒田の誤)、西野氏等重臣の邸宅は北國脇街道に近き方面に在り、現在の大字寺林は當年市店民屋の遺住の如し、かく完美せし上平の館は、其後二十年を経て大永三年舊三月、京極高延(高延)相續論の時一旦焼失せられしこと江北記に見ゆ、されど高濑は其後上平にありて、一生を送り、此地に卒去したり、故に其墳墓此地に存す、古圖に御廟所とある

圖の城山





は即ちそれなり、上鵜屋敷、化粧の井戸等存す、

### 天清城

春照村大字天清水にあり、城と名づくる程のものに非ざれど、南北朝の時代より設けられしが如し、今は簀着山と稱する山なり、その簀着山と稱するは、元來此山岩石多ければ、古へ戦時に無数の岩角に簀を着せて擬兵とせしにより、其名出たりといふ、

### 横山城

大原村と北郷里村との境界なる臥龍山脈の嶺上にあり、三城より就る、諸國廢城考には初め京極氏の支城なりしが、淺井氏勃興の後其有と見ゆ、元龜元年六月、姉川の戦には淺井氏の將大野木土佐守、野村肥後守、三田村左衛門尉等當城を守る、信長氏家常陸介をして之に備へしめ、諸軍姉川に戦ひ大に淺井氏の軍を敗る、爲めに城内の士氣沮喪し、翌日本下秀吉、池田信輝、柴田勝家等の包圍攻撃に遇ひ、衆寡敵せず、守將等城を開きて出で奔る、信長秀吉に命じて當城に居らしめ、淺井氏を牽制す、淺井氏亡びて、廢城となる、秀吉此城にありて淺井氏に對抗せしこと、元龜元年七月より天正元年八月に至る三箇年間の長きに亘れり、故に今城趾に登りて其規模を見るに、他の城趾とは異なりて、連峯に亘りて城砦を設けたり、其本城と見るべきは觀音寺山の北嶺に



巍然たる一角ありて、其趾を南高北低の二區に分つ、それより北へ二町餘にして、又嶺然たる一高地あり、其高地廣からずと雖も、眺望廣濶、東北西の三方を一眸に瞰視すべく、實に恰好の望樓なり、それより西へ梯形數階の壘趾ありて、順次西に低し、米倉の趾と稱する處、鮮苔を發きて土を攪けば、燒米燒麥の粒々存在するを見る(見取略)又大原村と西黒田村との境をなす嶺上にも一壘趾存し、土人今に城跡と稱す、

### 地頭山城

地頭山は息郷息長兩村に跨がる山なり、東麓は中仙道に通じ、北は天の川を隔て、箕浦街道(鎌倉時代の通行路なり)を伏視すべく、軍畧上逸す可からざる要衝なり、築城の創始は其年代詳ならざれども、鎌倉南北朝時代には夙に武裝の地たるや明なり、明應五年十二月五日の樋口合戦も、必ず甲冑武士が此山上に據りしは知らる(第十七章)又享祿四年四月六日の箕浦合戦には、淺井亮政が苦戦せし所なり、此城は堀氏が夙に據りて中仙道を監視せし所なり、

此附近の地は天文、永祿の前後に於て屢戰場となりし所にして、西園寺の龜山、磨針の舊浦ヶ岳等を始め、一帶の連峰悉く古戰場と謂ふべし、蓋し京極氏の臣今井氏の勢力範圍たり、

### 鎌刃城

息郷村大字番場にあり、始め土肥氏の築きし城なりといふ、後堀氏代り據りたり、六角定頼の淺井氏と對抗するに當り、堀氏は六角氏に應せざるにより、屢兵を遣して鎌刃城を攻めしこと古文書に證さる、元龜元年堀氏が本郡内の諸將に率先して信長の招降に應せし後は、街道警備の爲め砦を地頭山に移し、爾後地頭山及び能登瀬等に居住するに至り、鎌刃城は地勢上廢墟となれり、故に後年地頭山を鎌刃城とする説を生ぜり、鎌刃は番場の東南にして、地頭山は番場の北なり、鎌刃城址は東西二町南北四町に亘る平坦なる山嶺にして、所々に石壁を存す、

### 箕浦城

息長村大字新庄にあり、箕浦庄の領主今井氏の本城なり、新庄にあるを以て、新庄氏の城地なりといへど、其は誤りなり、新庄氏は今井氏より出でし家にして、朝妻城に住す、今井氏は京極家の根本被官家にして、本郡南部の重鎮なり、其城趾今小字名を城の内、殿城といひ、其南を的場といふ、

### 太尾城

入江村大字米原太尾山上にあり、創設年代詳ならざれども、地勢上樞要の地なれば、南北朝戦亂の頃より夙に要砦となりしなるべし、此地より出でたる米原平五は明徳の



亂に京極高詮に従ひ、京師に出陣したれば、或は其初は京極氏の支城として、米原氏が築きしにやあらん、文明の亂には米原平内四郎在城せり、其後京極氏に内訌を生じ(七郎參照)、黨争多年に亘り、分國の政務亂れし後、六角定頼は屢、北江に侵入して、愛知郡以北の京極氏領を蠶食し、大永、享祿の頃より、屢、本郡に侵入して、兵を動かせり、京極氏衰へ、淺井氏の起るに及びて、兩氏勢力の競争點は本郡の南部なりしを以て、太尾、朝妻、磯山、佐和山の諸城は、昨は六角氏に奪はれ、今は淺井氏に復歸し、又更に六角氏の占領する等、再三其守將を替へて、恰も走馬燈の如き狀況なりき、蓋し諸城の内、佐和山を本據とし、其他は支城として設けられたるなり、曾て土人等殘礎を發掘して、馬具兵器の類を得たり。

### 佐和山城

鳥居本と犬上郡青波村との境界を爲せる天險の嶺上にあり、築城の創始時代は詳ならざれども、史上に見ゆるは大永以後、永祿、元龜の頃、要城として諸將が之を争ひし事を記す、兵畧上の見地より論ずれば、今の要地は古へも要地なれば、佐和山上に武將の軍旗が閃きしは、慥に元龜、天正より遠き以前なるべし、佐々木南北諸士帳の當城の部に、佐和山は其始め佐々木定綱の六男佐保六郎時綱始めて此地へ據りたり、故に佐保

山と稱したりしが、後世に至りて佐和山と變稱せしと記す、此事確實ならんには、既に鎌倉時代より佐々木は其族を分封して、此樞要地を守らしめたるなり、大永年中、六角氏北侵して此城を奪ひ、守將を配置して北進の根據とす、淺井亮政勃興して、六角氏の兵を追ひ、磯野員昌をして守將とし、六角氏に對抗せしむ、員昌名は善兵衛、丹波守と稱し、淺井氏部下中の驍將なり、元龜元年六月、織田信長が淺井氏と姉川に戦ひし時、磯野氏は佐和山城附近の土豪勇卒を率ひて、姉川に奮戦し、淺井氏の總軍敗走するや、直ちに部下を率ひて、敵中を南進し、急ぎ當城に歸りて守備を嚴にし、信長の來攻を待つ、果して翌日信長は衆を率ひて來り攻めしむ、員昌應戰嚴にして、容易に抜くべからざるを知り、丹羽長秀を留めて長圍の策を取らしめ、己れは京都に向へり、爾後八ヶ月間部下の將士と辛苦を共にし、籠城せしが、淺井氏の形勢日に非にして、長秀等の軍を追ふ能はず、員昌獨り當城を死守するも其功なきを思ひ、且つ長秀等の勸降頻なるを以て、遂に部下將卒をして無事淺井氏の小谷城に入るを許さば、開城せんとの條約を以て、元龜二年二月城を出でたり、驍將員昌去つて後、信長は長秀を守將とす、長秀當城にありて、信長の爲めに大船を朝妻港に作りし事は、中卷第九篇に記したり、信長薨じ、羽柴秀吉は(天正十一年)堀秀政を城主とし、後更に堀尾吉晴に與へ、天正十八年に至り、功臣石田



三成を此に封し、江北二十三萬石を領せしむ、されど三成は佐和山一城の主として雌伏すべき人にあらざれば、父隱岐守正繼をして當城に在りて領内の政務を沙汰せしめ、己れは羽柴氏の爲に東奔西走したりしが、秀吉薨じて後、太閤部下の諸將二派に分れ、慶長五年三成が關ヶ原の事を擧ぐる時、其謀議は實に當城に於て畫策されたり、三成が城主時代の佐和山城は古への建築と異り、永久的設備となり、屹然たる偉觀たりきと云ふ、其規模の概要を記さんに、大手は鳥居本にして、搦手は犬上郡に屬する蛇谷なり、山頂の本丸は高さ二丈五尺の石垣を築き、上に五層の天守聳へ、周圍に二の丸、三の丸、西の丸、太鼓丸、鐘の丸、法華丸等あり、三成の邸宅は本丸の南、もちの木谷に在り、諸士の邸宅は多く山西の湖涯に建られたり、其他煙硝庫、米庫等の設備完く、時人をして、三成に過ぎたるものが二つあり、嶋の左近と佐和山の城の落首を爲さしめたり、

かゝる設備の名城も同年九月十七日、徳川氏の爲めに落城して、三成の父正繼、兄正澄を始め、一族の婦女、佐和山一抔の灰土となりたり、後家康は功臣井伊直政を此城に封し、領土を與へしが、井伊氏は城を彦根山に移し、湖北の名城も終に廢墟となり果たり、山陽先生曾て此の城趾に登り、長詩を詠せられたり、左に記す、

泛舟金龜山下、昇佐和山城作歌

頼山陽

佐和山城之圖  
(頼山陽勝村中士學文)





金龜曳尾大湖水背負層城百雉起越山若山倒影來漕帆直來萬家市勳舊藩維功第一  
庚子之事策誰決東指膽嶽雲蒼莽關原在彼事可說對峙一墟隔青波渠魁所窟猶唵呀  
廉惡熊羆互相代寵幸起跡部同科天賜國材各因類短狐寧敵赤夜又想見入封整鏡伏  
戰血未乾蒸腥霞吾甲在心赤更赤湖波映出太平色

### 磯山城

入江村大字磯の磯山上にあり本丸高く聳えて中央にあり其より西嶺に亘り磯崎神社の東に一趾あり又東南角に一趾あり虎が城といふ磯山城と朝妻城とは一見樞要の地に非らざるが如きも現地に臨みて其地勢を踏査すれば必ず一城壘を要する程の地たるを悟るべし

本郡の南部満目の山野が總て古戰場たるは山と水とを以て自然の要塞を形づくれるを以てなり佐和山城を根據とし中仙道方面の通路を扼せんには必ず磨針嶺と米原道とを塞がざるべからず故に米原に太尾城を設け磨針方面には鎌刃城と菖蒲嶽の要害とをおくこの三城一砦を以て死守せんには中仙道は閉鎖されて通すべからず然るに磯の入江を隔てし湖涯に帯の如き土地を存し朝妻筑摩を経て磯山を越え犬上郡に通ずるを得べし之を古へより濱街道と稱せり中仙道の要塞を以て前記の

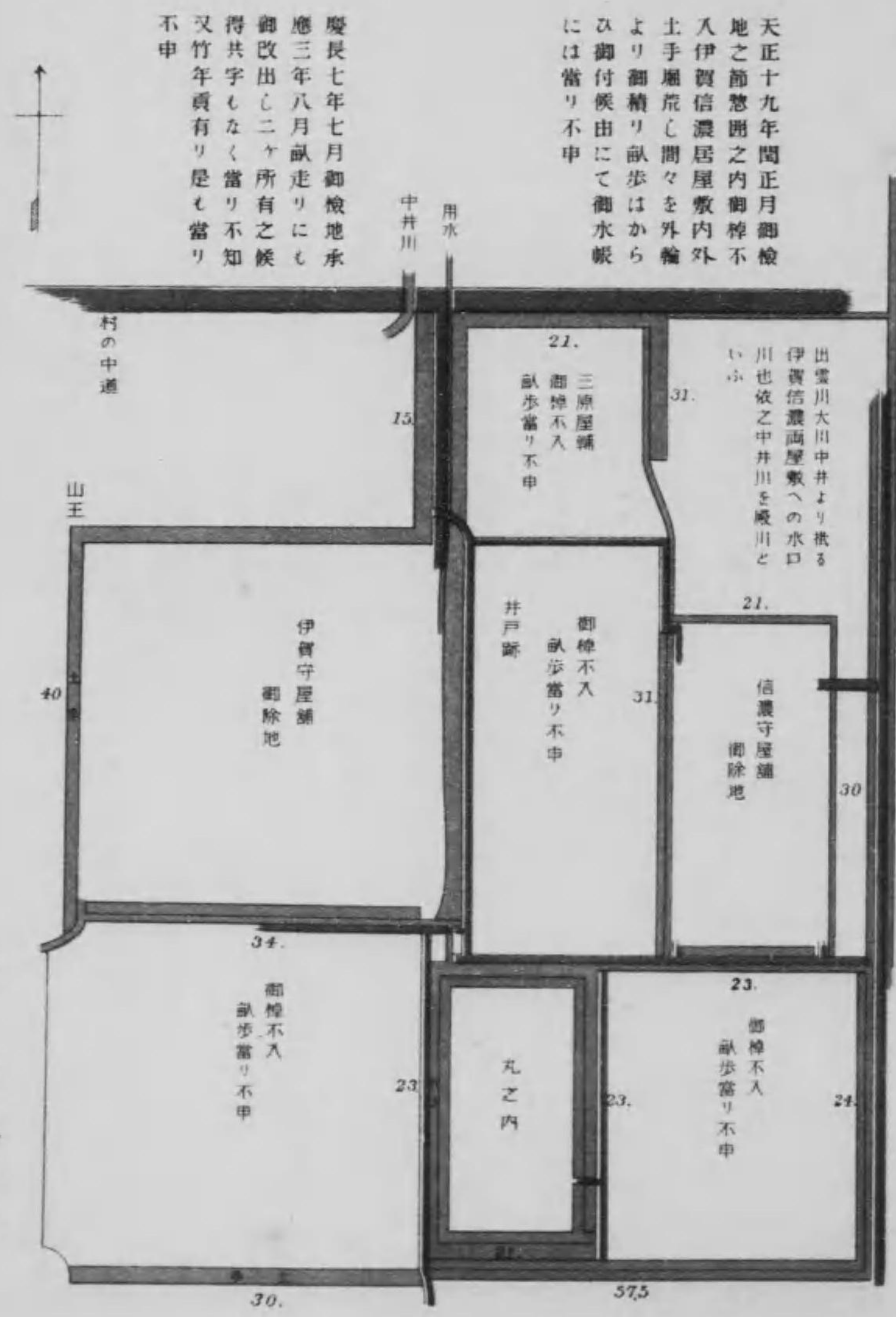


如く之を閉鎖するも、濱街道の防禦無かりせば、千軍萬馬容易に通ずるを得べし、壽永の昔木曾義仲が北國より來りて本郡を南に上りし時、義仲の主隊はこの濱街道より進み、後隊は朝妻の港より船に乗じて坂本に上りし事、源平盛衰記に見ゆ、されば中仙道の要塞を設けると共に、濱街道にも天險を相して、支城を築かざる可からず、之に於て磯山城の必要は起れり、其創築年代は詳ならざれども、中仙道の各支城と同一時代たるは明なり、此城の守將の記に見ゆるは、先に松原氏あり、後に藤堂高虎あり、磯村の人磯崎氏が藤堂式部と榮へし、端緒は、高虎が此城の守將たりし時に胚胎せり（人物誌）最南嶺の虎が城は水路の峽を守備する爲に設けたるなり。

朝妻城

入江村大字朝妻筑摩にあり、天文年間新莊藏人の築く所なり、平地の城なり、此地磯山城と同じく濱街道の要衝なるのみならず、古へ有名なる朝妻港の所在なれば、管に陸行の軍を守るのみならず、船舶を監視して非常を警むるの必要あり、按ずるに新莊氏の築くと云ふは修築にして、其創始はそれより以前なるべし、藏人の子直頼の時、一旦六角定頼の軍に奪はれ、その屬城となりしが、淺井長政六角氏を破りて之を復せり、直頼元の如く守將たりしが、元龜二年二月、磯野員昌が佐和山城を開きし時、直頼は城を

上坂城并に上坂伊賀守同信濃守屋浦之圖



慶長七年七月御檢地承  
應三年八月臥走りにし  
御改出し二ヶ所有之候  
得共字もなく當り不知  
又竹年貞有り是も當り  
不申

天正十九年閏正月御檢  
地之節惣附之内御棹不  
入伊賀信濃居屋敷内外  
土手堀荒し間々を外輪  
より御積り臥歩はから  
み御付候由にて御水帳  
には當り不申

(原圖) 上坂丈雄氏所藏



開いて織田氏に降れり、土人其趾を殿屋敷といふ、四方に堀を圍らし一區域を爲す、其段別二町餘あり、

### 常喜城

西黒田村大字常喜に在り、今小字を城といふ、一區劃を爲す、當年の城趾は今畑地となり、四周の堀は水田となり、土俗呼で堀田といふ、佐々木南北諸士帳には富田八郎兵衛、同刑部少輔の名見え、郷士在郷帳には前記二家の外、常喜加右衛門、加藤佐渡守、同孫六郎、吉田太郎左衛門等の姓名見ゆれば、何れの人の城地なりしか分明ならざれども、觀應二年京極氏の根本被官家たる今井遠俊(六郎左)が、戦功によりて常喜本庄の地頭職となりしこと、今井軍記並に嶋記録(古文書四六五)等に見ゆれば、其始めは今井氏にてあるべし、傳説には常喜佐太右衛門の城跡といへど、之れ今井氏滅亡の後ならん、

### 上坂城

北郷里村大字西上坂にあり、上坂氏の築く所にして、代々上坂氏の居城なり、大永三年淺井氏の爲に一旦兵火に罹れり、淺井三代記に永正十三年八月二十三日、亮政の爲に奪はれ、小谷築城の後、焼拂ひたりとあれど、信すべからず、天正二年秀吉の長濱城に移るや、上坂氏をして此に安堵せしむ、爾後上坂伊賀守、上坂信濃守二家となり、舊城に隣



りて館す、其邸趾を「いがどん」しなんど稱す、又三原氏邸あり(古圖參照)

六〇二

### 長濱城

長濱は天正二年以前は今濱なり、故に今濱城と稱せり、今濱城につきては第九篇第九章に於て詳記したれば、之には大概を記す、淺井三代記には永正八年三月、上坂治部の築きしと記せども信すべからず、此地湖涯の平地なれども、北國路の要路なれば、京極氏は夙に城壘を設けたり、佐々木南北諸士帳には京極道譽の時に創築し、今濱氏をして守衛となせし由を記す、又文明十八年八月以後、京極高濂が今濱城に在りて敵を敗り、又己も敗れし事、江北記の長享元年、明應五年、文龜元年等の各條に見ゆれば、三代記にいふが如き新しき城壘にあらざるは明なり、但し淺井氏の興起せし後は一旦廢墟となりしも、天正二年羽柴秀吉大に土工を起し、廢墟を修築し、小谷より移り住し、長濱城と改め、江北の鎮城とす、然れども秀吉は信長の東征西伐に奔走せるを以て、代官を置きて領内の政務を執らしめ置きしが、天正十三年其臣山内一豊をして當城に封じ、二萬石の地を與へたり、一豊在城數年小田原役の功により、同十八年遠江掛川に移れり、西尾豊後守代りて入城せしが、城主なりしや城代なりしや詳ならず、爾後當城の事史に見えず、徳川氏の時慶長十一年内藤信成を當城に移し、四萬餘石を與へ、美濃、飛

長濱城跡





驛近江三國の人夫を徴發して修築せしむ、慶長十七年七月、信成卒し、子信正繼ぎしが、其後内藤氏を陸奥の棚倉に移し、長濱町は井伊氏の領地となりしを以て、大坂役後、井伊直孝居城を彦根山に移すに當り、當城及石垣等を壊ちて彦根に移せり、これより廢墟となる、古記に本丸の間敷方十間なりと記す、古圖傳はらざれば當年の狀況見るによしなし。

### 第三章 砦及屋敷

砦は多く山上に設けられたり、戦時に於て臨時に築きし軍壘なり、屋敷は平地にあり、勢力ある武士が通行の要路に邸宅を構へ、平時は通常の住宅なれども、一旦事あれば陣營として士卒を屯集し、嚴然たる武装の地となせり、故に四方堀を深くし、土壁を高くし、竹木を簇生せしめて之を圍む。

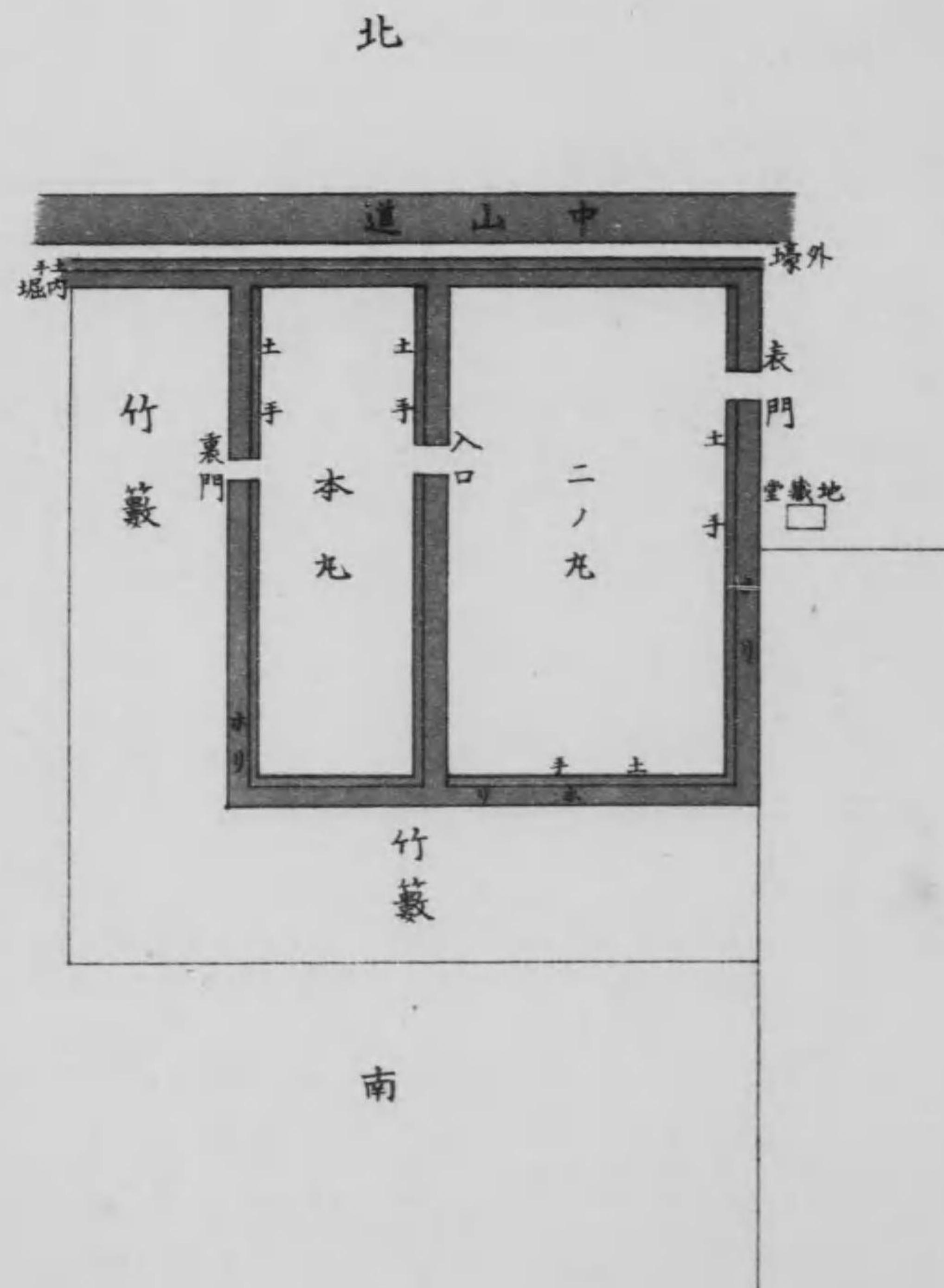
#### 長比砦

柏原村大字柏原、長久寺の山上にあり、今は野瀬山といふ、古へは其附近一帯を長比と稱せしにより、長比砦と稱せり、此地江濃の境界にして、中仙道に沿ひ通行を監視する要衝なるを以て、古くより軍事上の要地として、時々兵馬を屯せり、日本紀壬申の亂の



箕浦次郎左衛門屋敷圖

(藏所氏槎秋村西)



條に、忽放精兵衝玉倉部邑とある玉倉部邑は、現在の大字長久寺以西、野瀬と稱する地にして、玉倉部は後に、たけくらべと轉訛したるなりといふ、壬申の亂に高市皇子の陣地たりし和野も長久寺今須の邊といへば、近江方の軍が皇子本陣の前衛なる玉倉部を衝きたるなり、かく上古より戰場として鮮血を染めし地に簪ゆる山丘なれば、其後南北朝の亂にも碧血の草木を染めしは明なり、元龜元年朝倉景鏡の兵が淺井氏の援兵として此砦に來り、信長の近江侵入に對抗せしは一乘録に見ゆ、當時信長は淺井氏の將堀秀村を招降したるを以て、長比の砦は戟に血ぬらずして開退したり、北に接續する須川山上に一砦址あり、土人城山と稱す、

大峰砦

柏原村大字大野木の東に大峰山あり、此地は中仙道と北國脇街道との中間にして、一見築砦の要なきが如きも、其南須川山との間に一溪を通じ、美濃に越ゆるの間道あり、故に桐ヶ城、天清城を北塞とし、長比の砦を南塞とするも、此間道を塞がざれば閉鎖を全くすべからず、故に此山上にも砦を築けり、築砦の形狀、長比の砦に同じ、只東溪上の一角に無數の石を堆積したるは、敵の來攻に備へたる當年軍畧上の遺物なるべし、土俗に大野木土佐守の守りし城といひ、又一には田中の城とも稱せり、



### 箕浦屋敷

柏原村大字柏原にあり、京極氏が中仙道監視の爲めに、其將箕浦次郎左衛門を置きたる所なり、次郎左衛門は南北朝の亂に京極道譽に代り、攝津の守護代となり、神崎合戦に出でし事、太平記に見ゆ、爾來子孫連綿し、慶安年間迄在住し、後廣嶋に移住せり、中卷第七篇に詳記したれば、之には略す、

### 八講寺の砦

柏原村大字梓河内の山上にあり、多賀豊後守の據りし所と傳ふ、一に八講寺城といふ、此地稍中仙道を隔つと雖も、河内の猪の鼻は京極氏隠れ城のありし所なれば、特に此山上に築砦して、其臣多賀氏等の守衛せしものなり、

### 河内屋敷

一、柏原村大字梓河内小字猪の鼻にあり、猪の鼻は兩溪の碧潭合流する處にして、前は清流に隔り、後は峻嶺聳ゆる天險にして、突出する山容猪の鼻に似たり、故に土地の名出づと傳ふ、文明以後京極氏に内訌を生せし時、騷亂を避けん爲に、其一族がこゝに邸宅を構へ、河内城と稱せしにや、無年七月十八日、京極高慶が今井尺夜又丸に宛てし文書に、河内城普請今少調はず候間、人足一日申付らるべく候は、祝着たるべく候云々と



見えて、修築に要する人夫を要求せし状態せらる、又江北記に文明四年の頃、あづさ河内のいのはなを拵引籠候(時中)いのはなには秋頃より明る三月時分迄有由候とあり、猪の鼻引退の事も徴證さるゝなり、中卷第七篇第十章に詳記したれば参照すべし、

### 大原屋敷

大原村大字本市場にあり、大原太夫判官家邸宅を構へし所なり、大原氏は佐々木氏の一家にして、重綱を祖とす、本郡大原庄並に甲賀郡大原庄等は其所領なり、大原氏の來由は第五篇第九章に詳記したれば略す、其邸趾は現今、かまへと稱す、かまへは構なり、當年の邸角竹藪となり、堀の形を存す、

### 加賀屋敷

東黒田村大字長岡にあり、佐々木京極加賀氏の邸趾なり、加賀氏は京極氏の支家にして、加賀守高敷を祖とす、代々加賀守と稱し、因て加賀氏となれり、加州氏と稱するは畧稱なり、同氏の來由は第七篇第十四章に詳記したるを以て畧す、長岡に小字丸の内、又御領所と稱するは同氏の遺墟なりと傳ふ、蓋し其初は京極滿信の邸なり、

### 黒田屋敷

東黒田村大字本郷にあり、黒田氏の先は京極氏より出づ、本郡黒田庄並に伊香郡の黒

田等を領せり、第七篇第十四章に詳記したれば参照すべし、其邸趾を今に御屋敷といふ、一説に此地の黒田氏は藤原氏より出でし家にて、佐々木氏の族と別家なりといふ、後考を俟つ、

### 百々屋敷

鳥居本村大字鳥居本にあり、古へ百々氏の居邸なりしを以て、百々村とも稱せり、百々氏は京極氏の臣にして、盛通を祖とす、始め河野氏より出て、越智氏を稱せしが、盛通の時百々と改む、其孫裔百々内藏助は永祿四年八月十一日、淺井氏に従ひ野良田合戦に陣沒せり(第八篇第十三章)元龜元年六月、織田信長淺井氏を姉川に破るや、直ちに丹羽長秀をして佐和山城を圍ましむ、城將磯野員昌能く禦ぐ、信長長秀に命じて長圍の策を執らしむ、爾來八箇月長秀は百々屋敷を根據とし、諸將を指揮して佐和山を圍む、翌二年二月、員昌城を開きて長秀佐和山城に入れり、

### 佛生寺砦

鳥居本村大字佛生寺の山上にあり、今に城山と稱す、又其南方なる小字勘定谷にも一砦趾を存し、城跡と傳ふ、文書記録に此城砦に係る記事を見ざれば、何れの時代に何氏の據りしか知るべからず、但佐和山城に關聯せし壘なるべし、



### 若宮屋敷

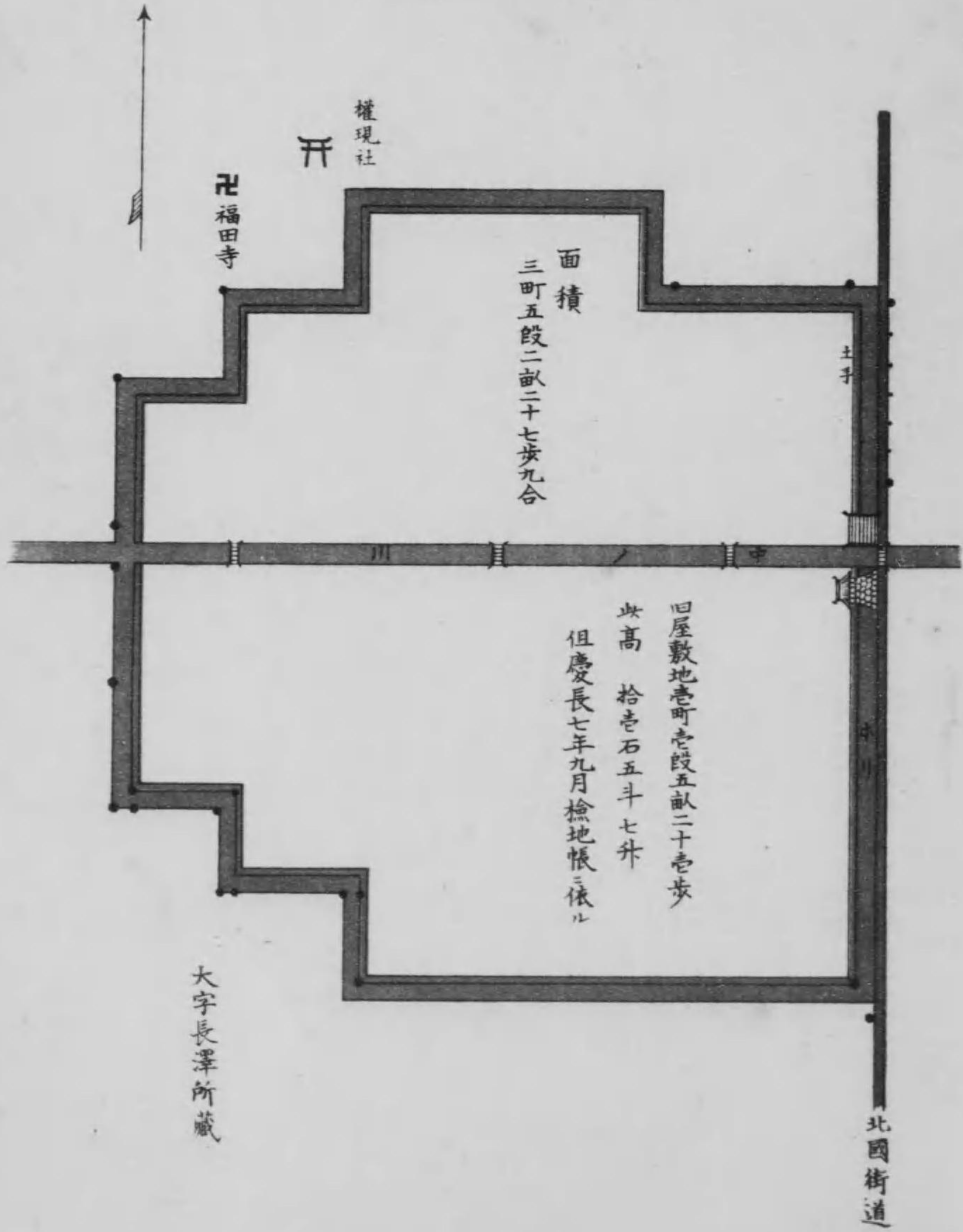
法性寺村大字飯にあり、若宮氏代々居住の地なり。若宮氏は京極氏の臣にして、源太頼重は南北朝の亂に従ひ武功あり、若宮氏に係る記事は中卷第七篇第十四章に詳記したれば、之には畧す。山内一豊の夫人となり、鏡底の黄金を以て名馬を買へるといふは、若宮氏の女にして、實に此邸に生れし人なり。當年の邸今に存して上屋敷、中屋敷、下屋敷と稱し、例年祭祀を絶たず。

### 嶋屋敷

同村同大字にあり、飯村は朝妻港より箕浦に出づる通路にして、又北國路と十字形をなす、而して南は天の川を以て自然の防禦をなし、武家時代に於ては必ず通行を監視すべき地位なれば、若宮、嶋等の武士が在邸せしものなるべし。嶋氏の邸は北國街道に沿ひ、其一族は三四家となり、角左衛門屋敷、重郎左衛門屋敷、新六屋敷、仁左衛門屋敷等の邸趾相連り、轉た當年の全盛を追懐せしむ。嶋記録を按ずるに、角左衛門屋敷と稱するは其宗家にして、新六は次男の家なり、嶋氏に係る來由は中卷第八篇第三章に詳記せり。

### 長澤屋敷

## 長澤城之圖





法性寺村大字長澤にあり、其邸主は元來何氏なるや詳ならず、按ずるに時代によりて變遷したるが如し、始め長澤義盛並に長澤入道宗琢等の名見ゆれば、此等の族在邸せしならん、文明十八年九月、長濱關の成敗を若宮藤六に知行せられたるを見れば(古文書一)文明の亂後に若宮氏が代りて此地の權勢を得たるを知る、又京極氏の支族慶僧與次郎家國が長澤の代官たりし事嶋記録に見ゆれば、慶僧氏も在邸せしか、然れども永祿、元龜の頃には田那部氏の一族頗る繁茂し、田那部式部は今井家の重臣として盛名あり、式部息滿牟介、田那部源右衛門及同十右衛門の三人は姉川役に戦死し、澤山籠城衆の中に無足衆(知行なき武士なり)田那部又四郎、同新兵衛、同新右衛門、同又次郎等の名見ゆるは、同じ一族なるべし、要するに長澤屋敷は平野の村落なれども、北國街道の要地として、夙に京極氏が要害的の設備をなし、部將をして交代守衛に任せしが如し、無年九月五日、京極高廣が下坂左馬助に宛てたる文書(古文書一九二)に、今度於長澤之構碎手無比類之勳高名云々とあり、長澤邸の戦争に於ける勳功を賞したるを見る、又十二月五日、淺井賢政より若宮藤三郎に宛てたる文書(古文書一七三)に、將又昨日長澤番勢衆少々足輕候而手負候云々とあり、長澤邸に在番の士が負傷せしを記す、當年新關の所在なるか、今に番どこと稱する土地の名あり、長澤邸の古圖左の如し、



## 顔戸山砦

日撫村大字顔戸の山上にあり、顔戸山は一に朝妻山といふ、其山上巍然たる一角に砦趾あり、土人一の城と稱す、本郡の山西河南の平野を眼下に一望さるゝ地位なれば、望樓的要塞として築きしものなるべし、其築砦の年代詳ならざれども、元龜、天正頃に創められし新砦には非ざる可し、今井氏の據りし支壘なるか、

## 七殿屋敷

神田村大字加田にあり、加田氏の居邸なり、加田氏は京極氏の臣にして、其祖は伊藤勝重より出づ、其子孫七家となり、邸を連ねて此に住せり、故に加田の七殿といふ、七家は加田孫左衛門、同九郎左衛門、同權左衛門、同甚兵衛、同右近右衛門、同新八、同重右衛門等の家なり、猶此村には加田七家の外、伊賀角兵衛、小川東右衛門等の士ありしこと、佐々木南北諸士帳に見ゆ、無年十月二日、淺井久政の文書に、今度於加田口働誠無比類云々と見ゆ、

## 下坂屋敷

六莊村大字下坂中及び大字寺田にあり、下坂氏の居邸なり、下坂氏は京極氏の重臣にして、南北朝の戦亂には治部左衛門尉ありて、足利部下に驍名あり、其孫裔代々京極氏

に仕へ、同族繁茂して二三家となりし事、江北記に見ゆ、下坂氏の來由は第七篇第十四章に詳記したれば、之には畧す、但し文明の亂に京極家内訌を生せし時、下坂一族は分離して兩黨に分屬し、各自が下坂庄の代官を競望して、遂に兄弟争ひとなり、弟注記は兄の下坂邸を責めし事も同記に見ゆ、寺田に在りしを寺田下坂と稱へたりと傳ふれど、其祖は一なるべし、

## 堀部屋敷

北郷里村大字堀部にあり、堀部は六角頼綱の子備前守宗泰を祖とすと新開畧記に見ゆれど、其系統は如何あらん、但し佐々木族の一家たるは明なり、本郡堀部の地を領し、因て姓とせりといふ、在來の地誌に堀部氏は六角氏の孫裔なれば、京極氏に仕へずと記せども、そは誤りなり、江北記に天文十三年九月、京極佐々木六郎生害の條に、味方は次第に無勢になりて、同年十月二十二日生害し給ふ、法名道惠、堀部以下のもがら余語(伊香郡余美)の邊にて自害して、京極の一跡此時滅亡しける云々とありて、堀部氏が京極氏に従ひ死せし事を記す、大字堀部に小字堀の内と稱する地あり、當年在邸の趾なりと、

## 國友屋敷



神照村大字國友にあり、國友氏の居邸なり、江北記長享元年四月三日の條に、多賀大成が亂を起して、京極高清を攻めし時、大成は中野(淺井郡)に陣し、弟又三郎は國友兵庫助屋敷に陣取りし事見ゆれば、當年國友兵庫助なる武士ありて、京極氏の争ひに多賀氏に黨せしを知る、淺井三代記には野村兵庫守在邸の事を記す、國友兵庫助は野村兵庫頭と同じ人なるか、野村氏は淺井郡野村を根據とす、國友氏の居趾を小字殿屋敷と稱ふ、遺墟猶存す、

#### 今村屋敷

神照村大字今村に在り、今村氏は始め京極氏の臣にして、當地に邸宅を置き、今村氏を稱す、蓋し其領地なればなり、後淺井氏に仕へし今村掃頭介あり、現在小字大將軍と稱する土地内に邸址存す、

## 第十一編 墳塚墓志



神照村大字國友にあり、國友氏の居邸なり、江北記長享元年四月三日の條に、多賀大成が亂を起して、京極高清を攻めし時、大成は中野(淺井郡)に陣し、弟又三郎は國友兵庫助屋敷に陣取りし事見ゆれば、當年國友兵庫助なる武士ありて、京極氏の争ひに多賀氏に黨せしを知る、淺井三代記には野村兵庫守在邸の事を記す、國友兵庫助は野村兵庫頭と同じ人なるか、野村氏は淺井郡野村を根據とす、國友氏の居趾を小字殿屋敷と稱ふ、遺墟猶存す、

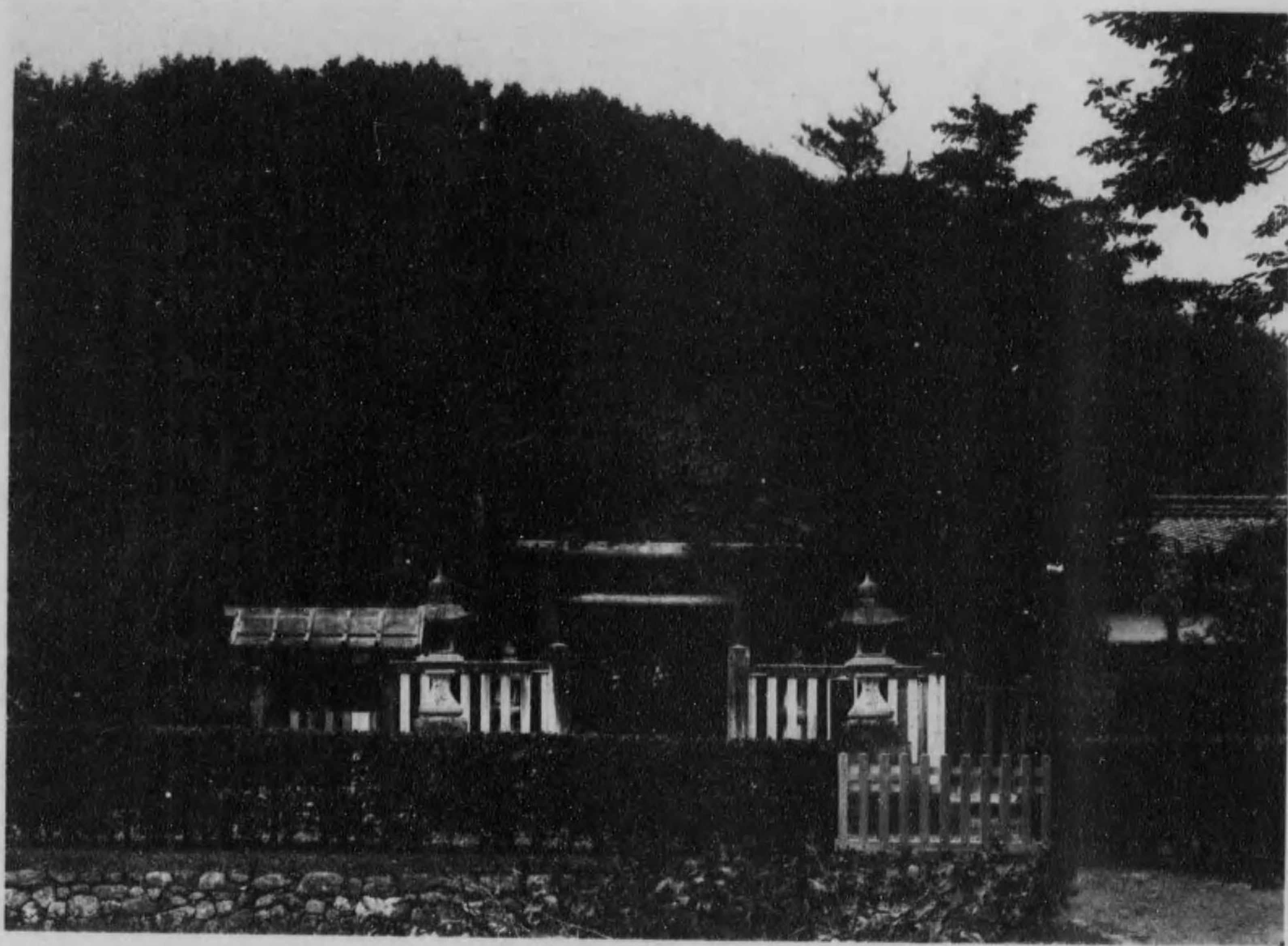
今村屋敷

神照村大字今村に在り、今村氏は始め京極氏の臣にして、當地に邸宅を置き、今村氏を稱す、蓋し其領地なればなり、後淺井氏に仕へし今村掃頭介あり、現在小字大將軍と稱する土地内に邸址存す、

第十一編 墳塚墓志



大原村息長御陵





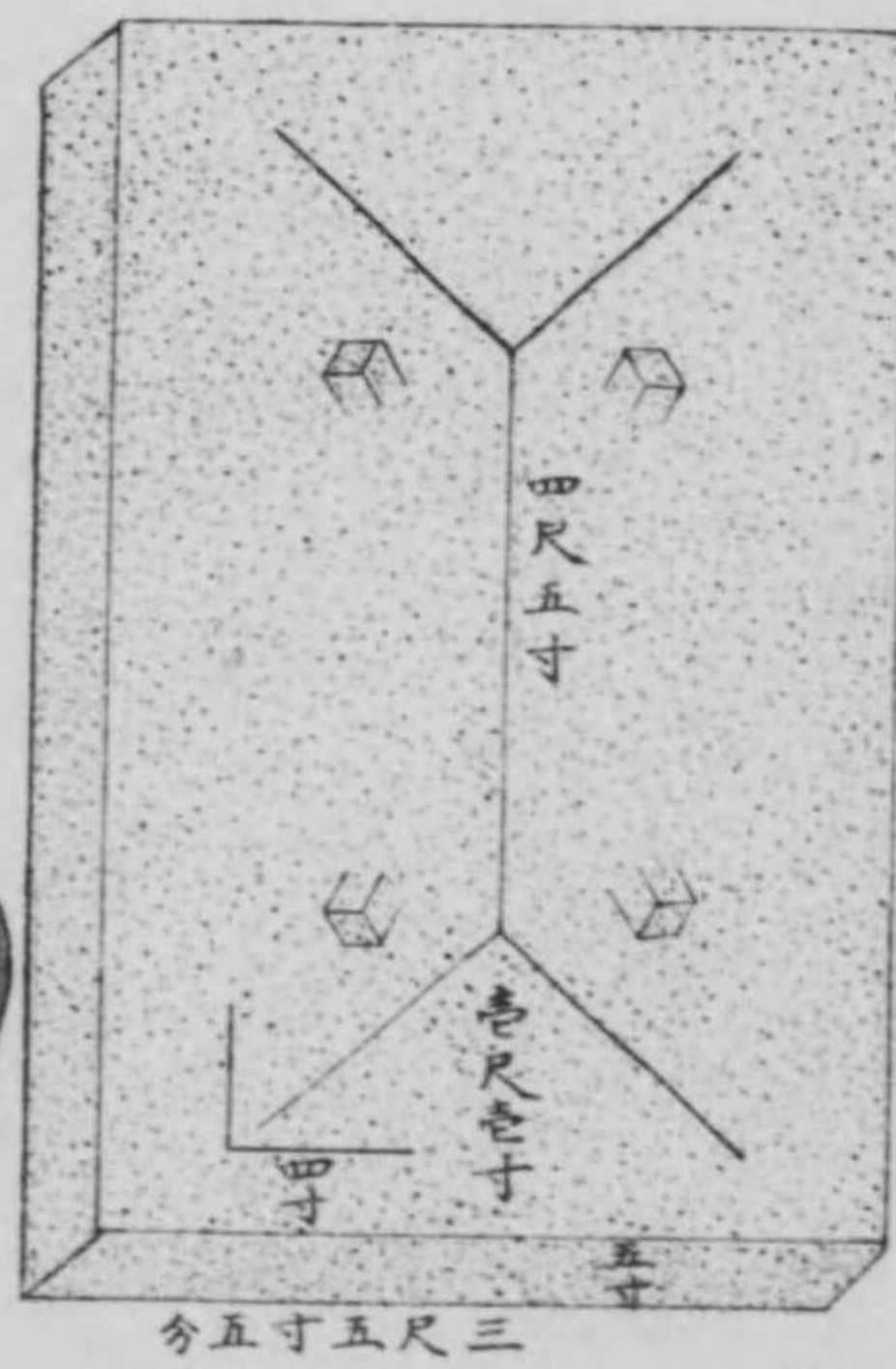
息長陵發掘物

大原村大字居田

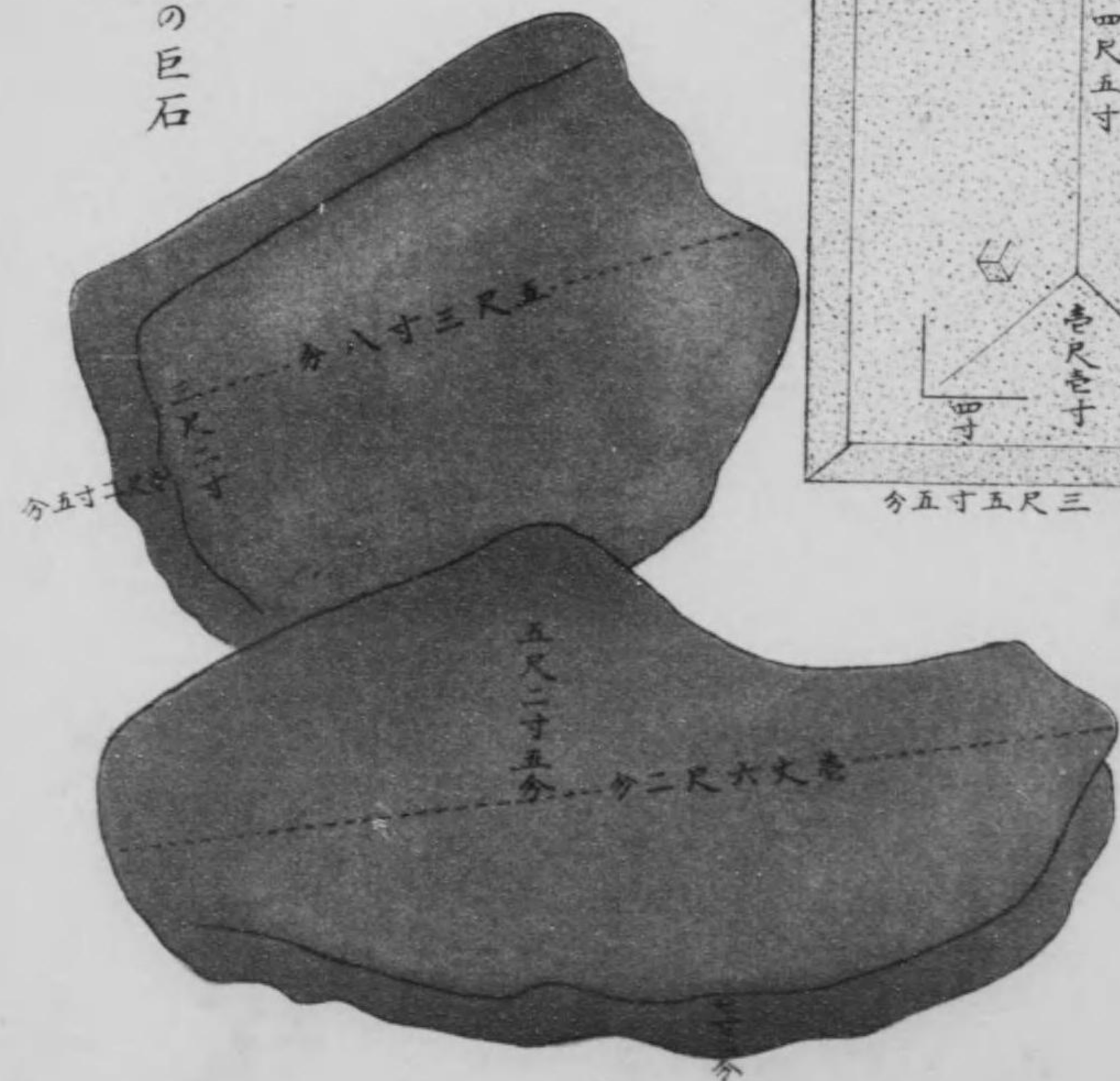
明治五年十月検査の時  
寫生せし原圖に縮寫す

石棺の蓋

曲尺七尺二寸五分



石據の巨石





## 第十一編 墳塚墓志

### 第一章 息長陵

大原村大字村居田にあり、敏達天皇の皇后息長日廣姫の御陵なり、息長陵は延喜の諸陵式に

息長墓 舒明天皇之祖母、名曰廣姫、在近江國坂田郡兆域東西一町、南北一町、守戸三烟。

とありて、延喜の時代には一町四方の兆域にして、墓守り三戸を附せられしに、武家の跋扈により、皇室の式微となり、守墓の制も廢たれ、天皇の御陵すら其所在を世に忘れらるゝに至りしかば、本郡息長陵も荒廢に委ねられ、口碑傳説さへ湮滅し果てたりしが、元祿九年同村光運寺の本堂改築のため其地を開墾せしに、圖らずも石櫛顯はれ、其中に大石棺の埋藏されありたれば、里人等大に驚き、工事を中止し、領主の指揮を請ひたり、領主之を檢し、其村人堀居左近に累世守護の由緒あるを以て、其發掘品を其邸内の一隅に遷し、僅かの兆域に埋藏し、竹柵を繞らさしめたりしが、明治五年十月、教務省より山内大録、猿渡中録出張して、實地を檢察せられしが、同八年に至り、陵掌、陵丁を置かれ、十年十月、兆域確定されんとするに際し、當時の左近は其邸地を割きて之を獻納



柏原村大字柏原字狐塚にあり、古より王塚と稱し、應神天皇の皇子稚淳毛二岐皇子の墳墓なりと傳ふ、元祿十年十月古墳墓取調の事ありしに、時の代官曲淵市郎右衛門之を調査して報告したれば、京都町奉行松前伊豆守、小出淡路守實地を檢察せり(柏原萬留帳)當時の取調書の控に左の文あり、

せり、十一月御陵を造營せられ、其兆域百七十五坪とす、別に舊御陵地の兆域三十八坪ありしが、十六年十月宮内省の所轄に屬したり、十七年十二月陵掌陵丁を廢し、守部一名を置かる、二十八年九月石柵を設けられ、數百年間荒涼たりし陵墓も、其規模漸く整頓するに至れり、明治五年十月、檢察當時の古圖により、石棺の蓋石と石櫛の巨石とを模寫して挿入す、

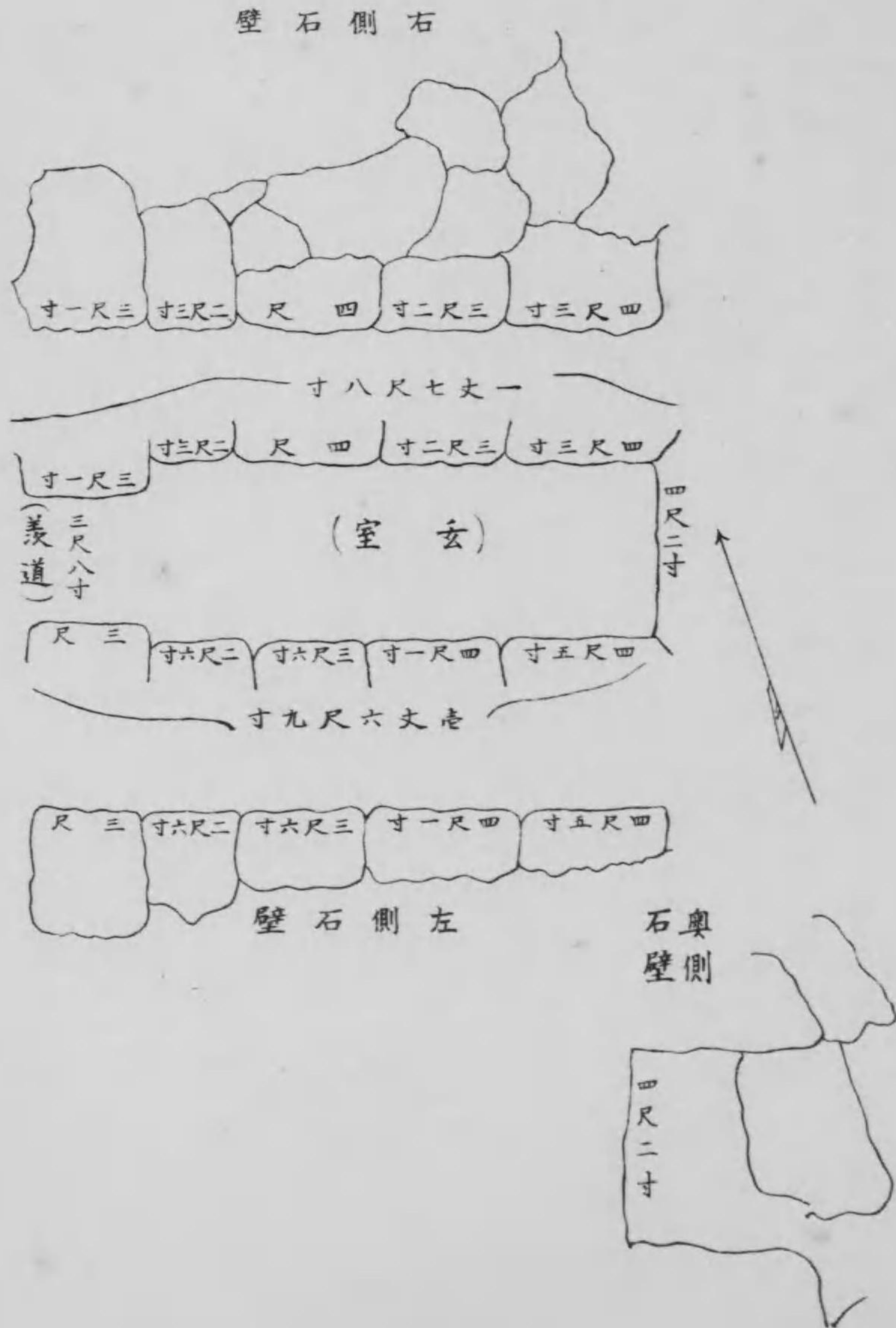
第二章 古墳塚

王塚

柏原村大字柏原字狐塚にあり、古より王塚と稱し、應神天皇の皇子稚淳毛二岐皇子の墳墓なりと傳ふ、元祿十年十月古墳墓取調の事ありしに、時の代官曲淵市郎右衛門之を調査して報告したれば、京都町奉行松前伊豆守、小出淡路守實地を檢察せり(柏原萬留帳)當時の取調書の控に左の文あり、

町より貳百三十六間半南の畑中に古塚あり、南北十一間、東西は北にて六間、中腹七間、南にて三間半、塚上五個の大石と外に捨て石貳つ御座候云々、

然れども其後何等確定の事なし、近年土人塚上の大石を掘出さんとしたるに、其大石





物堀發塚王原柏字大村原柏

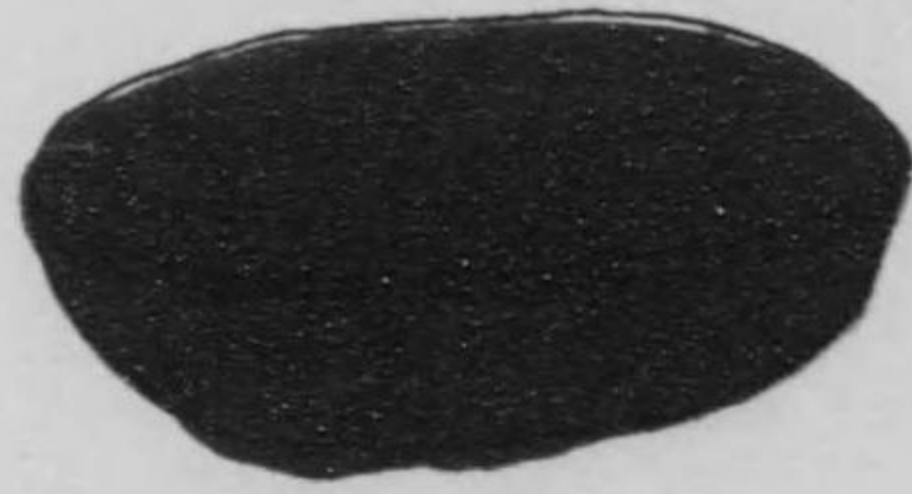
杯



平瓶



蓋附



金環



銀環



カネ





は古墳の石櫛にして、蓋石は傍に移されたるも、配石の位置整然として並列し、其土中より金環二個、銀環一個、刀子一、陶器にては横瓮一個、蓋埴一個、高埴一個は完形を存し、其他破片多く出でたり、按ずるに中古に所謂塚盗人の災に罹りて荒されたるものならん、元祿の記録に五個の大石と云へるは、石櫛の蓋石の散亂したるにてありき、此古墳は西々北を美道の口として、東々南に向ふて築かれたり、當時の石櫛見取圖と發掘されし物品とは左に挿圖とす、王塚の南東に接續して長塚と稱する長方形の土地あれども塚形を存せず、

### 野上塚

同村大字長久寺妙光寺の裏にあり、土人野上塚と稱す、正しく古墳なるべし、長久寺は古へ玉倉部と稱せし古跡、又天武天皇壬申の亂に戰場となりし古地なれば、此地に存する古墳もよしありげに思はる、

### 神の木塚

春照村大字村木の水田の中にあり、小字名を神の木といふより、古墳名となりしものか、其來由を詳にせず、古へより塚の土石に觸るれば腹痛すとて土人之を恐る、

### 經塚



膽吹山の頂上にあり、近江輿地誌畧に、中央に石壇ありて、石室の中に石像の彌勒宛然たり、階前石の寶塔あり、向ふに經塚あり云々と記す、編者曾て同山に登り、彌勒堂に賽す、其位置通常地面より一段隆起し、圓形の堆土なり、彌勒堂は其上にあり、切石を以て製さる、近古の製作ならんも、其前方の左右に古き五輪塔、寶篋印塔亂堆したる光景は、挿圖の如し、輿地誌畧に、階前石の寶塔ありと記するはこれなり、而して經塚は彌勒堂より稍々隔りたる南にあり、經塚なるものは多く法華經を埋めしものなれば、其類なるべし、又按ずるに彌勒堂ある圓錐形の高地は或は古墳にあらざるか、仁壽より貞觀の頃に膽吹山中に膽吹山寺を創立せし豪僧三修は、昌泰二年五月十二日に同山にて卒去せしこと日本紀略并に本朝高僧傳に見ゆ、然れども膽吹四大寺の縁起には三修は其終り岩上より天に登りたりと記す、依て按ずるに三修を山上に葬り、墳墓を築きたるにて、山寺の所在より之を仰げば、天に登るの意に解せらる、果して然らば彌勒堂所在地は山寺の開基豪僧三修の墳墓にもあらんか、記して後考を俟つ、

### 古 塚

伊吹村大字伊吹にあり、圓錐形の古墳なり、

### からこ塚

膽 勒 彌 頂 總 の 山 吹 膽





大原村大字間田小字唐戸岡にあり、實地を踏査するに、石櫛の配石土上に顯はれ、正しく古墳墓なり、淡海木間櫻に、間田村に日御子神社あり、祭神は天の川、芦津姫命、或は瓊々杵尊といふ、命は姉川より登りて、膽吹山に登り、下りて間田なる少名番上すくなばんじやうと稱する地にて神避りましたり、仍て其地に社を建て奉崇して、日御子大明神と稱すと記す、此説他書に見えざれども、或は風土記の説の遺傳せしにやと思はる、日御子神社の所在とは一町餘の東にあれども、其古墳の所在の小字名を唐戸岡と稱するは、石のからとの在る岡なれば、終には其名を地名に負ひしなるべし、墳墓の地に觸るれば腹痛するとの傳説は、土人の間に唱へらる、祭器の破片塚土の間にあるを見る、

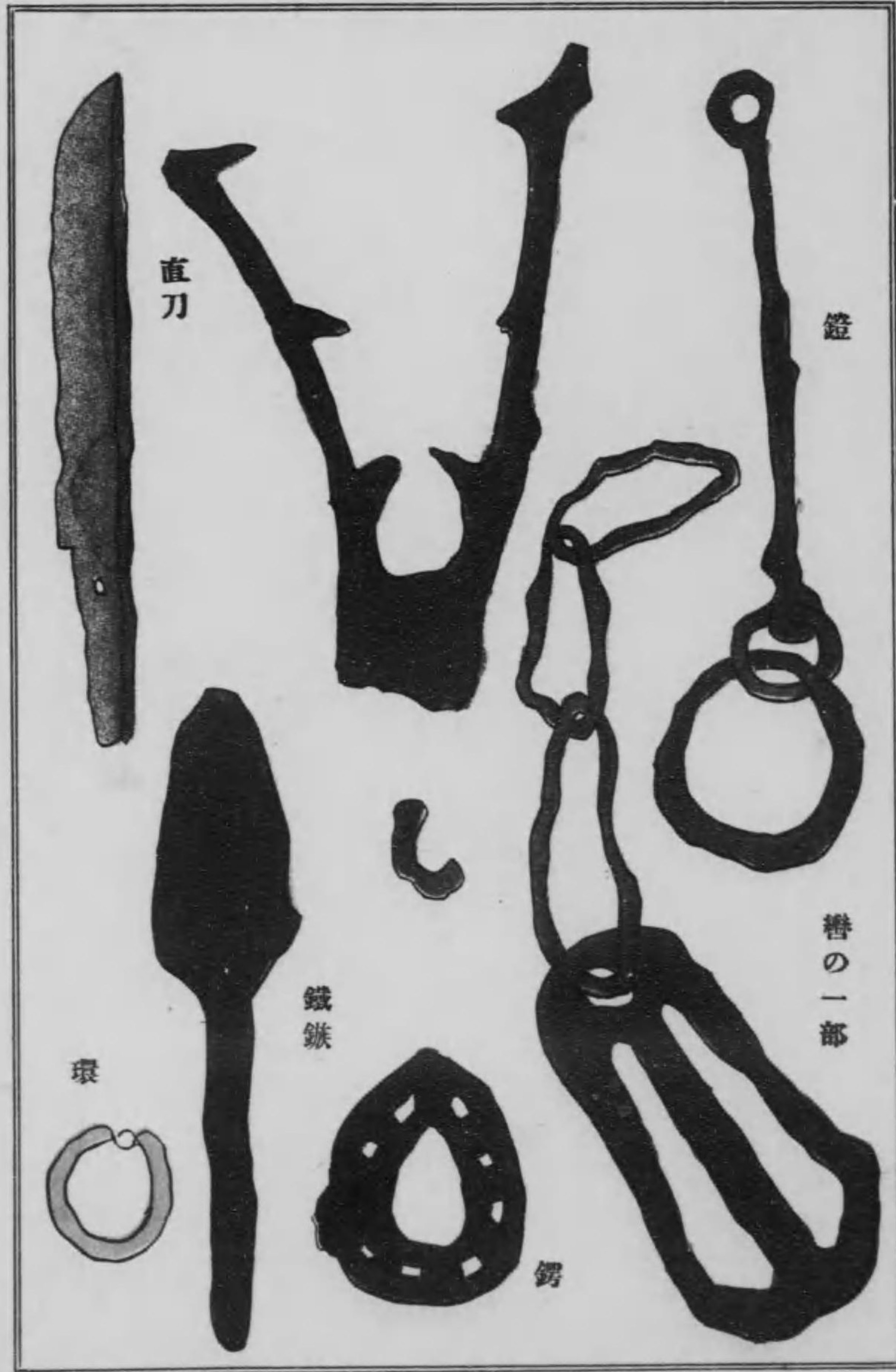
### 岡 塚

同村同大字郷社岡神社大門の東側小字岡にあり、中古發掘せられ、四圍畑となりしも、石櫛の巨石は依然として其所に存し、猶古墳の形を窺ふべし、口碑傳説湮滅すれども、蓋し其位置より考ふれば、此古墳は古へ岡神社と密接の關係ありしものなるべし、

### 田別塚

同村大字天滿の東田圃の中にあり、中古開墾の爲にや、堆き墳形を認めざれども、一樹の老杉森を爲し、石地像二三樹根に在り、古へより田別の神と稱す、日本武尊の皇子に





息長田別王あり、上古本郡息長の地を分領せられたれば(中巻第一篇)或は田別神は其王子に關係あらざるかと思はる、記して後考を俟つ、

すも塚

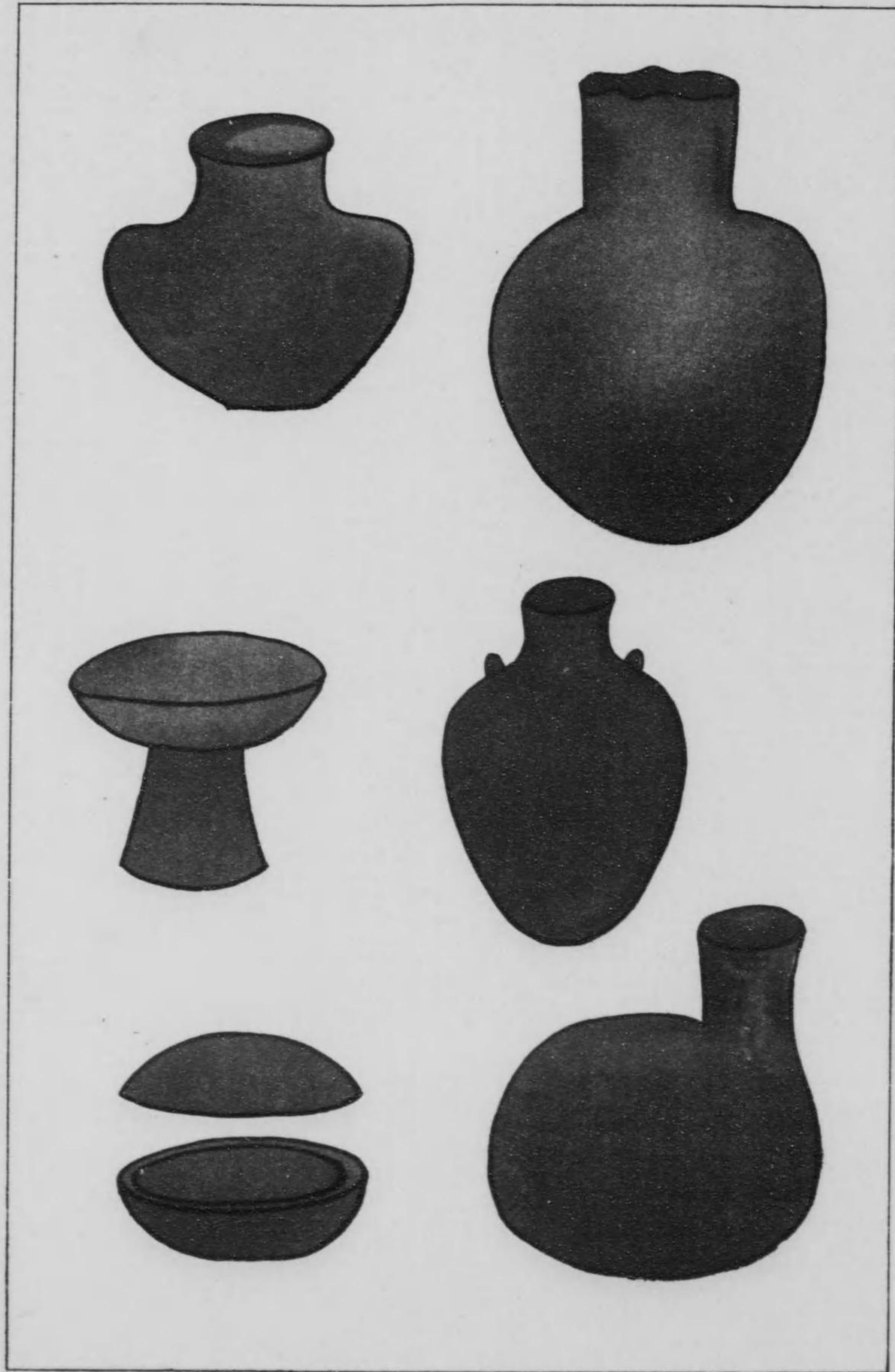
同村大字野一色領なれども、大字鳥脇の共有地なり、周圍約五十間の一丘なり、土俗すも塚と稱す、明治四十五年三月、同大字西元寺本堂改築の爲築地用の土を取りしに、四五の石出でたれば、工人等は注意を拂ひて石を掘り出せしに、其中より直刀、馬具、陶器等を出せり、報に接し同月十二日行いて發掘地を見るに、自然の丘地を利用せし古墳なり、發掘物左の諸品なり、

- 直刀一振、長三尺、 鐔 一個、 鎖付鉸具 二個、 鏡 二個、
- 甕の殘片、鐵鏃一本、 埴 三個、 提瓶 二個、 蓋埴十一個、
- 高埴 二個、 横笥 一個、

其他陶器の破片少からず、又蛤ならんと思はるゝ貝の破片が其中に混入せしは珍らしきも、發掘當時の状況を見ざれば、此貝片が祭器の中にあしや否やを確かむる能はざるも、古墳より貝片の出づるは其例未だ多からず、高橋健自氏は編者の質問に對して左の答へをせられたり、貝の破片は何に用ひしか定説無之候、從來これと同様の



大村原大字鳥脇もす塚発掘物ノ二





ものゝ發掘せられし例は、周防國宇野合村といふ處の古墳より、他の遺物と共に有之候云々其他貝殻の古墳より出でし例は伊賀國阿山郡友生村大字喰代むかしの王塚より出でし事、考古學雜誌に見えしが、之は貝殻並に魚骨を高墳に盛りありしと見ゆ、貝殻が古墳墓より出づとて、物質上よりは何等の價值なきも、四面山を周す、山東部の古墳より貝殻の出でたるは、考古學上よりは興味ある研究資料なるべし、猶其位置より西南約五間の所の土中より銀環一個と陶器に梅花模様ある破片の二種を發掘せり、挿圖參照、

### ぬか塚

同村大字野一色にあり前記すも塚より約一町東南にあり、周圍約二町計りの小丘にして、薪用の山林となれども、土人ぬか塚と稱す、此丘地もすも塚と同じく、自然の高丘なるべきも、ぬか塚の名を存するからは、丘地應用の古墳なるべし、未だ發掘の形跡を認めず、

### 皇后塚

同村大字井の口にあり、在塚の土地小字を皇后塚と書し、土人は「こんごう塚」と呼ぶ、編者は其塚名の尋常ならざるを以て、親しく實地を踏査せしに、村老の談に八十餘年前



里人此塚を發きし時より古への規模喪失して、今は只其一部を存するに過ぎずと、現狀を見るに石垣を三段に積み、下層は方六間、中層は漸次縮小して、上に石像三軀を石室に安置し、野神と稱す、石垣の外圍は墾田にして、古形を偲ぶに足らざれど、此異形の高地を築きしは、其所以詳ならざれども、或は古墳、石櫛等の殘骸を堆積せしにはあらざるかと思はる、果して其名の如く皇后塚にあらんには、此の荒廢は實に千秋の遺憾といふ可し、それより東一頃、田を隔て、一古塚あり、何等傳説を聞かず、此村には土地名に前記皇后塚の外さき塚、大塚等の名稱を存す、

ちこ塚

大原村觀音寺の山上にあり、ちこ塚と稱し、他に由緒を詳にせざるも、石櫛露出して古墳なるは明なり、

塚本の古墳

東黒田村大字北方にあり、所在の土地小字を塚本といふ、蓋し塚より出でし地名なるべし、其由緒詳ならず、土地の口碑には此所に黄金の雞を埋め、元旦には其雞鳴く、然れども人の之を掘らんとすれば、直に腹痛を起すを以て、古へより畏敬して掘る者なしと、古墳と腹痛とは古人の結びし墳墓保存の言葉の常なり、其實地を見るに墳塚の堆

土は既に墾かれて平地となり、石櫛の巨石は磊落として、水田の間に露出す、黄金の雞は中古に掘出されて、上古貴族の古墳も今は空しく蟬脱の形骸なる巨石を存するのみ、

經塚

同村大字志賀谷小字柳原にあり、一丘の土堆古を埋めて、人の其中を知るものなければども、其經塚と稱ふるより考ふれば、埋經の塚なるべし、

七塚

同村大字志賀谷の郷内に散在して、七個の塚あり、前記の經塚も其一なり、小字上貝戸に馬塚あり、字中切に南天塚あり、塚上南天の株あるを以て其名を得たり、字名引の田中に一塚あり、其名なし、字八幡に松の木塚あり、之れも南天塚と同じく、塚上松樹あるを以て其名あり、字森に一塚あり、森塚といふ地名を塚に名づけしならん、字神代に石塚あり、以上を志賀江の七塚と稱す、

しよけ塚

同村大字山室小倉山の西北隅に一堆塚あり、土俗しよけ塚といふ、其形「しよけ」と稱する籠を伏せたるに似たれば、其名を得たりといふ、此説如何にや、庄家塚にて庄司の古



墳にあらざるや、記して後考を俟つ、

### 經塚

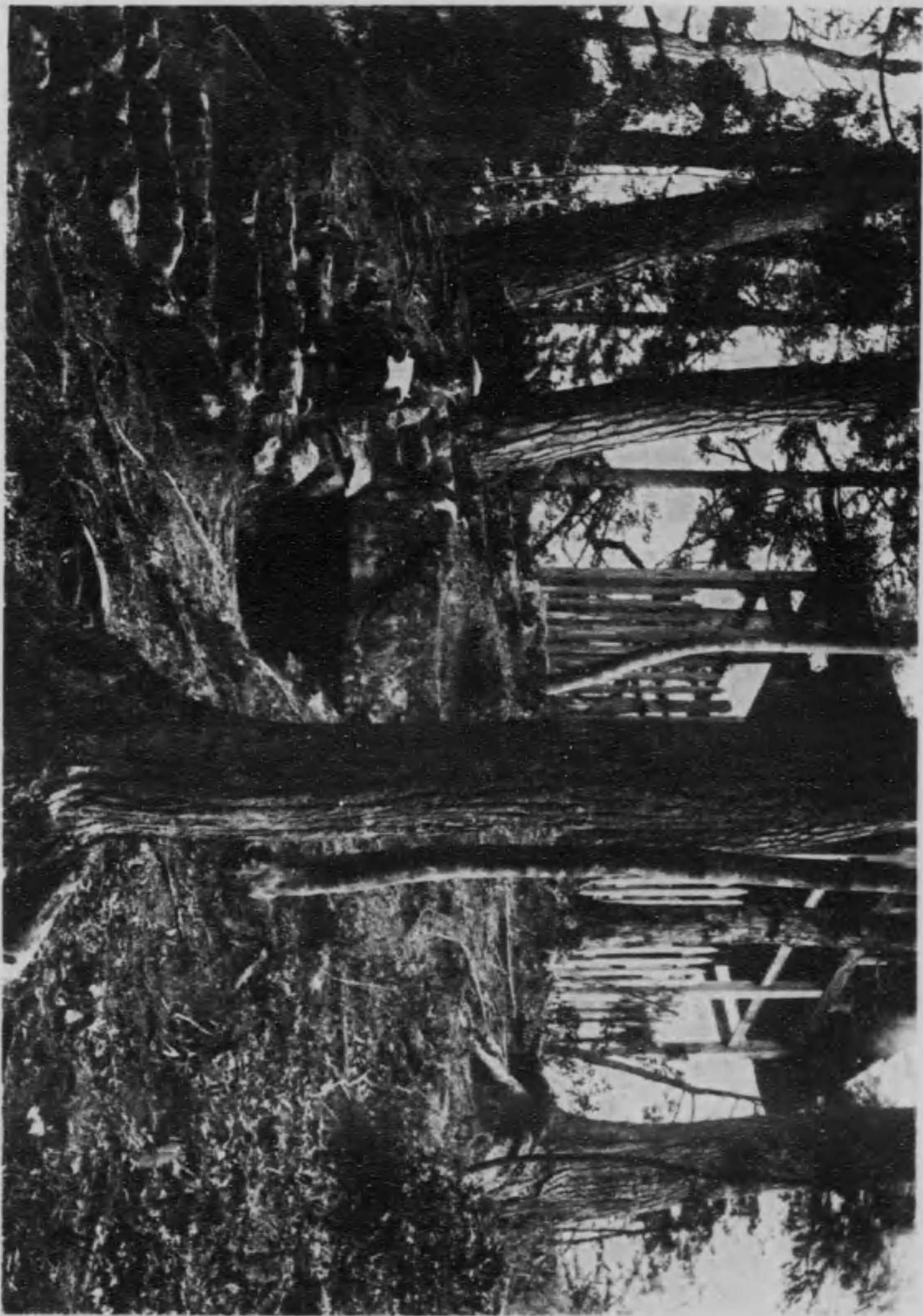
同村大字堂谷にあり、土俗法華塔と稱す、相傳ふ後鳥羽上皇名超寺(西黒田村)御潜幸の時、上皇不豫の事ありしに、極樂寺の住僧上皇の命により、法華經を謹寫して此所に埋めたり、依て經塚といふと、

### 經塚

同村瓢箪山の南端にあり、土人相傳ふ、古へ法光寺と稱する寺院ありしが、後年經文佛具を埋めし所なりとて、畏敬して觸れず、附近に夜泣地藏と稱する地藏存す、

### 等倫寺の古墳

醒井村大字一色等倫寺本堂の裏にあり、圓形の古墳なり、老樹森々たれども、現存の樹木は中古以後のものなり、塚上巨樹の株根を存するより見るも、古へよりの老樹は中古に伐採されたるが如し、石櫛の巨石は壘々として頭角を露はす、西々南に入口あるが如し、其規模より按ずるも、上古貴人の墳墓なるべし、塚上小祠あり、寺僧に問ふに白山權現といひ、又、勘平宮さんと稱す、勘平といふ人の祭りし故にやと答ふ、神部又神戸の意にあらざる歟、今荒廢して古への神靈は寺に保存さる、之を見るに金銅の懸佛な



醒井村大字下丹生古墳金景



り、明治四十三年八月、高橋健自氏見て鎌倉時代の製作なるべしといはる、其拓本中巻に挿圖としたれば参照すべし、

### 丹生古墳

同村大字下丹生善仁寺の傍にあり、圓形の大古墳なり、按ずるに息長丹生真人家の墳墓なるべし(息長丹生氏中巻第三篇に記せり)塚上に小祠を祀る、蓋中古美道の入口が發かれし爲にや、櫛内の埋藏物は悉く撤去せられて、今一物を留めざれども、其規模の廣大にして、石櫛の完全に保存せらるゝは、古代貴族の墳墓を知るべき爲に好恰の遺蹟なり、美道(口入)は幅五尺五寸、奥行八尺にして、挿圖の如し、玄室は幅七尺餘、奥行一丈六尺、美道と玄室とを通じて全長實に二丈四尺二寸、之に七個の大石を以て天井とす、土人蝙蝠の穴と稱す、其方向西南を美道の入口とす、

### 枝折の古墳

同村大字枝折小字塚原にあり、其規模大ならずと雖も、半は土壤を開墾せられ、巨石壘々として露出す、

### 狐塚

同村大字上丹生小字野田の山上にあり、累々たる白石堆し、古墳なるべし、



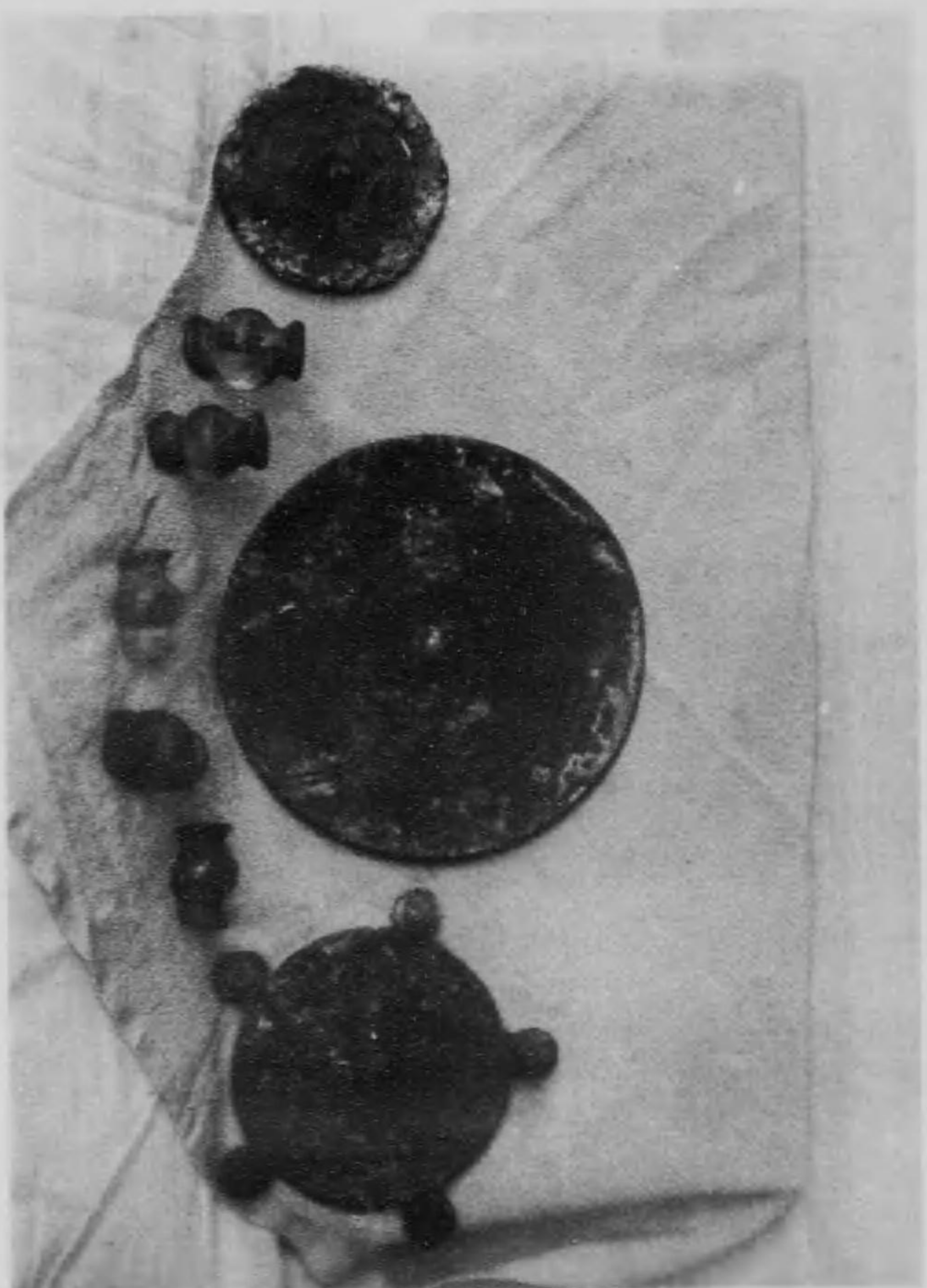
能登瀬の古墳

息長村大字野登瀬式内山津照神社の境内にあり、明治十五年同神社の社殿を移轉するに際し、門路を擴げん爲め、岡山と稱する瓢形の高地を均さんとしたるに、巨石の埋もれありしを掘出せしに、其巨石こそ美道入口の蓋石なりき、土人等は驚かて櫛内に入りしに、種々の副葬品は整然として、其窟中に羅列しありければ、一面警察署に届出で、一面遺物の幾分を持出せり、官吏臨檢して元の如く埋めしめ、持出せし遺物の中重なるものは、之を内務省に送りたり、一年餘にして内務省は届出し品目を悉く却下して、長く山津照神社の神庫に納めしむ、其品目左の如し、

古鏡三面(二面は圓鏡、一面は五鈴鏡) 直刀十數振 刀子三個 土器類には甕、大高坏、蓋坏、提瓶、  
甗等多數 金銅の天冠らしき物の破片數個 馬具には俗に朝鮮鏡と稱する古代  
鏡轡二個 杏葉 雲珠 鞍橋の覆輪らしきもの二個 三輪玉(水品)五個、

而して其土器類の形は他の古墳發掘物に比して總て二倍大にして、其様式も尋常古墳に見ざるものなり、猶古墳發見の當時官は直に墳口を埋めしめられたれば、自餘の副葬品を始め、墳墓の構造も親しく知るを得ざれども、其事に當りし人の言を聞くに、墳口は南面にして美道の幅三尺餘、高五尺もあらん、而して奥行約一丈を経て、玄室に入る、

息長村山津照神社古墳發掘物



(五鈴鏡、一圓鏡、三輪玉五)



其 二 土 器 類





玄室の幅九尺、奥行一丈五尺、高七尺、蓋は三大石を以てす、玄室の奥に一段高き所あり、これ石棺なるべし、前記の副葬品は其周圍に配置されたり、猶室の東方に四個、西方に四個、大なる土器装置されありたり、玉類は見當らざりしも、隈なく探しなばありしならん云々、而して其古墳は前方後圓の瓢形にして、其土中より埴輪圓筒の破片出づ、本郡中古墳の數多きも、副葬器の大なると埴輪の出づるとは、現今にては此古墳のみとす、

按ずるに山津照神社は延喜式内の古社にして、其地古への名族息長真人家の住地なるより考ふるも、同族が其祖先を祀りし神なるは疑ふ可からず、第四篇第十章に記せし神に位階を贈られしは、本郡内他の神社に見ゆるも、天平神護元年に神封六戸を此社に寄せられしは、他社に見ざる特例なり、當時息長真人の一族は其勢力熾にして、奈良朝廷の要路に立ち居りしは國史に明なり、かゝる名神の鎮座地に、此古墳は發見せらる、亦尋常貴人の墳墓にては非ざるべし、土地の傳説には神功皇后の父君なる息長宿禰王の墳墓といふ、さもあるべし、近時宮内省は屢々吏を派遣し、調査の歩を進めつゝあり、御陵候補地の一に加へられしやに聞く、寫眞挿圖參照、

### 塚の越古墳



古墳發掘物



日撫村大字顔戸  
山中より出づ

埴

長一寸一分 幅八分

勾玉

古鏡  
四神四獸鏡

息長村大字新庄古墳より出づ

同村大字新庄小字塚の越の田間にあり、瓢形古墳の侵食せられしやに見ゆ、古へより土地の口碑に元日の曉黄金の雞鳴くと傳へたり、實にや其古墳は朝日照り夕日も輝く好地位にあり、明治十八年人あり好奇心に驅られて金雞を占めんと、一夜窺かに此墳を發きたりしに、地主堤彦七暴狀あるを聞き行きて之を見しに、土中に金環、勾玉、管玉等散見したれば、拾ひ得て家に保存せしに、明治二十四年臨時全國寶物取調局より九鬼隆一氏等の一行本郡に來りし時、之を見て左の鑑査狀を下されたり、

鑑査狀

第五九六三號

滋賀縣坂田郡新庄村

堤 彦 七

一金環 全量壹匁

壹 個

一勾玉 青玉 量參匁

壹 個

右美術工藝上の參考となるべきものと認定す

明治二十四年八月一日

臨時全國寶物取調局臨時鑑査掛 山名 貫 義



同局書記兼鑑査掛

川崎千虎

同上

小杉温邨

同取調掛

正七位 黒川眞頼

同取調委員

從四位勳四等 川田剛

同取調委員長

正三位勳二等 九鬼隆一

左圖参照

### 神塚

息長村大字西圓寺に神塚山あり、墳塚の位置分明ならざれども、里人曾て落葉を掻き取りし時、曲玉、管玉を拾ひ來りし事屢々ありたり、編者其管玉を見しに、俗に出雲石と稱する青玉にして、長九分、徑三分五厘のものなりき。

### 牛打の古墳

息郷村大字牛打の東中仙道の南にあり、明治十六七年の頃、土人等土工用の土を掘り取りしに、石櫛を發見し、中に種々の副葬品ありしが、破壊し盡されて、今一物を存せず、石櫛は割りて石垣とし、古墳趾は畠地となれり、

其墳趾より南へ半町計りを隔て、古墳ありしが、此古墳は全くは破壊せず、其上を平



坦にし、今は畑とされるも、古墳の上のみは農作物成長せずと、巨石あるによりてならん、

### 石塚

鳥居本村大字鳥居本小字ねぶた神に在り、一に高良塚といふ、石塚は石束の字を用ゆ、古墳に係る傳説は早く亡びしが、天保三年四月、土人が工事用の土砂を此塚に採りしに、兜一個、古鏡二面、埴數個を發掘せり、依て祠を建て、高良神社と稱し、爾來年次三月五日を祭日とせり、古鏡一面、埴二個は現存し、他の發掘物は何れにか紛失せり、古鏡は八稜鏡にして、徑三寸九分、裏面に蝶の如き模様を存す、按ずるに和鏡にして、藤原時代後に屬すべし、塚上に寶篋院塔一基あり、高四尺五寸七分、徑下部にて一尺、八稜鏡と埴の圖參照、

### 人塚山

日撫村大字顔戸にあり、圓形の一丘なり、土俗人塚山といふ、又一説に後鳥羽上皇名超寺御潜幸の當時、此丘より田植を御覽ありたりとて、鳥羽岡とも名くと、此丘狀を見るに、正しく圓形の古墳なり、所謂人塚に相違なかるべし、

### 黄牛塚

鳥居本石塚よりの古鏡と埴





同村同大字にあり、黄牛は一に王丘に作る、其黄牛と稱するは、曾て後鳥羽上皇、名超寺御潛幸の時、日撫神社に角力の御覽ありしが、當時黄毛の牛を納め給へり、其牛百餘歳の長壽を保ちて斃れたれば、社外巽の方に埋葬し、因て黄牛塚と稱すといふ、此説如何あらん、現在其所在の地の小字を王丘塚と書すより考ふれば、黄牛は王丘にて、上古某王の墳墓ありて、王丘の名を存したるにて、上皇黄毛の牛云々は後人の附會にてあるべし、元來顔戸には式内日撫神社の鎮座地にして、其附近の地は上古に於て貴族の封地となれり、故にそれ等一族の墳墓も多かるべく、其大字内に塚名の存する所多きは、郡内其比を見ず、即ち前記王丘塚の外、さへ塚、平塚、塚の上、兜塚、埋塚、東埋塚、龜塚、塚町等の名あり、何れも墳塚より出でし名稱なるべし。

#### 舟崎山の古墳

同村大字舟崎東北の山上と山腹とに亘りて多數の古墳あり、故を以て其山を龜原山と稱す(龜はがめの謂なり)山上約二町に亘りて七回と稱し、七箇所に大石を置く所あり、これ皆古墳にして、曾て樹根を穿ちし際、祭器の破片出づ、土人の保存するを見るに、蓋増坏等の破片なり、山腹に雄石、かめ石等稱する巨岩あり、山上の古墳と同式なるや否や、又經塚あり、明治四十三年八月十四日、湖北大地震の時、築石の一部破壊したれば、里人は之



を修理したるに、陶製の經筒ありて、中に腐蝕せる經片ありたり、此大字氏神位山神社は村内なる高き丘上にあり、社傳に息長宿禰王の墳上に鎮座せりといふ、丘は自然の高地なり、古墳ありとすれば自然の高地を利用せしものなるべし、

### 龜岡

神田村大字加田にあり、かめは多く龜の字を用ゆるも、かめの稱は多く瓶より出づ、古墳の所在地に龜山、龜岡等の名稱は諸國に亘りて、其例多し、本郡内に於けるも又同じ、大字加田の龜岡を以て、直ちに古墳と定め難けれど、一丘地にて其の名の傳はるは注意すべきなり、

### 經塚

西黒田村大字藺原の山上にあり、方七尺計りの地を五輪塔の斷石を積み重ねたる所なり、土人畏敬す、按ずるに此地一帯は古刹布施寺の城内なるべければ、埋經の塚も築かれしなるべし、但し五輪の斷石を積重ねたるは後の修理なるべし、

### 馬塚

同村大字常喜田圃の中にあり、相傳ふ佐々木高綱宇治川先陣の功を爲せし名馬池月の塚なりと、池月曾て病む、當時馬灸の名人あるを聞き、馬丁遠く引き來りしに、其人死

してあらざれば、終に此所にて死せりといふ、大字本庄に池月の水と稱するあり、病馬の飲みしより其名ありと、明治四十五年三月、同村同大字に耕地整理を行ひし時、熊岡山の西麓なる川底より古陶器杯を發掘したり、同村大字本庄列見寺趾附近の地より曾て蓋埴一個を發掘し、大字鳥羽上堂山と稱する所よりも同器二三を發掘せりとして、何れも現存す、按ずるに中古古墳の破壊せられて、祭器や副葬品のみ所々に存せしもの、發見せられたるにや、

### 四つ塚の古墳

六莊村大字四つ塚は其村名往古四箇の大塚ありしに因みて起れり、と傳ふ、然れども現存するものは村より北の田圃に一丘あり、小祠を祀りて、老松の蟠まゐる所古塚の一なりといふ、此附近は上古平瀉の地にして、夙に名族の封せられし所なれば、それ等一族の墳墓ありしならんも、中古開拓せられて、桑田滄海の變となり果てしものなるべし、

### 小堀の塚

南郷里村大字小堀の北田圃の中に小丘を存す、古へは其規模大なりしも、漸次開拓せられて、今僅かに一部分に過ぎずと、



### 榎木の塚

六三二

同村大字榎木の東水田の中に小丘あり、丘上松樹を生ず、故に松の木塚と稱す、同大字にろくふ塚、辨天塚埋塚等あり、

### 石田の古墳

北郷里村大字石田小字大門にあり、明治二十年の頃土人之を發掘して、直刀、馬具、土器等を獲たりしも、今傳はらず、石櫛の蓋石ならんと思はるゝ、巨石四個現存して、徒に古への記念を存するのみ、蓋し名族の墳墓なるべし、

### 外 穴

同大字横山城趾の南の谷に、ます穴と稱する所あり、巨岩を積み重ねたる間に一斗榭計りの角穴あり、因て榭穴と稱す、土人謂ふ古へより此穴は遠く越前の朝倉に通ずと、大蠟燭に火を點じ、竹竿の先に差して深く穴中に挿入せしに、一丈九尺の奥に至りて穴は下へ向へるを以て、それより奥は知る可からず、其構造を見るに、人工を加へたるが如く、又天工の穴の如し、人工に就りしとすれば、所謂横穴古墳の類か、後考を俟つ、

同大字に綾の神と稱する所あり、曾て四五個の祭器を掘出し、又小字磯部にても此を掘出せり、臥龍山の一帶には大小の古墳も少からざるべし、

### 北山塚

北山塚は北郷里村大字堀部の東北端にあり、圓形の古墳にして、周圍凡そ三町許、塚上穴ありて、上に小堂を置き、觀世音を安置す、天保十三年石材を取らんとて土を發きしに、石櫛の内より直刀、土器、金具等多く出でしかば、直ちに藩主に訴へ、發掘品を差出せしに、土器二個の外返戻せられたれば、函中に入れて元の如く櫛中に納めたりと、此塚古へ大樹繁茂し、晝猶暗き森なりしと云ふ、規模の大なりしより察するも尋常の古墳に異れり、

### 西 塚

西塚は北山塚の西一町にあり、瓢形にして南北に長く、南高北低、周圍約五町、雜木繁茂するも、南高の所に八幡神社を祠る、

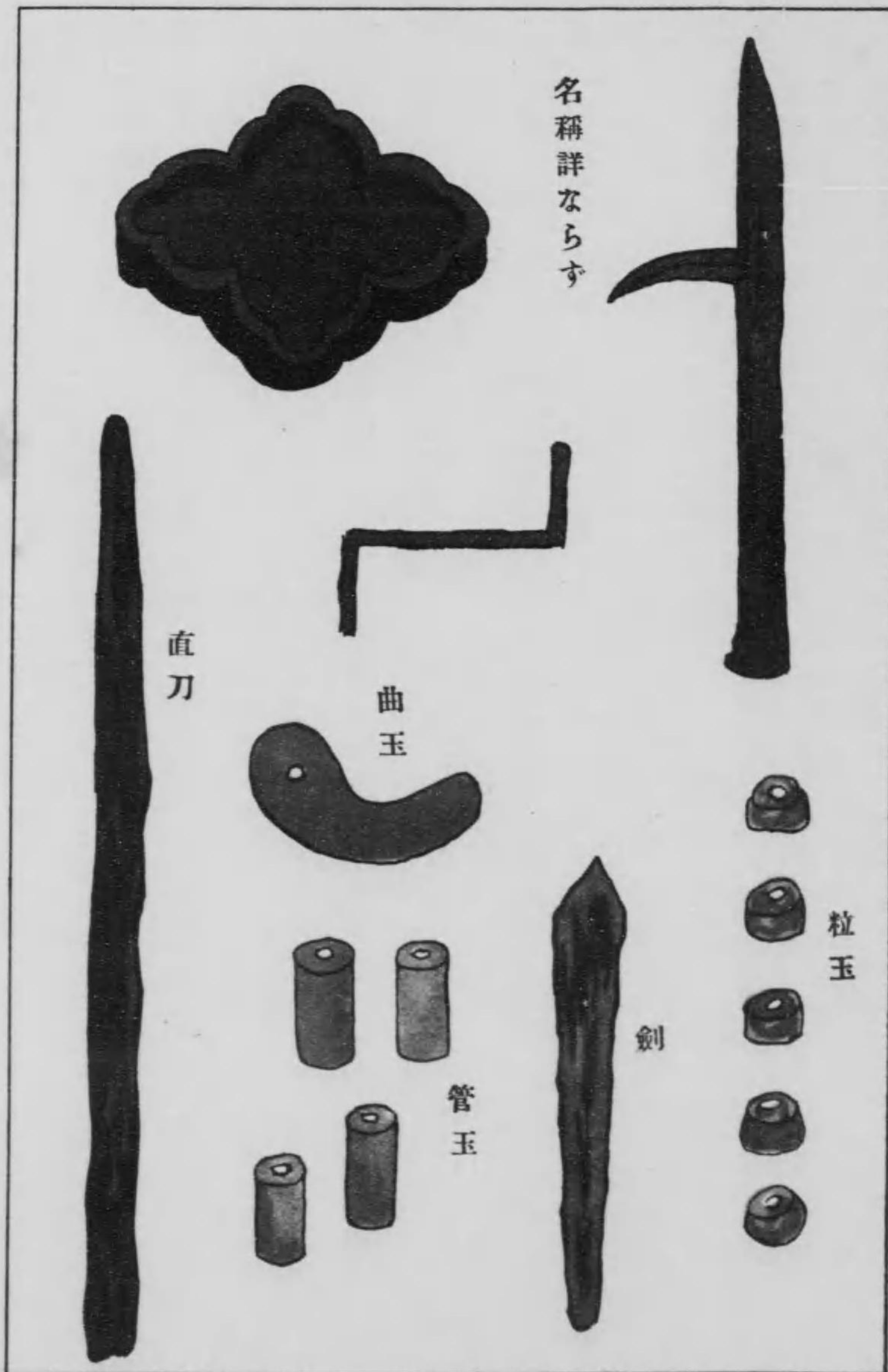
### 丸岡塚

同大字より數町西にあり、圓丘なり、

### みこし塚

丸岡塚の南にあり、土俗古へ神輿を埋めたるにより、其名ありと、按ずるに其名の「みこし」と稱するより、後に附會せしにあらざるか、





長谷の古塚

同大字の山中小字長谷と稱する所に一古墳あり、數年前土人石を掘らんとせしに刀劍、土器、人骨等を出せり、

大字堀部は臥龍山脈の西麓にありて、其村名さへ上古の部曲制度の遺稱にあらざるかと思はるゝに、其地に規模の大なる古墳數多存するは、本郡の上古を研究すべき恰好資料なるべし、但し此地上坂田に屬し、山脈に接續する村落なるを以て、上古坂田公等の一族が墳塋を築きしにやあらん、

垣籠の古塚

同村大字垣籠に前方後圓の瓢形古墳あり、南北に長く、周圍約八十間、高さ南は二丈、北は稍低く、中央のクビレ部は最も低し、古來王塚と稱す、而してそれより東北へ一町餘を隔て、神塚西北へ一町餘にしてコバイシ(小塔址)西南には小塚町と稱するありしが、現今は開拓されて田園となる、一説に王塚の陪塚なるべしと云ふ、此古墳は私有地にして、家宅に接續するを以て、現地主の先代の時後圓部尖端の開墾を始めたりしが、明治十五年該古墳を開拓せんと後圓部の頂上より掘り始めたるに、地下一二尺の所に五輪塔の最頂部(高さ一尺)と石塔婆とを發見し、夫れより數尺の下に至りて岩石ありた



り、之を除けば四五寸許り粘土あり、之を掘りたるに異様の鐵矛身と花形金具四個とを發見せり、依て一時開墾を中止したりしが、明治三十五年九月、土砂の必要より再び崩壞に着手せしに、曩に鐵矛等を出せしより直下八九尺の處に及びたるに、石櫛の一部あるを發見したり、土砂を取りて檢するに、二間四方の石櫛の南北の兩壁と蓋とを除きたる如き形狀にて、南と北とは何等の區劃なく、而して其内部は木炭を敷きつめたり、然して其木炭を除きたるに、其下より朱にまみれたる人骨、勾玉（長一寸八分、廻り一寸二分）、粒玉七十、鏡一、刀一、劍一、鐵棒數十本を發見せり、其他土器類は一品をも認めず、挿圖

參照、

古墳に關する口碑傳説は只王塚の名を存し、稚淳毛兩岐王の墳墓ならんと云へり、此地一帶は坂田の上郷に屬し、和名抄に上坂郷と見ゆる區域内なれば、上古に於ては坂田酒人真人の本居地なるべし、坂田酒人真人は息長真人と同じく、稚淳毛兩岐王の御子意富々、杼王より出でし貴族なれば、坂田氏の本居地に王の墳墓と稱するも所以なきにあらず、但し前記せし柏原の王塚にも稚淳毛兩岐王の墳墓なりとの傳説を存す、二墳共に王塚の名稱あり、此古墳が傳説の如く兩岐王の陵なるや否やは別問題とし、墳塚の規模大なるのみならず、其村名を垣籠がこゝろといふに思ひ至りて、此古墳の尋常貴人の墳墓にあらざるを知るべし、此古墳の地域を垣籠がこゝろめたるより其名出で、終には村



名となりしは鐵案として誤りなかるべし、今は其荒廢を遺憾とす。

### 岩神塚

同村大字東上坂の北岡山の東にあり、土人岩神と稱す、姉川の戦に徳川家康陣所となせり、周圍約三十間、平地の古墳なり、

同大字の人家の傍に小竹の藪なせる所に大石露出し、所々に漆喰様の痕ある古墳あり、傳説を聞かず、

### 大塚

同村大字西上坂の西南端に土地の小字を大塚と稱する處あり、古來一古墳(約七畝)ありしが、明治初年所有者開墾して田地となせり、按ずるに大塚の地名は塚に因みて起れるならん、大塚は王塚か、その附近より清水湧出し、流れて川を爲す、天神川と稱するは注意すべきなり、

此他古墳塚の存するもの猶郡内各所に多くあるべきも、土人の注意に漏るゝより、其名の湮滅して傳はらざるもの少からざるべく、又中古以來に發掘開墾の災に罹り、その遺蹟喪失せしものも多かるべし、郡内各村の墳塚に縁故ある小字名を調査せしに、其數非常に多し、但し塚名を傳ふるものを悉く古墳關係と見做す能はざるも、參考の爲め左に列記す、

狐塚	柏原村大字柏原
をく塚	同
御墓	同 大字大野木
へび塚	春照村大字杉澤
塚の合	同 村大字高番
篠塚	同 村大字大清水
石塚	伊吹村大字彌高
經塚	同 村大字上野
人塚	同
蛇塚	大原村大字間田
さしき塚	同 村大字井之口
皇后塚	同
大塚	同
塚はさま	同 村大字村居田
塚腰	同

狐塚	大原村大字村居田
ぬか塚	同 村大字野一色
青塚	同
七も塚	同
首塚	同 村大字朝日
經塚	同 村大字下夫馬
馬塚	東黒田村大字西山
東馬塚	同 村大字長岡
西馬塚	同
塚町	同
塚本	東黒田村大字北方
塚の腰	同 村大字志賀谷
經塚	同
塚町	同
塚田	同
塚腰	同 村大字大鹿



塚の腰 同  
 神の塚 息長村大字西圓寺  
 塚の腰 同 村大字新庄  
 王丘塚 日撫村大字顔戸  
 笹塚 同  
 平塚 同  
 塚の上 同  
 兜塚 同  
 埋塚 同  
 東埋塚 同  
 龜塚 同  
 塚町 同  
 狐塚 同 村大字高溝  
 小塚 西黒田村大字名越  
 塚町 同 村大字常喜

糖塚 烏居本村大字原  
 甲しん塚 同  
 石塚 同 村大字甲田  
 塚の腰 入江村大字梅ヶ原  
 塚町 同 村大字下多良  
 狐塚 同 村大字朝妻筑摩  
 塚町 同  
 東埋塚 同 村大字磯  
 埋塚 同  
 神塚 同  
 長塚 法性寺村大字飯  
 塚町 同 村大字宇賀野  
 狐塚 同 村大字長澤  
 平塚前 神田村大字加田  
 西塚の腰 同

塚の腰 同  
 神の塚 息長村大字西圓寺  
 塚の腰 同 村大字新庄  
 王丘塚 日撫村大字顔戸  
 笹塚 同  
 平塚 同  
 塚の上 同  
 兜塚 同  
 埋塚 同  
 東埋塚 同  
 龜塚 同  
 塚町 同  
 狐塚 同 村大字高溝  
 小塚 西黒田村大字名越  
 塚町 同 村大字常喜

平塚 西黒田村大字常喜  
 赤塚 同 村大字鳥羽上  
 狐塚 同 村大字八條  
 塚本 六莊村大字田  
 わや塚 同  
 塚町 同 村大字大戌亥  
 塚町 同 村大字平方  
 南長塚 同 村大字南高田  
 北長塚 同  
 塚町 同 村大字永久寺  
 塚町 同 南郷里村大字今川  
 東石塚 同 村大字宮司  
 西石塚 同  
 塚町 同  
 灰塚町 同







藉を以て目すべきのみならず、先づ崇拜すべき其村の先人乃ち己れの先祖を侮辱するの甚だしきものと謂はざる可らず、又之を宗教上より見れば、甚だしき罪惡とも認め可し、凡て此の如き碑石は歴史上より見れば其村里の爲に貴重なる微古の史料なり、之を疎畧に取扱ふものは其村の歴史を厄介視し、又は破壊すると同様なり、此の如きの徒は後世に追作せし偽系圖や偽文書を尊崇して、函裏に秘藏して寶物となす輩と相距る事一步なるべし、

土中より出でたりとて、各所に堆積せる地藏尊と稱する即ち板石に佛像を刻み出せるものあり、これも死者の供養塔にして、決して地藏尊にあらず、但し間々地藏尊の彫刻せられしものも無きにあらず、多くは彌陀、藥師、觀音、勢至、普現等の佛像を刻せるなり、中にも佛像に代ふるに地水火風空を彫りて、五輪塔の形を刻み出したるもあり、これ等は皆死者の菩提を吊ふ爲に其墓墳に建設せられしものにして、陰陽道の熾に行はれし時代に、村の四境や道の辻等に祭られし道祖神や塞の神と其形は似たるも、其主旨は大に異なるものなり、

さて其供養の佛塔が多く地中より發掘せらるゝに就ては諸説あり、一説には武家時代に甲將亡び乙將代りて其地を領するに當り、舊思想を去らしむる一策として、従前

の墓標さへ地下に埋没せしめたりといひ、又一説には戦亂の時代には其墳墓を破壊せられんを恐れて、自から我祖先の墓石を埋没したるなりと、又一説に石佛は築墓の當時より土中に埋み置きしものなりといふ、何れを正説と定め難ければ、其墓標たるは明なり、然るに後人が之を地藏尊なりとし、一所に集合堆積して厄介物となす、彼の五輪塔の飛石と併せて、其村先人の墳墓を破壊せし遺物と云ふ可し、今墳墓志を草するに當り一言を前提し、墳墓轉變の概況を説き、併せて五輪塔石佛が貴重なる其村の史料にして、又尊崇すべき先人の墳墓の遺物たる所以を記す、

### 箕浦氏の墓

柏原村大字柏原長命寺にあり、箕浦氏は京極氏の重臣にして、南北朝の頃より武名あり(中巻第七 篇参照)、柏原に居住せしを以て代々の墓は其菩提寺なる長命寺の墓域に存す、

### 北畠具行卿墓

柏原村大字柏原と清瀧との境界なる猫居坂にあり、具行卿は元弘の忠臣にして、其功績は第六篇第十五章に詳記せり、元弘三年六月十九日、此所に於て斬首せらる、近時建碑の舉企圖せられ、東宮侍講三島毅氏碑文を選ず、其文左の如し、

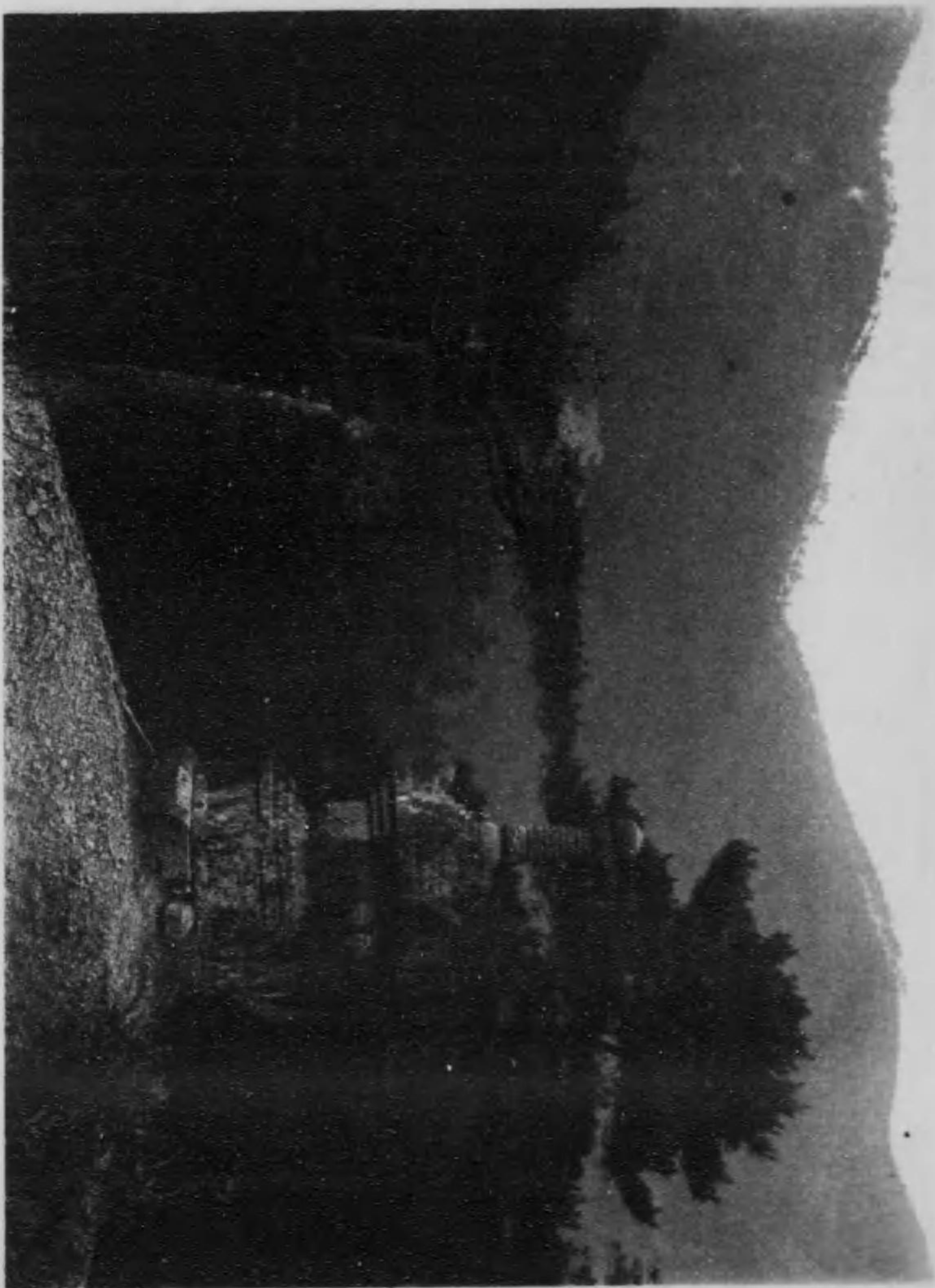
權中納言源具行卿碑



逍遙生死四十三年，山河一革，天地洞然是源具行卿辭世之偈也。何其超然解脫視死如歸也。吁嗟！人不畏死，然後可成天下大事，而大事未成，僅以四十三齡就死，豈可不惜乎哉！按史卿從二位師行之子，任右近衛中將，後醍醐天皇之在潛宮，既被親近，及即位遷權中納言從二位，元弘元年，天皇將誅北條高時，恢復天下，與卿等密謀，事覺車駕幸南都，卿追扈至笠置，與僧良忠謀，發詔徵諸國兵，兵未至，笠置陷，為北條氏所執，二年六月十九日，令佐々木高氏殺之。近江柏原村，卿臨終索筆視書此偈，逍遙以逝。後十六年，北朝貞和三年，有人建石塔于村中，猫居阪上，逸其名，蓋慕其忠表薨處也。卿薨後未幾，高時伏誅，天皇復辟，卿雖少慰其魂，而不久事敗，天下復歸武人之手。始六百年，忠臣墳墓埋沒于寒烟荒草之間，無復顧之者。明治之中興，四海清明，再仰天日，十一年十月，今上巡狩之次，勅使吊卿墓，賜祭糝料，嗚呼！卿泉下之靈，感泣欣慰何如也。於是士人大修祭典，遂相謀欲建豐碑，益表彰之，來徵余銘，蓋聞古今忠臣義士，皆天地正氣所凝生，卿雖躬既死，其正氣歸天地，萬古洞然，未曾死，則安知非其暗輔冥助，成中興盛業乎哉！宜矣！士人敬崇有此舉也。銘曰：

噫卿忠魂 磅天礪地 五百年後 夙志乃遂  
 猫居之阪 遺骸修瘞 有碑屹立 地爽松翠  
 禪祀不絕 棗盛豐備 魂兮來饗 天子攸賜

墓 卿 行 具 邑 北





明治三十年三月

東宮侍講正五位三島毅撰

### 僧貞舜墓

同村大字柏原向山の東尾にあり、成菩提院中興貞舜權律師の墓なり、貞舜は天台宗の碩徳にして、其著書天台名目類聚鈔は成菩提院在住の時の著なり、故に一名柏原案立とも稱す、應永年間の人なり(人物志参照)

### 長壽塔

同村大字柏原惠比須神社の北畑中にあり、二基の五輪塔なり、長壽塔と稱し傳ふ、其所以分明ならず、一基は全長五尺二寸、一基は四尺三寸なり、

### 遠藤喜右衛門直經の碑

同村大字須川菅生寺の傍にあり、直經は剛勇の士にして、姉川の役敵中に混じ、信長を殺さんとせしが、竹中重治の爲に遮られ、終に戦死せし人なり、碑面に利劔院忠峯義淵居士と題し、側面に元龜元庚午年六月二十八日、姉川戦死遠藤喜右衛門尉直經と題し、裏面に遠藤菅親、同姓親善建之と見ゆれば、直經の子孫建てしなるべし、

### 京極氏累代墓

同村大字清瀧清瀧寺にあり、京極氏の祖氏信以來の墓碑累々として存す、同寺は京極



氏の香華寺なること寺院志に詳記せり、關野工學博士曾て建造物調査の爲め同寺に來り、その碑が代々の建設に係るを以て、寶篋院塔の研究には得難き場所なりといひ、又京極高次の墓碑を納むる石殿も稀なるものなりといへり、

#### 藤原定家卿墓

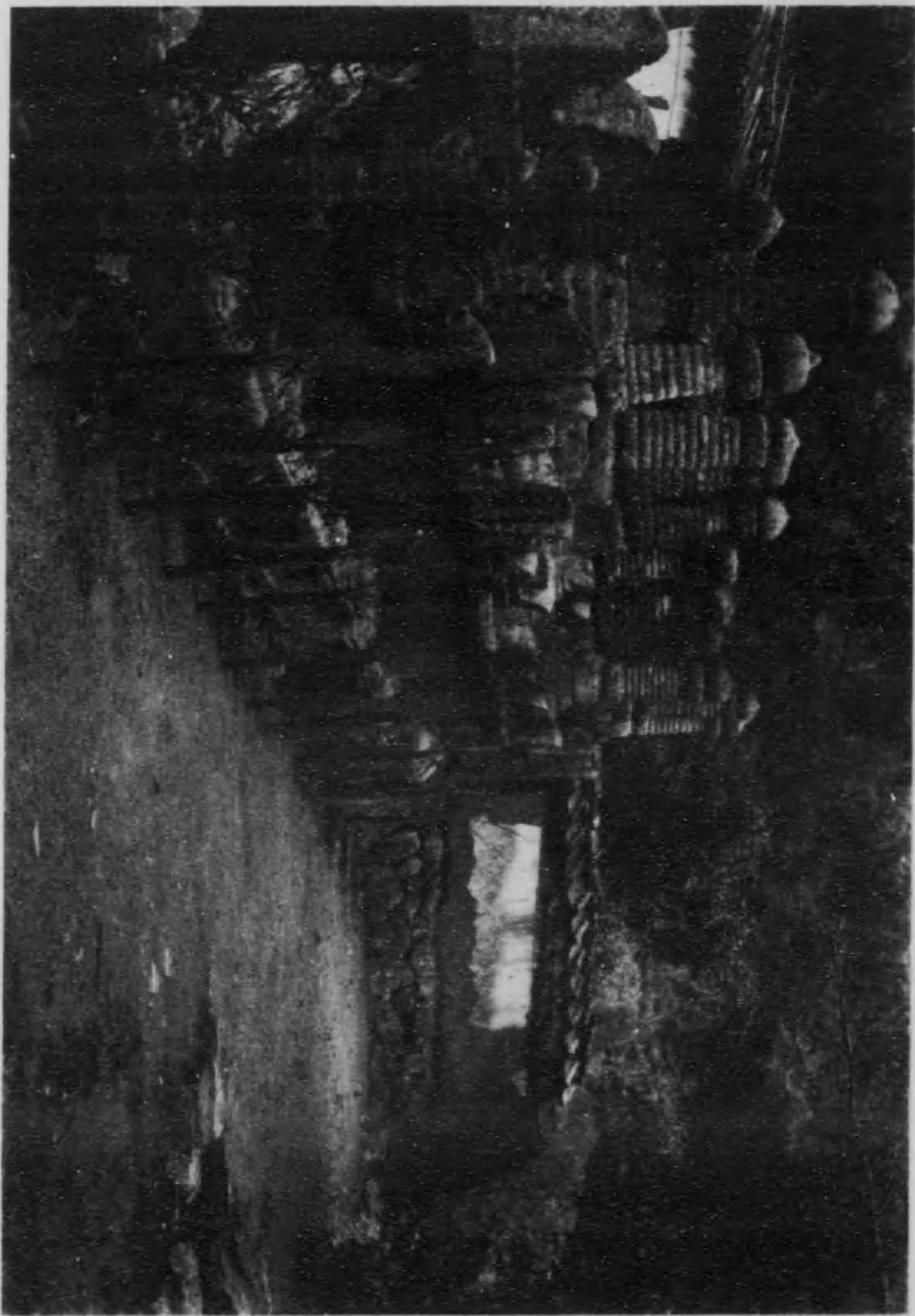
春照村大字藤川にあり、碑面に止觀月明靜大禪定門、仁治二辛丑八月二十日、正二位中納言定家と題す、定家卿の墓は比叡山の飯室にあり、大字藤川に此碑を設けられしは、定家卿曾て此地に幽棲せられしに因りて、追慕の爲に後に建設せるものならん、

#### 京極高清算

同村大字上平寺氏神の傍にあり、京極氏の墓は代々清瀧寺にあれども、高清算は上平の館に於て卒去したればこゝに葬りしものならん、

#### 行者谷の墓

伊吹村大字彌高領なる彌高山上に役行者を祀る所あり、依て行者谷とも稱す、役氏の像は石窟に藏せらるしも、其左右に大なる寶篋院塔の古塔二基あり、何人の墓なるやを傳へず、按ずるに其地伊吹四大寺の一なる彌高百坊の舊趾に隣接すれば、同寺住僧の墓にてあるべし、



京極氏代々之墓



### 僧深宥の墓

同村大字大久保長尾寺境内にあり、深宥は長尾寺に住せし豪僧なり、其傳人物志に詳記す。

### 京極滿信の墓

東黒田村大字長岡字正常にあり、京極氏信の二男滿信の墓なり、滿信は中巻第七篇に詳記したれば、之には畧す。

### 濟之君墓

同大字字御領所にあり、濟の君は其の人を詳にせず、土人は京極氏の族なりといへども、定かならず、按ずるに塞の神の轉訛にあらざるか。

### 赤尾駿河守墓

同大字字原毛山にあり、碑面に楓樹院殿秋色儀天大居士と題する石碑あり、これ赤尾駿河守の墓なりと傳ふ。

### 永正文の墓石

同村大字萬願寺の山麓に五輪塔寶篋院塔の亂石を堆積せし所あり、其中在銘の石二個あり、銘文左の如し。



(一)興禪寺殿孝先純公大居士 天文十七年戊申四月廿日

(二)銘刻五行あれども文字分明ならず、只永正十年三月九日の一行のみ讀むを得べし、何人の墓なるか、

### 西阿彌墓

醒井村大字醒井の山麓に一小塔ありて、西阿彌墓と稱するも、その傳詳ならず、

### 土肥六郎兵衛墓

同村大字枝折字燒山（やま）にあり、土肥氏は足利尊氏の時より本郡箕浦庄に住し、其族繁茂するに及び、番場村多和田村及び醒井村とに分住す、故に番場殿多和田殿醒井殿と稱し、土肥三殿の名あり、地志に醒井權頭と見ゆるは土肥氏の事なるべし、京極政經が土肥氏の領を奪ひし事は中卷第七篇第十章の七節に記せり、

### 泡兒墓

同村大字醒井西行水と稱する清水の湧出したる巨岩の上に五輪塔を存する此なり、仁安三年の建立なりといふ碑面に、一煎一服一期終、即今端的雲脚泡（うぶ）の十四字を題す、土人の口碑に、昔し此地の茶舖に一女あり、年齢二八、容姿艶麗なり、僧西行曾て此地に憩ひしが、女之を慕ふ、西行去りし後、其殘茶の泡沫を喫せしに、偶々娘めるありて、一男

兒を擧ぐ、數年の後西行再來せしに、女乃ち兒を示して由來を告ぐ、西行曰く、雀變じて蛤となり、鳩化して鷹となる、有情變じて非情となり、非情變じて有情となる、是れ天下の化育なり、今一滴の泡變じて此兒となる、我兒ならば元の泡に反れど、水上は清き流れの醒ヶ井に浮世の垢をすゞぎてや見んと即吟せられたれば、彼の兒は消えて、元の泡沫に歸せり、西行即ち塔を建て、自から前記の文を書せしなりと、

### 岡本機庵碑

同村大字上丹生字丸尼の丘上にあり、岡本半助の墓なり、法名長興院殿機庵正全居士、元和八年十二月七日寂す、半助は機庵と號し、井伊氏の重臣なり、明治維新の前は井伊侯毎歲使を遣はして展墓せしめたり（古蹟名勝誌参照）

### 九層の塔

同村松尾寺本堂の西にあり、九輪の寶珠落ち塔角頽れ、形體稍々荒廢し、古色蒼然たる石塔なり、按ずるに古き住僧の碑なるべし、

### 順慶寺塚

息長村大字箕浦の南、天の川の畔にあり、一椿樹を存す、相傳ふ元龜年間江北十箇寺の僧徒が、門徒を率ひて信長の部下堀氏を攻めし時、上坂順慶寺珍乗の戦死せし處なり、





依て順慶寺塚と稱すと(中巻第九篇第八章参照)

### 新庄氏累代墓

同村大字寺倉總寧寺寺中の山上にあり、新庄氏の事は第九篇第六章に記したれば、此には省畧す、同寺内に畑氏一族の墳墓も存す、

### 今井氏墓

同村大字西圓寺の田の中にあるは今井肥前守の墓にして、今井權六の墓と稱するは山腹にありと見ゆ(近江奥地誌略)第八篇第九章に記せし太尾城夜襲に味方討ちに死せし今井權六定清の墓なるか、

### 九重古塔

息郷村大字三吉八坂神社の南に九重の石塔あり、高一丈三尺下層の幅三尺餘、臺石の四方に四佛を刻す、其形式挿入寫眞の如し、建設の年代并に其由來詳ならざれども、様式より推考すれば鎌倉時代以後のものにはあらざるべしと、

### 樋口氏墓

同村大字門根字狩山に二基の碑あり、樋口墓と稱す、苔蝕の下僅かに樋口の文字なるを知る、按ずるに堀氏の重臣に樋口三郎兵衛あり、其一族の墓なるべし、



### 井口彈正塚

井口彈正は淺井亮政の重臣なり、亮政六角定頼と地頭山に戦ひし時戦死せし人にして、其墓地頭山にありと(淡海記)今慥かに其碑を知り難し、

### うば塚

同村大字樋口の内元樋口の田畝にうば塚と稱する所あり、其附近の土中より女の毛髮、筭等多く出づ、戦國時代武士滅亡の時、女房等の惨死せし遺蹟なるか、

### 北條仲時の墓

北條仲時は越後守と稱し、京師北六波羅の守將なりしが、元弘三年五月、足利尊氏後醍醐天皇の詔を奉じ、六波羅を攻めし時敗走して、同月九日本郡番場の一向堂に自殺せり(中卷第六章)從士四百餘人屠腹して死す、鮮血流れて川を爲す、血川の名今に存す、主從四百餘人の墓碑は米山の麓にありしが、享保中井伊氏命じて特に仲時の墓碑のみを街道の西なる山嶺に移さしめたり、爾後其山を六波羅山と稱す、一基の五輪塔現存す、全高五尺餘、臺石方一尺五寸、

### 北條氏從士の墓

北條高時の將卒として鎌倉幕府の出張所なる京師兩六波羅の守將北條仲時、北條時